
ディメイション アドベンチャー！

宮座頭数騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディメーション アドベンチャー！

【Nコード】

N5685I

【作者名】

宮座頭数騎

【あらすじ】

次元の神様ディメーション「次元dimensionの誤字ではない」。彼はいろんな異世界を渡り、異世界を破壊する次元の悪魔と戦う。これは、後に『次元の英雄神』と呼ばれる彼と、その友達となった少年の物語。

序章『始まりは異様から』（前書き）

どうも、微妙に編集しまた投稿することになりました。

序章『始まりは異様から』

日曜日の朝、天気は良好、しかし僕の気分は最悪だった。

目が覚めて上体をベッドから起こしてみれば、部屋のドア手前で、どっかのアフロダンサーみたいに腰をくねらせ右手を天井に指差している男がいた。

深紅のロングジャケットに黒い長ズボン、機械的な鉄のブーツにグローブ。頭にも同様のベッドギアをかぶり、桃色の艶やかな長髪を露出させていた。

見るからにこの畳部屋の雰囲気合わない変質者だ。

「あ、あの……誰？」

僕は恐る恐る男に訊ねてみた。

> i 1 7 2 4 3 — 2 9 1 <

すると男は人形のような整った、しかし左目元から唇の位置まで糸で縫われた後がある特徴的な顔を僕に向け、不敵な感じに口元を吊り上げた。

「起きるの遅えぜえ！ 名前が平凡、山田良助」

「え？ 何で僕の名前を——て、ほっとけ！」

名前が平凡は余計だ。

「お前があんまり起きるの遅いから、ずっと踊ってたんだぜい。まあ、あつたよ、そんな寝助ちゃんだと学校遅刻決定だなあ、こりゃあよ！」

クルリと一回転し、無駄にスタイリッシュにポーズを決めて、男は僕にビシッと指を差す。微笑む際に唇から見える八重歯が、キュピーンと変な音を立ててキラめいた。

「今日は日曜日で学校は休みです。てゆーか、何なんですかあなたはいきなり！ 一体何者ですか！」

「え？ 俺が何時からここにいたかって？」

いや、それ聞こうとは思ったけどさ、質問の順を飛躍するなよ！

「しょうがねえなあ、良ちゃんは」

「良ちゃん言うな！ 初対面だろ！」

「聞いて驚きな！」

「僕の話聞けよ！」

「俺は深夜二時から、お前が起きるまでこの部屋で踊ってたのさ！」
「ええ！」

そんな時間から、全然気が付かなかったよ。

「てゆーか、何故僕の家！ それに、さっきから聞いているけど何者なの！」

「俺か？ ふふん。俺は——」

男はいきなりまたクルリと一回転して天井に右手を翳すと、高らかに名乗った。

> i 1 7 2 4 4 — 2 9 1 <

「デイメイション！ 次元の神様デイメイション・ザ・カオシックス！」

「次元の——神様？」

ぶっ飛んだ冗談にも程があるぞ。次元の神様って、どこの神様だよ。

「どこって、だから次元の神様だ」

「ハイハイそうですか——って、えっ！」

今、何で僕の考えてることがわかったの！

「神様だから当然！」

してやっつたりの笑顔で、親指を立てる次元の神様。

何か見ててムカつく。しかし。本当に神様なのか？

それ以前に次元って……嘘臭いよ。

「臭くない。臭わないない」

「いや、その臭いじゃなくて」

て、どの臭いだ。自分で言っただけで訳解らなくなった。

「とにかく、デイメイションさんが百歩譲って次元の神様だとして、

何で僕の家、それも僕の部屋で踊ってたんですか？」

僕は気を取り直して、もう一度順に沿って質問する事にした。

「うん、よく聞いた。よし、聞いて驚け！」

「ハイハイ……」

よく聞いたって、その質問を待ってたんなら、最初の質問にも答えろよ。内容に大差ないだろ。おかげで遠回りしてんじゃないか。

「俺がこの部屋で踊っていたのは——ノリだ！」

「ノリかよっ！」

どこまでふざける気だもうつ！

「つつのは冗談だ。実はある“モノ”を追って次元を開いてこの世界に来ただけだな。その時に出た場所がこの部屋でさ、俺はどうすればいいのか困ってよ。とりあえず部屋の中を探って本棚に隠してあった官能小説発見して読んだり、パソコン起動させて面白い動画観たりして、飽きたから踊って暇を潰してたら、お前が起きたってわけ」

本棚の隠し引き出し、机のパソコンと順を追って淡々と説明するデイメイションさんに、僕は手をポンと叩いて頷いた。

「なるほど——って、何勝手に人の部屋探ってるの！ 行動がほぼ空き巣じゃんか！」

「安心しな。お前がなかなかマニアックなエロ小説を持っているのは、俺とお前だけの秘密だ！」

何言ってるの、この野郎は！

「ちなみに、お前の名前が平凡だと解ったのも、部屋を探ってる時だぜ」

平凡が余計だったの！ せめて名前が解ったとだけにしろよ！

「おいおい、心でツッコミ入れるなよ。それじゃあ伝わらねえぜ」

伝わってんだろ。心読めるんだから解るだろ！ 顔にも出してるだろ、不快な気持ちを！

そんな僕の気持ちを知っているであろう神様は、まだまだ甘いな
と言い表すかのようにチツチツと指を振ると、腕を後頭部で組み、
にやけた顔で口を開いた。

「んまあ、それはどうでもいいとしてだ」

「どうでも良くないよ……」

「とりあえず、着替えて準備してくれよな」

「は？」

人が沈んでいる時にまた、いきなり意味が解らない、どうい
うこと？

何で着替えるのさ。

「俺はこの世界に来て、此処がどんな場所か解らないんだ。だから
案内してくれよ」

「……嫌です」

格好からして変なのに、こんな人と一緒に歩いていたら、僕まで
変に見えてしまい兼ねないよ。

「安心しな。お前は凡人だから一緒とは思われないさ」

爽やかな微笑みを向けてポンと僕の頭に手を乗せる神様。何その
理屈。しかもそれって何気なく、遠まわしに僕をバカにしてない？
「してないよ。あ、いや、しているかもしれない。あ、いや、やつ
ぱりしてないかもしれない」

「どっちだよ！」

どっちにしても、そう真剣に腕組んで俯きながら考えてもらって
も僕は困るんだけど。失礼極まりないでしょうが。

「せめて、その格好どうにかありませんか」

アキバとかなら、何とかコスプレとか言って不自然さを少しは力
バー出来る……と思う。しかし此処は西田町と言う、アキバからも
遠く離れた場所だ。だから、彼自身に格好を変えてもらわないと、
外へは行けない。てゆーか、出歩きたくない。

「なるほどなあ。まあ、お前の世界じゃ俺の格好が異質なのは仕
方ねえか。だがよ、この体は人のように着替えてる訳じゃねえんだ

な」

「え——で、うわあああつ！」

く、首が外れた！ カチツと音がしたと思えば、いきなり首が三百六十度回転して首がボンと外れたよ！

首の中から機械が覗いているし。もしかして本当はロボットなの？

「ああ、説明すんの忘れてたな。俺には実体がねえんだ。本当はこんな感じの思念体みたいなものなんだぜ」

そう言うとき、デイメイシヨンさんの体からモクモクと、赤色のガスのようなものが出て来た。ガスが抜けた後、首無しのは体が糸が切れた人形のように倒れてしまった。

「てゆうか、これ人形だし」

「うわっ！」

ガスが喋ったのか今？ よく聴くとデイメイシヨンさんの声みたい。そうなると、やっぱりデイメイシヨンさんの言う通り、ガスが本体なんだ。

「まあ、そういうことだ。俺はお前の世界に来る前から、いろんな世界を歩き来してるんだ。ちなみに、お前の世界に来るのは八回目な。だけど、この日本つつうのに来たのは今回が初めてだ」

そうなんだ……って、それなら世界共通の一般常識くらい知ってるはずだよな。何故、平然と不法侵入かつ空き巣紛いな行為を？ しかしそんな疑問はあつさりスルー。デイメイシヨンさんは自分のことを優先に語り出す。

「俺はどんな存在にも乗り移って意のままに操れるんだが、当然、操られるやつが嫌がつてさ。仕方ないから、科学だの魔法だのが発展した世界で体造ってもらったんだ」

「それがコレ？」

僕は抜け殻同然の人形を指差して訊ねた。

「そつ。何でも戦闘能力はその世界では最強で、一日で星を滅ぼせるだのどうのこうの言ってた。アンドロイドなんだとさ」

危なっ！ 核兵器が目の前に置いてあるようなもんじゃなかコレ。

そんなもん造ってあげるなよ。どこのマッドサイエンティストが造ったんだ！

何かこの話聞いた瞬間、畳に転がってる頭が。精気が抜けたような人形の無表情が無駄に恐く見えるよ。

「とりあえず！」

「うわぁ！」

いきなり立ち上がらないでよ。いつ人形に戻ったのさ！

心臓が飛び出すかと思ったよ。まったくもう。

そんな心の訴えを出してる僕を尻目に、デイメイションさんは首をカチツとはめて元に戻した。

「ここを案内してくれよ」

につこりと、無邪気な笑顔を見せるデイメイションさん。仕方ない。ある程度事情を知ったんだ。断ると後がヤバそうな気がするし、どっちにしる散歩するつもりだったわけだし、案内するか。

そうして外に出ただけで、大変なのはここからだった。

「おお、良ちゃん見る。人がゴミのようだ！」

コラァ！ 指さすなよ。周りの人に失礼だろ。しかも見ているだろ！

嗚呼、恥ずかしい。とんでもなく恥ずかしい。周りの視線が痛い。そこ女の子達、写メ撮るな！

僕達は今、公園に向かう為に商店街を歩いているのだけど、この神様と来たら何て落ち着きのない。全く、子供かあんたは！

「落ち着けブラザー。俺は今、興奮しているぜ！」

お前が落ち着けよマジで！

てゆーか、無駄にターンステップしてジョジョ立ちっぽく大袈裟なポーズして指差すの止めて下さい。僕まで変人の仲間入りになっ
てしまいます。

「手遅れだ」

この野郎！

「ふんふん、ふふん」

「鼻歌を鳴らしてダンスしながら歩かないで下さいよ」

じっとしてるの出来ないのだろうか。さっきからずっと腰をクネクネさせたり、ムーンウォークで歩いて電柱に後頭部からぶつかったり。とにかく無茶苦茶だ。

案内しろ言っても、お勧めの店とか紹介しても全く別の方向に顔を向けて、「ありや何だ？」と言い。仕方なく説明し出した瞬間には、「おお、あれ何だ！」と自動車や飛行機を指差す。

この野郎――。

「ちゃんと聞け！」

すぐ別の物に興味持つな！

せめて説明終わってから聞いてくれよ。

「冗談だぜ。実は全部知ってんだなコレが」

「は？」

「この世界に来んのは八回目だかな。全国共通の店や乗り物はある程度知ってるし、お前のパソコンのインターネットで日本を調べた」

オイイ！ 僕の説明や紹介不用じゃねえか！

この人知っているクセにワザと聞いて僕をからかっていたのか。性格悪いぞ！

「へっへへ。よく言われるぜ！」

筋がね入りかよ！

何なのこの人。もう疲れる。だいたい僕と一緒に商店街歩く必要ないじゃんか。冷静に考えてみたら解る事だったのに、この神様のテンションに気が向いてて失念してたよ。

「へへ、確かに必要ねえかもしれんねえけどさ、こうやって出会った者に案内してもらうのは、俺の習慣なんだ」

「習慣？」

「俺は次元を切り裂いて世界に来て、その際に出会った存在とはフレンドリーな関係を作っておくのさ。縁つてのは大切だから」

デイメイシヨンは楽しそう言うとウインクした。

「次にこの世界に来て、俺を知っている人がいる。親友がいる。そう思うと嬉しいじゃねえか」

「デイメイシヨンさん……」

この時、笑顔で話すデイメイシヨンさんが凄く輝いて見えた。元々明るい感じの神様だけど何て言うか、この話をしているデイメイシヨンさんから、雄大な威厳さと言うか。尊敬に価する不思議な感心を僕は抱いた。

何故だろう、この神様の真っ直ぐな瞳を見ると、熱い何かが胸の中で渦巻く。会って間もないはずなのに、まるで、昔からこんな彼の心の深いところを知っていたような、それを目に出来たことが懐かしくて、嬉しいような――

そんな、不思議な感覚が膨らんでいた。

それからお昼頃――僕とデイメイシヨンさんは公園に到着した。少し公園内を散歩してから、今はベンチに腰掛けている。周りの人の痛い視線も相変わらずだけど、もう慣れてしまった。と言うか、気にするだけ無駄だし疲れるので、諦めました。

「そういえば、すっかり言いそびれてたけど、デイメイシヨンさんは何でこの世界に？ 確かある“モノ”を追ってきたとか言ってたよね」

「ああ、そうだな。まあ、まだそいつの場所が特定出来ないんだよな」

「その。ある“モノ”って何です？」

僕が問い掛けると、デイメイションさんはピクリと顔を上げて勢いよくベンチから立ち上がった。

「奴だ！ けっこう距離はあるが、間違いない」

「え？ 奴って？」

「へへ——口で全部説明するより、実物見せた方が手っ取り早いかな」

「え？ ちょ！ 何——て、うわああああ！」

デイメイションさんは戸惑う僕を片手でヒョイと摘み背中におんぶさせ、物凄いスピードで走り出した。体が鯉のぼりのように宙を浮く。あまりの速さに僕の体はデイメイションさんから剥がされそうになる。僕は振り落とされないよう、腕を彼の首に巻き付けしがみついていた。

「というか、風圧で息が出来ない！」

「おっと、風がキツイか！ フィールド！」

デイメイションさんが叫び、正面から透明感のある薄く蒼い光の壁が現れる。すると今まで強く吹き荒れていた風圧がピタリと止んだ。おかげで息もでき、眼も開けられるようになったのもつかの間、僕はデイメイションさんの足の速さに驚愕してしまった。

高速道路の中を、周りの車をあっさり抜き去って行くデイメイションさん。スルリと車と車の間を何の苦もなく曲がりくねって追いついていく。

「もちつと飛ばすぜ！ しっかり掴まってるよ！」

そう言つと、デイメイションさんは加速し出した。あまりの速さに、もはや周りの世界は凝視すら叶わない。これが光速の世界というのだろうか？

そんな時間も速さ同様瞬く間に過ぎ去り、デイメイションさんは速度が下げてゆく。僕の視界も良好になり始めたところで、デイメイションさんが愉しげに喋り出す。

「よし、着いたぜ！ 左側見てみるよ良ちゃん」
「え？ あ、な、何あれ！」

言われた通り左側を見た僕は、その光景に目を疑った。一見、路線を走る新幹線だと思っていたのだが、よく見たら先端が青虫のような形状をしていて、その後ろの車両箇所と思われるところから、沢山のメタリックな機械の手が飛び出ている。

まるでこれは、機械のムカデだ。デイメイションさんは僕を背負って、その機械ムカデの横を走っていた。

「ふふん。驚いたろ？」

「何ですか！ あのムカデのような怪物は！」

「あれが俺の追って来た“モノ”さ。俺は“次元の悪魔”って呼んでる」

「次元の悪魔？」

僕が愕然と呟く中、次元の悪魔は腹部から出ている機械の手を、こちらに振り下ろして来た。

「おっと！」

デイメイションさんは加速して攻撃を躲す。攻撃が叩きつけられた地盤が爆発を起こして砂利が飛び散る。そんな中でもメタリックなアームはしつこく、容赦なく追撃を掛けて来る。それどころか、その手から銃口みたいな形状の機械が飛び出し、緑色のレーザーを放ってきた。攻撃が過激を増してきた。

「はっは！ 本格的にきやがった！」

デイメイションさんはレーザーを跳躍して回避すると、機械ムカデの車両の側面に立ち駆け抜ける。

何で落ちないのだろうか？ まるで磁力で引っ付いているかのようだ。視界は水平に傾く中、デイメイションさんは楽しそうに口を開いた。

「俺のように次元の中を行き来し。来た世界に存在する個体に取り憑いて姿形を変えて暴れ回る破壊衝動の塊。そいつが次元の悪魔さ。

俺と似て非なる存在だ」

「え？ 取り憑いてるって事はコレもしかして新幹線なの！」

「みてえだな！ へっへ、デンジャーでスピーディーな雰囲気ぶん
ぷんだぜ」

いや、意味が解らないよ。何でそんな楽しそうなのっ！ 危機感
無さ過ぎだよ！

「危険を楽しむのも娯楽の一つさ。ギャンブルにもあんだろ？ ロ
シアンルーレットとか」

「僕はそんな娯楽はしたくなあい！ て、きたよデイメイションさ
ん！」

それ以前に何でロシアンルーレットなんか知ってるのさ！

「ほっと！ ま、安心しな。俺がいる以上、お前は絶対に死なない
！ だからこのスリルを楽しみな！」

「楽しめるかああ！ だいたい娯楽にならないだろコレエ！」

振り下ろされる手をすべて避け、また地に足を着けて駆け出すデ
イメイションさん。車両側面が破壊された反動でガラスの破片が飛
び散っている。危ない、と思わず眼を伏せたけど、さっきバリアの
ようなモノを張っていたおかげか、当たる音だけを鳴らして破片は
風に乗って何処へ去って行く。

しかしデイメイションさんの、その根拠の無い自信はいつたいど
こから来るんだか。等と思っていれば、何か手がより増えているし
しかも蛇みたいになってまた襲ってきた。

「よっと！ ほっと！ はっとな！」

デイメイションさんはそれを難なく飛んで走って、しゃがんでま
た走ってとかわして行く。

声の明るさからして、明らかに楽しんでいる。

「て、遊んでないでどうにかしてえー！」

上下運動が激しくてキツいよ。必死にしがみついている僕の身にもなつてよ！

「そうだな。そろそろ攻撃しねえと、被害がデカくなるな」

被害がデカく？ あ、そうか、このまま行けば機械ムカデが街の駅に着いちゃう。そうなったら、駅にいる人間を始め、多くの被害が出てしまう。

「じゃ、じゃあ早くどうにかしないと」

「焦るなよ。何が起きても問題ないない！ それが俺のモットーさ」
いや余裕持ちすぎだって、早くしないとヤバいでしょ！

今はまだ富士山とか見えて自然が目立つ場所だから大丈夫だけど、このまま進んだら都市に着いちゃうんだよ！

「わかつてるって良ちゃん。よっしゃあ！ なら一気にキメるとしますか！」

気合いの入った声を出すと、デイメイシヨンはいきなり速度を落とした。

「え？ 何で？」

「良いから見てな！」

不可解に思う中、デイメイシヨンは機械ムカデの攻撃を避けながら、さらに速度を下げていく。そして、機械ムカデの後ろ、つまり車両最後尾と並んだ。

すると、デイメイシヨンはチョンと跳んで、再度車両の側面に立って疾走し始める。ここからデイメイシヨンさんが取った行動に、僕は驚愕した。

「いつくぜえええ！ うりやりやりやりやりやああ！」

徐々に速度を上げながら、デイメイシヨンさんは機械的な黒鉄のグローブで拳を作りグルグル腕を回す。

まるでグルグルパンチの動作だが、意外にも機械ムカデの腕をあつさり両断していく。

「す、凄い！」

「いよっし、左側も行くぜ！」

デイメイシヨンは言うと、同じ手口でもう片側の車両から出ている機械ムカデの腕を破壊して行く。全て破壊した後、機械ムカデの正面を駆け抜ける。

「後は正面だ！」

青虫の頭を象ったような機械ムカデには怖気が走った。そんな怪物じみた機械ムカデの口が縦にパカッと開く。中央に何か青白い光が集まっているのが見えた。

「デイメイシヨンさん！」

何か嫌な予感がして僕は叫んだ。案の定、機械ムカデは開いた口から青色のビームを放ってきた。

「おっと、へへ。タイミングドンピシャだぜ！」

デイメイシヨンさんはとくにお見通しだったようだ。そりゃあそうか、僕の心を読んでいくくらいだしね。というか、寧ろそうなるのを狙っていたみたいだ。放たれたビームを跳躍して避け、デイメイシヨンさんはクルリと振り向く。そして拳を作った右腕を左手で支えながら機械ムカデの開いた口に向けた。

そして――。

『ぶっ飛べえええ！ ブリット・フィスト！』

妙にエコーが掛かった声で叫ぶと、拳を作った黒鉄グローブがロケットパンチのように右腕から発射され、機械ムカデの口から最後尾までを貫いた。とんでもない破壊力だ。やっぱり星を一日で壊滅させられるのは本当かもしれない。

「ハッハアツ！ どんなもんだい！」

戻って来たグローブを右腕に力チツとはめ、着地して駆け出しながらハシヤぐデイメイシヨンさん。ハシヤぐほどガキじゃないですよあんだ。

「童心を忘れちゃあいけないぜ良ちゃん。若えんだからもつと人生楽しみなって！」

僕は少なからず、デイメイシヨンさんより楽観的になるのは無理です。てゆーか、ここまでぶっ飛んだ楽観者になりたくないよ――

って、あれ？

「デイメイションさん！」

「ああ、解ってるよ」

貫通して穴が開いた機械ムカデが、止まる気配は無く、寧ろ速度を上げている。ついでに穴をよく凝らして見たら、何と人が何名か乗っているのが見えた。

眠っていると言うか、これは気絶していると言った方が正しいかも。

「そりゃあ、走ってる新幹線に取り憑いたんだかなあ。人は当然乗ってる訳だ」

「オイッ！ あんたまさか解ってて攻撃したのか！」

「すげえだろ。エッヘン！」

エッヘンじゃねえ！ あのロケットパンチ当たっていたらどうすんだよ！

「ノンノン、ロケットパンチじゃねえ。ブリットフィスト。それに安心しな、それらを配慮してぶち込んだんだ。」

「え？」

僕が疑問に思うと、デイメイションさんは自分の紫色の瞳を指差す。

「俺の眼は、対象物をスキャナー出来んだ。更にそこから計算してどうすれば良いのか割り出せるスーパーコンピューターが詰め込まれてる」

そんな無茶苦茶な。あんたロボットじゃ——あ。

「そつ。アンドロイドって言っただろこの体」

そうか、何にでも取り憑けて、意のままに操れる。つまり、その存在で出来る限りの動作が可能なんだ。デイメイションさんはアンドロイドの体に憑いているのだから、そういった機械的なことやスーパーコンピューターが使えても何も不思議じゃない。

「その通り！ んじゃあ、仕上げと行くぜえ！」

言い放つと共に、デイメイションさんは速度を減速させる。そし

て徐々に後ろの機械ムカデとの差が縮めて行く。

「ど、どうするの!」

「こうすんのさ!」

面白がるように述べるなりデイメイションさんはいきなり振り返る。そして機械ムカデを押し止めると言う暴拳に出た。

「ちよつと! む、むりでしょおお!」

「うおおおお!」

線路が激しく、金属の摩擦音を奏でている。足下から火花が散り行く。そんななかデイメイションさんは押し止めようと力を込めていた。

「うおおおおおお——つと、力む振りしたり」

「ええ!」

フリだったのかよ!

「雰囲気出した方が燃えるっしょ?」

「遊ぶなあああ!」

ふざけてないで、止められるなら止めてよ!

「止めるさ、だけどすぐには危険だ」

「どうして? ——あ!」

そうか、突然止めてしまったら、中の人達の体も突然の急停止のGが掛かってしまい、車内で大怪我を負う可能性がある。

「ご名答だぜ! 中をスキヤナーする限りじゃあ。まだまだガキンチョもいる。下手に急停止させたら——もう解るだろ?」

「うん、じゃあゆつくり減速させて行くしかないのか」

「そういうこつた。と言つても、そろそろ駅だけだな」

「うわあつ! かなり遠くだけど都市が見える。ヤバイよこれ、急がないと大惨事になるよ!」

「へっへへ。まあ、見てな」

デイメイションさんは自信に満ち溢れた笑顔を一旦僕に向けると、機械ムカデに視点を戻し、活のこもった声を発し、力を入れた。機械ムカデの速度が、徐々にだが落ち始めて来た。

そして――。

「ふう。停車したな」

「な、何とかね」

僕は今、駅舎の線路にいる。デイメイションさんは腰に手を当てて首を鳴らし、僕は腰を落として溜め息をついてた。

周りの人が、僕達と完全に沈黙した機械ムカデを困惑に動揺を露わにし眺めている。そんな中、突然機械ムカデから青色のガスのようなモノが噴き出てきた。

「もしかして、あれって」

「ああ、本体だな。よつと」

デイメイションさんはガスまで跳躍して接近すると、腕でガスを払うように振るった。腕から赤い光が放たれ波紋のように広がり、ガスを飲み込んだ。

後で話してくれたのだが、今のは強制転生と云う神術らしく、邪悪な思念体である次元の悪魔をその名の通り強制的に浄化させ、この世界か付近の異世界でまた新しい純粹無垢の命として転生を遂げさせるのだという。

そういうのを聞くと、改めてこのはっちゃけた人が神様だってことを認識させられる。

「これでよしと、ニイ！」

着地すると、僕に満面の笑みを見せてピースサインを贈った。気が付けば僕もつられ、デイメイションさんに笑顔を返していた。

この後、警察やら何やらと面倒な事が起きると思いきや、デイメイションさんが不思議な水色の光を放った事により、僕以外の周り

の人達はさっきまでの記憶を忘れてしまった。

何で壊れた新幹線があるのか、乗客や車員達が無事なのか、結局彼らは思い出せないまま、この出来事は謎の事故と言う形で事は済んだ。

そして、夜。もう人気の無い駅舎。ベンチに僕は腰掛けていた。

「ねえ、デイメイションさん」

「ん、なんだ良ちゃん」

目の前でロボットダンスをしているデイメイションさんに、僕は訊ねた。

「デイメイションさんって、今日みたいにいるんな世界であんな怪物と戦ってるの？」

「ああ、そうだぜ」

「どうして？」

そう問い掛けると、デイメイションさんは一旦首を傾け考える仕草を見せると。

「うーん。忘れた」

相変わらずのパツとした明るい笑顔で答えた。

「わ、忘れたって。本当に理由は無いの？」

「まあ、何かあいつらはほつといてたら危険かなって気がして、倒さなきゃって何となく戦ってたんだ。飽くまで暇つぶしだな」

これほどの事が暇つぶしって。その神経は本当に呆れるよ。

「ああ、そういえば、俺は次元の神様って自称したけどさ。次元の悪魔も含めみんな、いつの間にか名付けられたんだ。何時、何処で、誰にかは忘れたけどな」

「そうなんだ……」

「へへへ、考えたら、いろいろ謎だらけだわな」

何がそんな楽しそうなんだか。

「デイ、デイメイションさん！」

僕の家にもまたデイメイションさんは現れた。

僕とデイメイションさんのハチャメチャな物語は、まだ始まったばかりだ。

序章『始まりは異様から』（後書き）

どうもです。久しぶりに再投稿しました。前回読んで評価をくれた方々、楽しんでくれた方々、本当に申し訳ありませんでした。急遽消去に至った理由は、この場では文字数が足りないのでお話できませんが、間接に申し上げるなら、設定の大幅変更によるものです。ですので、前回と若干内容や登場人物が変更されていますので、御理解をお願いします。

第一章プロローグ『シリアス世界に神様（アホ）降臨！』

クランパイア——俺の生きる世界。

この世界は今、闇に染まりつつある。

二つの大陸アガクスとレガリカでは、いろんな生物が生き、平和に暮らしていた。

しかし、ガンと呼ばれる種族が繁栄していたアガクスのマグネリア帝国から突如、魔王マダンと呼ばれる存在が名乗りを上げ、帝国の戦力を使い、各国に戦争を仕掛けたのだ。

異常で圧倒的な強さを持つ兵力に、アガクスとレガリカの両大陸の国々は、ほぼ完全に鎮圧され、俺のいたイグ王国も亡国と化してしまった。

俺の父であり、レガリカ最強の剣士だったクラウ王と、最高の魔導師であった軍師ラナは勇敢に戦うも、三日三晩の激戦の末敗北し捕らえられ、民衆の前で処刑された。

王族は絞首刑となり、全員が死んだ。
いや、辛うじて俺だけは生き残れた。

俺を昔から影で守っていたクシャと呼ばれる隠密護衛部隊の生き残りであり、幼なじみのハノが、処刑される前に助け出してくれたのだ。

おかげで俺は生き延びることができた……いや、無様に落ちぶれてしまったと言う方が正しいのかもしれないな。

あの時は自分の無力を呪った。それは今でも忘れられない。絶望に浸る民衆の中に紛れ、処刑される家族をただ見るだけしかできなかった悔しさは。

それから俺は、彼女と共にマダンを倒すことを誓い。王国からの逃亡の際手に入れた、王家代々から伝わる家宝の魔剣、ソルデファアを片手に世界中の魔物やマグネリア帝国軍と、激戦を繰り広げた。

いろんな国々の英雄達と共に協力し、数々の困難を乗り越切った末、遂にマダンがいる帝国の領土まで辿り着いた。

もう、勝利は目前かに見えた。

だが――。

「くそ……バカな……」

大剣こと魔剣ソルデファアを支えに立っている俺は、目の前の光景を疑った。

焼け付いた野原、火薬や血の匂いなどが充満する戦場は、多くの仲間の屍により血に染まっていた。

優勢だった俺達連合軍が、今、目の前の脅威に壊滅寸前まで追い詰められていた。

その脅威とは、リザードマンだ。

戦闘能力はエルフやドワーフを遥かに凌ぐ爬虫類族。脅威的な身体能力は、魔導師が魔法を使う前に切り裂く俊敏さに、鋭い牙と強

靱な顎は、相手を見るも無惨に噛み砕く程。それがざっと数千はいるだろう。帝国がこれだけのリザードマンの軍を所持していたとは、全くの予想外だった。

戦局は絶望的だ。今まで何度もハノ達と危機を乗り越えてきたが、流石にこの囲まれた状態で戦闘の続行は無理だ。このままでは、俺達は全滅する。

「ハノ！ みんなを連れて逃げろ！」

「え！」

退き際と判断した俺は、後ろでリザードマンの攻撃をかわしながらも、二刀の片手剣を振り回し応戦しているハノに命令を下した。

周りでは、リザードマンに斬られ、食われて行く兵士達。見渡せば最初は数万もいた兵が、今では数百人程度しか残っていないかった。もはやこれ以上、粘ることは不可能だ。

「うおおお！ —— ハアッ！」

せめて近くで戦っている兵士だけでも、俺は力を振り絞って敵をソルデファーで薙払う。

波動斬——刀身から放たれる漆黒の波動は、敵を跡形もなく吹き飛ばす。

今まで、この剣には何度救われた事か。俺はこの剣に感謝している。だが、それも今日限りかもしれない。

「おい！ お前ら、撤退しろ！」

「リスク様！ あなたも——」

> i 1 7 2 4 5 — 2 9 1 <

「俺はいい！ 最後まで戦う……」

「リスク様かし！」

「これは命令だ！」

ハノを含め、周りの兵士達の疲れ切った表情が強張る。そして、意を決したかのようにお互いを見合わせた後、俺に言い放った。

「その命令は聞けません！」

「リスク様。私達は、これから運命を共にします！ 一人だけで

戦わないで下さい！」

やはり、みんなは聞き入れてくれなかったか。確かに、気持ちは判らなくない。俺が逆の立場であつたとしても、命令を無視していたはずだ。しかし、心が痛む。

俺と残つたがために、命を散らすとなると、やりきれない気持ちになる。こういうのは何度も経験はした。だけど、それでも仲間を失う悲しみは募るばかりだ。

仲間を失うのは、もう嫌だ。

「みんな、すまないが。嫌でも撤退してもらおう！」

俺は魔剣の力で魔力を高め、上に手を翳して転送魔法を発動させた。

光に包まれた仲間達が、驚愕の表情で俺に叫んだ。

「リスク様！ 何故です！」

「リスク様！ せめて、せめて幼き頃からあなたに仕えていた私だけでもお側に！」

「ハノ……お前は生きる！ 俺の分まで」

「り、リスク様！」

悲しみに染まつたハノの表情を一瞥した俺は、辛い気持ちを面に出さず背を向けた。

周りで戦闘を行っている兵士達は戸惑いを露わにしつつ、そのまま光輝くと共にこの戦場から消えた。

転送魔法はそれほど遠くには転移出来ない。だが、この戦場からは十分避難出来るだろう。

「すまない……みんな」

こんな自分勝手な真似をした俺を、許してほしいとは言わない。だけど、今は俺の分も生き延びてくれ。そして、この戦場が俺の死に場所だ！

俺は弱りきつた体に活を入れ、ソルデファアを構えた。

目の前には、リザードマンの軍勢。その数は未だに数千を維持している。だが、死を覚悟した以上、俺は後退しない。

「行くぞお！」

颯爽と、敵陣に俺は駆け出した。

敵の軍勢に突撃して、どれだけ時間が経っただろうか？

俺は未だに魔剣を振るい、敵を薙払い続けている。だが、もはや体は限界に達していた。

傷や疲労のためか、視界が掠れて見える。

呼吸を荒げて、俺は倒れそうな体を屈むような体勢にし、剣を地に刺し身を支える。

「はぁ……はぁ……まだまだか」

うなだれていた顔を上げ、こちらに向かって進軍してくる敵を睨む。だが、もう抵抗する力は殆ど残ってない。

「ここまでか……」

忍び寄る死を、受け入れようと覚悟した俺だった。

その時、突然俺の前で不可解な現象が起きた。

「な、何だあれは！」

正面の空に亀裂が走り、ガラスのように割れた後に黒い裂け目が生まれた。そして空の黒い裂け目から、紅い光に包まれた二つの影が、俺の目の前へと降り立った。

「イエーイ！ 頓・着！」

「デイメイションさん！ それを言うなら到着！」

俺は夢を見ているのだろうか？

突如現れたこの二人は一体何者だ？

体を上下にリズム感のある動きで、右手を空に指を差す男。防御性が低そうな桃色の長髪をさらけ出したヘッドアーマーに、何とも若く自信に満ち溢れた、精悍な顔付き。

深紅のロングジャケットと銀色のベルトを巻いた黒のスラックス、漆黒の鉄製グローブにブーツと言う変わった格好をした、摩訶不思議な存在。

その隣には黒い聖職服のようなのを着た、黒い髪に瞳の少年。

「まあ、何にしても着いたな！　へへへ」

「まったく……下校中にいきなり僕を誘うんだから——って、うわっ！　何か人の形したトカゲが沢山いるよ！」

「おおー！　何かきしよいな。舌を蛇みたいにペロペロ出してるのが、何か良ちゃんっぽいぜ」

「何でだよ！　てゆーか僕あんな下品な真似してないし出来ないよ！」

「え、本当？　試しにやってくれ」

「それこそ何でだよ！」

平然とした様子で意味の解らない会話を行う二人。

俺は啞然と危機感の無い二人を見ていたが、すぐに我に返って叫んだ。

「お前ら、一体何者かは知らないが、ここから逃げろ！」

「え、あっ！　あなたは？」

「俺はリスク。この戦場に残った最後の戦士だ」

俺はある程度回復した体を立たせ。聖職服の良ちゃんと呼ばれる少年の後ろにいるリザードマンを、瞬時に両断する。

「うわ！　びっくりしたあ。あ、ありがとうございます」

「俺の後ろに下がれ！」

「は、はい！」

俺はようやく事態を把握して驚いた少年の前に立ち、襲い来るリザードマンを斬り倒しながら訊ねた。

「お前達、いったいどこから転移してきた？」

「え？ えと、日本って国からです！」

「日本？ 初めて聞く国だ」

知る人が少ない、小規模の国だろうか？

この見たことない服装からして、嘘をついてるようにも見えない。
実在する小国なのは確かだろう。

「あ、あの。大丈夫ですか？ 凄い傷だらけ何ですけど……背中に
矢が刺さってますし」

「気にするな。どうせ今から散る身だ、心配する必要はない」
「えっ！」

俺は戦いながら、現状までの経緯を説明した。

「それじゃあ、僕達が来るまでたった一人で！」

「そうだ、死ぬのは俺だけでいい。俺は戦士だ。みんなを守り戦場
で死ぬのは本望。だから、今こそ命を賭して戦うべきなんだ！」

付近のリザードマンを波動斬で一掃した後、俺は後ろに一步下が
り良ちゃんの隣に立つ。

剣を構えて前を睨む俺の横顔を、良ちゃんは切なそうに見つめて
いた。

「なある程、戦士だから戦死するわけか！ 上手いなああんた。ア
ッハハハハ！」

「オイイ！ そこ空気読めえええ！」

何がおかしいのだ？ このデイメーションと言う男の言っている
意味が解らないのだが、妙に腹が立つのは何故だ？

良ちゃんの怒り具合から、俺は馬鹿にされているのだろうか？

だが、このデイメーションと言う男、大した身のこなした。余裕
綽々の笑顔で、襲い来るリザードマンの斬撃を、残像を残す程の速
さで僅かに体を動かして避けては、相手の頭を指で軽く突つくと
――。

「フッ……お前はもう、死んでいる……なあってな！ ダッハハハ
ハ！」

「アベしっ！」

言葉の後にリザードマンの頭は爆発し、奇怪な叫びと共に絶命した。

「イヤイヤイヤ！ 冗談じゃなく本当に死んでるから！」

良ちゃんはデイメイションとやはり意味の解らないやり取りをしているが、それよりも何て力だ。初めてみる魔法だ。

この男は本当に何者なんだ？

そんな驚く俺を尻目に、デイメイションと呼ばれている男は、次の行動で俺を更なる驚愕へと誘った。

「てゅーか、凄い数だよ！ このままだとヤバいんじゃない？」

「いよっし！ んじゃあ一掃すっか」

「え？」

「何？」

訝しげに見据える俺達の前に立ち、ロングジャケットを開いて鉄の胸部をさらけ出したデイメイション。胸の中央には三角形のルビーが埋め込まれていた。

「いっくぜええ！」

徐々に赤い光が三角形のルビーに集まって行く。

『ひいっさつ！ イオン・バアアアスト！』

そして響きある叫びに呼応するかの如く、真紅の光が勢いよく放出された。

「うおおおお！」

「う、嘘でしょおお！」

とてつもない威力だ！

正面のリザードマンの軍勢が、瞬く間に光に飲まれて消滅していく。そして光が消え去る頃には、草原で広がっていた大地は荒野と化していた。

「あ、ちよつとパワー強かったかな？」

「な、何？」

「もちつとパワー下げればよかったな……失敗失敗！ てへっ」

「その猫かぶりな仕草、気持ち悪いよデイメイションさん」

地面を軽々とえぐる程の熱気の閃光を放っておきながら、まだまだあれ以上の力を放てたと言うのか？

全く訳が解らない！

俺は夢でも見ているのか？

俺達連合軍を追い詰めた奴らを、たった一人の男が一撃で一網打尽にするなど、こんなこと。魔剣の力をフルに引き出しても不可能だ。

だが、壮絶な驚愕と共に、俺は一筋の希望を目の前にしたと思った。

このデイメイションと言う男ならば、もしかしたらマダンを倒せるかもしれない。

この世界を、マダンの魔の手から救えるかもしれないと。

チャプター1『目指すは帝国』

「次元の神？」

「はい、信じられないでしょうけど、実際に僕は隣で踊ってる神様によく誘われて、と言うか無理やり連れられて異世界を行き来します」

「そうか、次元の神に異世界か……にわかに信じがたい話だが。実物を目の前にした以上。信じるしかないのだろうな」

俺は良ちゃんと呼ばれる少年から、ある程度の事情を聞いた。彼らは次元の悪魔と呼ばれる、形を持たない破壊衝動の思念体的な存在を追い掛けて、俺達の世界に来たのだと。

次元の悪魔は、世界に存在する個体なら何であろうと取り憑き、意のままに操る事が可能。更には、その破壊衝動を具現化させたような、凶悪な姿へと変貌を遂げるらしい。奴らは下手をすれば異世界一つを消滅させる力を持っていて、放置していれば大変な事になる。

しかし、そんな次元の悪魔を退治する対極の存在が次元の神。

俺と良ちゃんの目の前で、上体を地面に寝かせて、足だけグルグル回転させる意味不明な踊りをしているデイメイションと言う男。彼がそうだと言うのではないか。

本当に疑わしいのはあるが、あの究極魔法並みの力といい、腕の立つ戦士以上の身体能力といい。全てが桁外れなのは確かだ。神と言うのはあながち嘘ではないのだろう。次元を駆け巡っていると云うのも、空間転移の魔法が発達している世界で生きている俺からしたら、信じられる要素は十分にある。

実際、昔の学者達が異世界は沢山あると説いていた。現物を目の当たりした今、嫌でも信じるしかない。

「あの、そういえばリスクさん」

「ん、何だ良ちゃん？」

「そ、その呼び方止めてほしいんですけど……はは」

何やら苦笑顔で彼は言ったが、どうしたのか？

もしや、初対面に気安く名を呼ばれるのは嫌なのだろうか？

「あの、もしかしたらデイメイションさんが言ってたからそう言う呼び方なのでしょうけど、良ちゃんってのは……デイメイションさんが勝手に呼んでる略称というか愛称です」

気まずい沈黙が漂った。

確かに苦笑いする訳だ。会ったばかりの他人から気安く愛称で呼ばれて、不快な気持ちを隠せるはずがない。

知らなかったとはいえ、何てミスをしたんだと、俺は心底後悔した。

「す、すまないっ！　ちゃんと、ちゃんと君の名前を訊ねるべきだった！」

跪いて俺は頭を何度も下げた。許されないだろうと覚悟しながらも。

ちなみに、隣で次元の神は笑っていた。今の俺が滑稽で楽しそうな顔で腹を抱えて高らかに……。

「い、いえ！　そ、そんな大袈裟に謝らなくても。それに自己紹介しなかった僕が悪いんですし」

「ゆ、許してくれるのか？」

「え、ええ。と言うか許すも何も、リスクさんは何も悪くないですし」

顔を上げて彼を見据えてみると、彼は戸惑いの様子ながらも頷き、許してくれた。

何とも心の広い少年だ。

知らなかったとはいえ、俺は彼の名を侮辱した。貴族では刑罰沙汰の事をしてしまったというのに。それを笑顔で許すとは、何と寛大なことか。

「——ってよ！　よかったな良ちゃん。すんげえ誉められてるぜい！」

俺が思っていた事を全て代弁された！

この神は心を読めるのか？

「他人の心を勝手に代弁しないでよデイメイションさん！　いや、にしたってリスクさん大袈裟過ぎるって」

そう恥ずかしそうに背中を掻いた後、彼は自己紹介する。

「山田良助と言います。さっきも話した通り別の異世界から来ました。あ、良助と呼んで下さい」

「リヨウスケか。ああ、ありがたくそう呼ばせてもらう」

俺は立ち上がって、リヨウスケの差し伸べた手を握り、握手を交わした。

「ところで、君達の探している次元の悪魔なのだが、心辺りがある」「本当ですか！」

俺が頷き、語り出そうとしたら、胸元で両腕を組んだデイメイションが、割り込むように喋り出した。

「そいつは、マダンってやつかい？」

「え？」

最初は何で解るのかと、俺とリヨウスケは疑問に思ったが、すぐに俺の心から読み取ったのだと理解した。

その後、デイメイションが俺の代わりにマダンと帝国のことをあ

っさりと説明した。

お陰様で話す手間が省けたが、俺の見せ場が奪われてしまい、どこか虚しいと感じるのは、気のせいだと思いたい。

「——つまり、マダンって奴が実は次元の悪魔に取り憑かれているのかもしれない、この世界を支配しようとしてるって事ですね？」
「ああ、君達の次元の悪魔の話から照らし合わせ推測すると、この考えは不自然じゃない」

「確かに、マダンが居るって思われる方向から、次元の悪魔の気配を感じるぜ」

好奇心旺盛な笑みを浮かべ、南の方角を鋭く見やるデイメイション。今のところ肉眼では確認出来ないが、荒野と山を越えたその先には帝国がある。やはり、彼が感じることから、可能性はより高いと見た。

「ま、どちらしてもだ。確かめに行くとなっつか！」

「そうだね、それじゃありスクさん。僕達は行きます」

「待ってくれ、俺も行く」

「え、でも」

「少なくとも、俺は無関係じゃない」

そうだ、相手が次元の悪魔と言うこの世界とは別の存在だからといって、黙って傍観する訳にはいかない。

何より、俺は世界を救う為に戦う戦士だ。

国や家族を無くして、大切なものを失いたくない、守りたいと決心した日から、俺は王子としての地位や誇りは捨てた。

今あるのは、この世界を護る剣になろうと言う志だけだ。

だから戦う。彼らには彼らの戦いがあるように。俺には、俺の戦いがある。行かなければいけない。

「……へへっ！ お前クールに見えて、意外とヒートだな！」

俺の心を読んでいたのか、デイメイションは明るく楽しそうにこ

こちらの肩へ左手を回す。

「お前のようなカッコイイやつは好きだぜ！　よし行くか！　もう俺達は友達だし、一緒に行った方が楽しいもんな！」

そして、右手の親指を立て、俺に満面の笑顔でウィンクした。

友達——懐かしい響きだ。昔は城下町の子供達とよく遊んでいたが、俺を友達と口にしたのは、彼らくらいだった。

“仲間”よりも深い絆を感じさせる言葉。それが、友達——神からそう言われるとは、光栄だな。

「へっへへ！　友達に上も下も関係ないのさ！」

全く常軌を逸する神だ。だが、こういう神がいるのは悪くないと思う。彼を見ていると、こっちまで自信と活気に満ち溢れてくる。やはり、そう言った不思議な雰囲気、風格を持つてるのは神故からか。

「でも、デイメイションさん。急がなくて大丈夫なの？　流石に、いつものように僕だけ背負って走るわけには」

背負って走る？

俺が疑問に思いながらも、二人の成り行きを窺っていると。

「へへへ。俺に任せろい！」

自分を自信満々に指指すと、デイメイションは腕を広げて俺達に言った。

「俺の腕にしがみつきな！」

言われるながらも俺達はデイメイションの腕にしがみつく。凄い事に水平に広げた腕は、どれだけ体重を掛けようとビクともしないまるで、太い鉄の棒にしがみついている感覚だ。

『えーこちらデイメイション駅、デイメイション駅。間もなく電車が発せしま〜す！』

「喋り方気色悪いし、意味がわかんないよ！　てゆーか、何で声にエコー掛かってるの！」

確かに……。それに電車とは何だろうか？

そう思った瞬間、体が異様な力に引つ張られた。

「うおおおお！」

「うぎゃああああ！ やっぱり手荒いいいい！」

何という俊敏で強靱な脚力だ。あまりの速さに俺とリヨウスケの体が浮いている。

視界も速すぎて、目を凝らしてやっと見えるくらいで。言われた通りしつかりしがみつかないと引き剥がされそうだ！

『えゝあちらに見えますのが、クランパイアーの山脈。ノツペケプー山脈でえす！』

「嘘つけえ！ あんた適当に言っただけだろ！」

「いや、当たってる！」

「マジで！」

『あつはつは！ “嘘から出たまこと” たあ、このことだな！』

「騙す気だったんかい！」

などとお気楽な歓談(?)をしながら、俺達はノツペケプー山脈へと向かう。この山脈を越えれば、帝国はすぐそこだ。

山脈に入り、しばらく走り続けていたデイメイションだが、途中リヨウスケが力尽きて腕から引き剥がされてしまった。危うく地面に落ちて転がると言う大怪我を負いそうになったが、デイメイションが瞬時に身を翻して、地面すれすれでリヨウスケを掴んで救出した。

「ハア——ハアアア——し、死ぬかと思った！」

「あつはつは！ 途中で力尽きるなんてだらしねえな良ちゃん。帰ったら筋トレだな」

「筋トレで間に合うかあ！ だいたい、デイメイションさん配慮無

さ過ぎ！ 死んだらどうすんの！」

「へっへっへ！ 初めて会った時に言っただろ。俺がいる限り、絶対に死なないってな！」

そう天に右手を力強く翳し、活の入ったポーズを見せてディメンションは言い切る。

そう言い切れる根拠はどこにあるのだろうか？

涙目で叫ぶリヨウスケ同様、俺も疑った。

その後、俺達は岩場に腰掛け休憩することにした。

俺の傷とリヨウスケの疲労を癒やす為、今日はこの辺で休むことにしたのだった。

「ふう、毎回毎回ディメンションさんとなると疲れるよ」

「へへ！ エキサイティングな運動が出来ていいじゃねえか。痩せるぜい」

「エキサイトし過ぎなんだよ！ だいたい僕ひよろいんだから痩せる必要ないじゃない！ 全く……ん？ リスクさん、何してるの？」

回復を行っている俺に、リヨウスケは訊ねてきた。

「ああ、魔剣の力で魔力を増加させ、回復魔法で傷を治癒してるんだ」

俺は魔剣を地に突き刺したまま柄を握り締め、彼の問いに答えた。
「ホントだ！ 傷が徐々に癒えてる」

リヨウスケが驚きの様子で俺の腕の傷が塞がっていくのを見詰めていた。俺達の世界では、魔法を使用出来る者には当たり前前の所業なのだが。どうやら彼らの世界では、こういう治癒は出来ないらしい。

なんだか世界の違いというものを、実感できた気がした。

「傷は治癒出来るんだが、疲れは取れなかったりするんだ。気力から消費する訳だからな」

「それでも傷を治癒出来るなんて凄いですよ」

「へっへっへ！ 俺なんか唾で治癒できるぜ」

「魔法って凄いですね。僕も使えたらなあ」

「俺も使えるぜい！」

「リスクさんの世界では、薬とかで傷や病気とか治さないんですか？」

「ああ、傷は今のうちに魔法で治すことが主だが、風邪や熱などの病気は、薬で治したりする時があるな」

「子供は風の子さ！」

「へえ、そうなんだ」

「遭難だ！」

「ああ、病気の中には、魔法で治癒しようとしたら感染するタイプもあったから、そういうのには薬を使って日を掛けて治すんだ」

「俺だったら優しさで一気に治すぜ！」

「そっか、魔法も便利ばかりじゃないんだ」

「俺は万能だぜ！」

「そういうことだ。ところで……」

さっきからディメンションが訳の解らない発言をしているのだが、無視して大丈夫なのだろうか？

何だか一人だけ仲間外れにしているようで、気が引けるのだが。

俺が話し掛けようとしたらリヨウスケが制止させ、耳打ちで俺に伝えた。

「いちいちあの人の言葉にツッコミ入れると朝まで引きずられますから、休息中はあまりつつこまないようにしてるんです」

そうなのか。神の話相手をするのは至難の技と言うわけか。しかし、いつも相手している彼も凄い精神力だと俺は思う。

聞けば、彼は日本という国では普通の一般人だとか。王族でもない少年が、ここまで礼儀正しいとは。きっとその国の民はみんな彼のようにあり、統べる者は、彼以上に威厳のある寛大な心の持ち主だろう。

治安もきつと良いはずだ。

「あ、けっこう犯罪が多いです、総理大臣とか最近是不甲斐ないですね」

……真実とは残酷だ。夢や期待を平気で裏切るものだ、俺はこの日また一つ教訓を得た。いや、やっぱり聞かなかったことにしてとりあえず今日はもう寝よう。

しかしこの時、マダンの魔の手が刻々と忍び寄って来ていたのを、俺達はまだ知らなかった。

チャプター2『ヒートアップするアホたち』

夜明けに目を覚ました俺達は、簡単な支度を済ませ、山脈を下山するため出発した。ちなみに、デイメイションは俺達よりも先に起きていて、体をカクカクと動かし奇妙な体操をしていた。リヨウスケいわくロボットダンスと言う踊りだそうだが、実に興味深い踊りだった。

機会があれば教えてもらおうと思う。

さて、話がそれだが、今俺達は歩み進めて帝国が見える所まで来ていた。

「これが帝国……大きいですね」

「ああ……」

見下ろしながら呟くりヨウスケに、俺は頷いた。

マグネリア帝国は、山脈と海に囲まれた国だ。この地形は戦略上でも強固な守りとなっている。帝国の外には転移魔法を防ぐ防壁魔法が施されており、帝国の者しか、それも門から入らないと行けない。彼らと来る前は、俺は軍を率いてこの地へ向かう筈だった。

リザードマンの軍勢にさえ阻まれなければこんな形には……いや、寧ろ軍を率いてこの山脈に来ていたら、それこそ相手に居場所を知らせ、罠を仕掛けられていただろう。

次元の神と言う強力な友達がいる今が、一番ベストなのかもしれないな。

デイメイションを見やり俺は思った。

「へへっ！」

そんな俺の心を読んだのか、デイメイションは“任せろ”と言う

かのように親指を立て、ウィンクした。

心強い限りだと。俺は頷いて笑顔で返す——と、ちょうどその瞬間、脅威が俺達の前に現れた。

「何だろ。あれ？」

リヨウスケが指差す先には、上空を飛び回る巨大な黒い影が一つ。近寄るに連れて、次第にその正体のはっきりと見えた。

「あれは、レッドドラゴン！」

赤黒いウロコを輝かせるドラゴンが、俺達の前に急降下——そして地響きを鳴らし、土煙を巻き上げ降り立った。

「うわわわっ！」

慌てて後ずさるリヨウスケ。

「おっほおお。でっけえなあ！」

全く緊張感の無いことを言うデイメイション。

「くっ」

そして目に砂が入らないよう、俺は腕で顔を覆った。

そんな中、力強い咆哮をあげるレッドドラゴン。山脈全体に響き渡りそうなくらい煩い鳴き声に、俺達は耳を塞ぐ。だが、デイメイションだけは平然と腕を組んで、まるで面白い玩具を前にした子供のように、純粋な視線をドラゴンに向けていた。

「耳が痛い！」

リヨウスケが苦痛に表情を歪めて言った。

「耳たぶが痛い」

デイメイションが言った。

何故耳たぶ？

「イヤイヤイヤ！ おかしいだろそれ！ 何で鼓膜じゃなくて耳たぶに痛みがくるの！」

「お、おい二人共。ふざけている場合じゃないぞ！」
レッドドラゴンは本当にマズいんだ。

「そんなにおいしくないのか？」

違うっ！ そのマズいじゃない！

まったく……二人は知らないのだろうが、レッドドラゴンはクランプパイアで最も戦闘能力が高く獰猛な怪物だ。しかも、このレッドドラゴンは他のヤツと比べてサイズが明らかに大きい。二十メートル近くはある。

場所がちょうど広く見晴らしが良いから大丈夫なもの、もし狭い道で遭遇していたら道を塞がれていただろう。

何にせよ、せっかく広い道なのだから、ここは無駄な戦闘を行うより、上手くヤツを攪乱させて突破するべきなのだが……あろうことか、デイメイシヨンは俄然やる気満々の笑みを浮かべて、ドラゴンの前に大胆不敵に立つ。

「へへへ。感じるぜ、コイツ次元の悪魔に取り憑かれてやがる」

「えっ！」

リヨウスケは驚くが、確かに彼の言うとおりだ。俺は魔剣の力を通し、奴から燃え盛ったどす黒い邪気を先程から感じていた。なるほど、外見からして違和感があると思えば、次元の悪魔に取り憑いてるからなのか。

「ま、どちらにせよだぜ。避けられない戦いつてわけだな！」

「気をつけてデイメイシヨンさん。何か炎とか吐いて来そうだよ」
身構えるデイメイシヨンを睨みつけ、僅かに鋭くトゲトゲしい牙から見える口から、炎を吐息と出して呼吸するレッドドラゴン。ヤツは外見を表すかの如く灼熱の炎を吹く。あれを食らったら、ひとたまりもない。

「なるほどなあ」

俺の心を読んでくれたのか定かではないが、察したようにニヤリと、デイメイシヨンは不敵に笑う。

「よっしゃ！ ならこれだ！」

そして力強く言い放ち、デイメイシヨンは何も無い正面の空を腕

で切り裂く素振りを見せた。

そうすると、頭上からクロス形状の紅い刃が落ちて来て、それを片手に持ったデイメイションは見せびらかすように天に翳し、力強く叫んだ。

『デイメイション・ブーメラン！』

デイメイション・ブーメラン？

俺が疑問に思い眺めていると、デイメイションがドラゴンに武器を向け、不敵な笑みを浮かべ語りだした。

『説明しよう！ デイメイション・ブーメランとは、敵に投げて切り裂く武器であり。しかも投げたブーメランは自転しながら大きな円軌道を描いて持ち主に戻るという超！ 特殊機能付きなのだあ！』

何！ それは凄い！

「イヤイヤイヤ！ ちょっと知的な説明してるけど、普通のブーメランとなんら変わらないじゃん！ 特殊機能でも何でもないし！」
そうなのか、俺には説明上かなり凄い武器に見えたのだが――な
どと思っていると、デイメイションはドラゴンに目掛けブーメランを投げた。

「うおりやあ！」

ボールをコロコロ優しく転がすように下手投げで――。

「なんで下手投げ！ しかも全然ハズレてるんだけど！」

本当だ。なよなよしい下手投げなのに、何故か超スピードでドラゴンの頭上を越えて、空高くブーメランは回転して飛んで行き星になった。

「くっ、避けるとはやるな！」

悔しそうな顔で拳を前に握るデイメイション。

「違うだろ！ あんたがノーコンなだけだあ！ ドラゴン全く避ける気なかっただろが！」

うん。『何アレ？』って言いたげな、状況がよく読めない表情でブーメランを眺めていたな。

「しかし甘いぜ！ デイメイションブーメランの特性を忘れるなよ

！」

特性——確か戻って来るんだっただな。

そう戻って来ると思われる空に視点を凝らす、一向に帰って来ない。

二度目の気まずい沈黙が漂った。

「も、戻って来ないよ？」

「いや！ 戻って来る！ デイメイションブーメランの力を信じ——
——ハウあッ！」

ぬおっ！ デイメイションの尻にブーメランが！

「ええ！ 何故後ろから！」

驚く俺達の後ろで、への字に崩れたデイメイションは語る。

『せ、説明しよう…… デイメイションブーメランは、何と世界を一周して戻って来る特性を持っているのだ、ぐふう……』

「無駄にすぎえ！ てゆーか、デイメイションさん嘘でしょう！

こんなんで力尽きないでよ！」

『シーン…… デイメイションは気絶してる』

「起きてるじゃんかよ！」

『スイッチ・オフ！』

「オイイ！」

頭から力チツと音がしたかと思えば、白目向いて脱力するデイメイション。まるで糸が切れた人形みたいになった。

体勢はへの字のまま、尻にはブーメランが刺さっている。

俺達があたふたと戸惑っていると、正面のドラゴンが『無視すんな』と言いたげに怒号のように鳴く声を荒げる。

「ど、どとどうしよう！」

「くっ、リヨウスケ。君はデイメイションを連れて近くの岩に隠れ

るんだ」

付近の灰色の岩を見やりながら呟き、俺はドラゴンを睨み付け剣を構える。

「リスクさん！ でも、リスクさん一人じゃ」

「こんな言い方は失礼だが、君がいても足手まといだ」

「あ……」

リョウスケの悔しげに俯く表情が、痛ましく思えた。気持ち解る、バツサリ言われたら傷付くのは、俺が君の立場でも同じ気持ちになるだろうから。

でも……。

「だから、君には君しか出来ないことをしてくれ！」

そうだ。だからと言って、君に何も出来ない訳じゃない。君にはデイメイションを連れて非難すると言う、重大な役割がある。だから今は、それだけに集中してくれ。

「僕にしか出来ないこと……解りました。リスクさん、死なないで下さい」

意を決した返事をして、リョウスケは重そうに、そして顔にシワを寄せて、鼻毛が見えそうなくらい鼻の穴を広げ、デイメイションを頑張つて引きずる。

「その約束は無しだ」

俺は笑いを堪えながら呟いた。

「いくぞ、次元の悪魔！」

俺はドラゴンに目を戻し、すぐに駆け出す。対してドラゴンは火球を吐き出し牽制するも、俺はヤツの頭上まで跳躍して、剣に魔力を溜めた後、素早く五回振る。すると五つの波動斬が放たれ、ドラゴンの頭部に連続して直撃する。

奥義、波動連牙斬。はどうれんがざんこの技は巨岩をも両断し、粉碎する。流石に諸に食らった以上、無事では済むまい。

などと思っていたが。それは実に甘くて、傲り高ぶった考えだった。

「何だと！」

全くの無傷、それどころか、ヤツは既に反撃の姿勢を――炎を吐こうと口を開いていた。

「うわああああ！」

吐き出された灼熱の炎が、俺の体を焼き付ける。どうにか魔法で炎の耐性を上げたので、衣服などは軽く焦げる程度で済んだが、それでも俺にダメージを与えるに十分な威力だった。

「ぐう――」

着地後、苦痛ですぐに地面に膝を付いてしまった俺は、すぐさま剣で支えてドラゴンを見据えた。ヤツは余裕の表情で鼻を鳴らしていた。

「く、くそ」

悔しい。俺の力が全く通用しないなんて。こんなところで改めて自分の無力を痛感させられるとは。

歯軋りを立てずにはいられなかった。しかし、そんな俺の気持ちなどお構いなしに、再度ヤツは炎を吹こうと息を吸う。

「リスクさん逃げて！」

「うう……」

避けられない。このままでは当たって焼け死ぬ。

俺がそう思っただけ目を背けたその瞬間。

『待てええい！』

いきなり聞き覚えのある甲高い声が響いた。

俺達やドラゴンが声の方に視線を向けるとそこには――。

『ハーハツハハハ！ デイメイション参上！』

崖の上で、何故か腕を斜め反らすように傾け、何とも変わった構えを取っているデイメイションがいた。

俺は眼を疑った。岩に隠れてたリョウスケも「あれえ！」と言いたげに顔面が驚愕で歪みきっていた。

「デイ、デイメイション、無事だったのか！　だが、お前は確かり

ヨウスケと一緒に岩場に隠れてたはずじゃ——」

「ふっ、あれはダミーさ！」

だ、ダミーだと？

「な、何だこれえ！」

リョウスケの叫び声に何事かと振り向くと、岩場に尻にブーメラ
ンが刺さっていたはずのデイメイションではなく、何故かブーメラ
ンが刺さっている丸太があった。

「あはっはっは！ まんまと騙されたなドラゴン。これぞ忍法！

デイメイション身代わりの術だ！」

忍法！ 一体何だそれは？

ドラゴンに指差して威張っているデイメイションと忍法に関して
疑問を抱いたが、説明は返って来なかった。

けっこう期待してたんだが。

「イイイイイイヤ！ 自分のブーメランで自滅して、変わり身の
術ってわけ分かんないし！ だいたいドラゴン騙す以前に、攪乱す
ら出来てないよ！ 行動全部が無意味じゃないか！」

もっともな意見だ。俺も同意する。

「ふふん、敵を欺くにはまず味方から！」

「だから何がしたいんだって！」

「よし、よく頑張ったリスク！ 後は俺に任せろい！」

「聞けよお前！ 無視すんな！」

怒ったリョウスケは喚き散らす、デイメイションは全く気にし
てない。そのまま崖から飛び降りて頭から落ちた。当然、野菜が砕
けるようなくしゃぐしゃと生々しい音を立てるが、何事も無かつた
かのように立ち上がってドラゴンに歩み寄る。

どこまでふざけてるんだこの神は。

「一撃で葬ってやるぜドラゴン！」

相変わらずの不敵な笑みでドラゴンを指差し、デイメイションは言い張る。

彼の言葉か、または態度で理解してるのか、ドラゴンは不快な気持ち露わに突進して来た。

デイメイションは何故か腰に両手を付け、胸を張って仁王立つ。このまま動かなかつたら、踏み潰されてしまいそう何だが。

ここで、誰も予想だになかったことをデイメイションは仕出かした。

「あー！ 可愛いメスドラゴンだ！」

あまりに場違いな対応に俺は支えていた剣からずり落ち、リヨウスケは滑るように転けてしまった。

「アホおおおっ！ なんもんで引つかかるかああああ！」

しかしドラゴンは「え？ マジで！」と言わんばかりに期待に溢れた表情で右を向く。

ドラゴンはデイメイションよりアホだった。

「チャンス！ ダブルブリット・フィスト！」

両指を交錯するように絡ませると、漆黒の鉄のグローブは眼にも止まらぬ速さで飛んで行き、ドラゴンの胸部をえぐるように貫いた。

「ぎゃおおおおー！（女の子何ていないじゃないかあ！ byドラゴン）」

そして哀れな悲鳴を上げてドラゴンは爆散した。

「決まったぜ！」

爆発するドラゴンをバックに、デイメイションが勝利のガッツポーズをとっていた。

勝ったのは良いが、最初からその攻撃を放っていたら良かったんじゃないかと思うのだが……。

チャプター3 『魔剣大破?』

デイメイシヨンの巧みな戦略(?)により、次元の悪魔に取り憑かれていたレッドドラゴンを倒すことに成功した。

爆死したかと思っていたレッドドラゴンだが、不思議にも煙りが晴れた後には外傷の無いまま気絶していた。そして、体からは青白いガスのようなものが、噴き出していた。

それに向けてデイメイシヨンが腕で薙払う動作を行うと、赤い波動が波紋のように放たれ、青いガスを消滅させた。

聞けば今ので次元の悪魔を浄化させたらしく。しばらくすればレッドドラゴンも目を覚まし、何事もなかったように去るだろうと、デイメイシヨンは気絶してるドラゴンの頭を撫でながら答えた。

「ま、リザードマンは集めたトカゲの死体に雑魚の次元の悪魔を取り憑かせて造ってみたいだから消滅させたけど、コイツはまだ生きてるしな。だから助けたわけさ」

なる程、帝国でのリザードマンは自然の生体ではなく、マダンの手によって量産されていたやつらなのか、それならばあの尋常でない数にも納得がいく。しかし、ドラゴンに関してはどうやって助けたのか疑問である。明らかにあの一撃は絶命確実なはずなのだが、元に戻ると無傷とはいいたい……。

「へへ、体を傷付けず倒すことくらい、俺には造作もないのさ!」
自分を自信満々に、構えるように指差すデイメイシヨン。つり上がった口元から覗く八重歯が、太陽の反射できらめいて眩しい。

確かに凄いのだが、このふざけるところをもう少しどうにかしてほしいな。多分、デイメイシヨンの隣で呆れるように溜め息をついているリヨウスケは、いつもこんな思いでいっぱいなのだろう。

「リヨウスケ」

「リスクさん?」

「同情するぞ」

「は、はは……。ありがとうございます」

肩に手を置いて伝えると、脱力した返事と共にリョウスケはうなだれた。

それから気絶してるレッドドラゴンを後にして、俺達は帝国へと向かう。山脈の坂道を下っている途中、デイメイションがまた荒野の時のように走ろうかと訊ねてきたが、リョウスケは断固拒否すると強く首を振り、間違えてひねって痛めてしまい。俺が魔法で治癒する事態となってしまった。

その光景を見てデイメイションが腹を抱えて笑っていたのは、言うまでもないだろう。

「すみませんリスクさん」

「いや、断る気持ちは判らなくもないからな。まあ、余り無茶はしない方がいい」

本当はリザードマンの軍勢や、ドラゴンに単身で立ち向かったりした俺が言えたことじゃないんだが……。

「にしてもすげえな魔剣つて。魔力を増幅させて魔法の力を上げるんだろ？」

興味を抱いたのか、腰を下ろしたデイメイションは、食いつくように魔剣を拝んでいた。煌めく刀身には、鏡のように彼の顔がうつすらと映し出されていた。

「ああ、この家宝の魔剣ソルデファアには、昔からいろいろと助けられている」

レッドドラゴンの炎に耐えられたのも、この魔剣の力と言っている。戦闘から治療まで、数々の苦難を共に打破した、俺の相棒とも呼べる。これからもコイツには苦勞させるかもしれないが、俺が死

ぬまでは頑張ってくれとありがたい。

そう魔剣を眺めていた時だ。

「あの、ちよつと触つても良いですか？」

興味があるのか、リヨウスケが少し控え目な物腰ながらも訊ねた。

「ああ、良いよ」

別に魔剣は俺しか使えないわけじゃないし、触つて呪いが掛かるわけでもない。ただ力を使う際、少し疲れるくらいだ。

持つくらいなら問題ないだろう。

「うっ！ お、重い！ グレートソードって見かけの割には軽いように造られているってどつかの本に書かれてたから、どのくらいかと思つたら……こんなに重いなんて」

リヨウスケは何度も柄を握る手に力を入れて持ち上げようとするが、刀身は地面についたまま全然持ち上がらない。そして遂には力尽きて地面に寝かせてしまった。

「凄いですよ。リスクさんはこんな大きな剣を軽々と振り回してるなんて」

「俺もリヨウスケくらいの頃は引きずつて振り回すのがやっとだった。三年間、血の滲むような努力の末にやっと振り回せるようになって、一年掛けて魔剣の力も引き出せたんだ」

母から聞いた話では、父がソルデファーを使いこなせるようになるには七年も掛かったらしく、更には王家の者しか魔剣を振るえる剛力と魔力の両方を兼ね備えてる者がいなかったのだと云う。

俺もその血筋故に細身の体型に似合わず剛力であり、魔力が高かったからか、父よりも早い年月で使いこなせるようになった。ただ、俺の場合は時間を掛けている余裕はなかったから、父以上の修練を積み重ねることになったのだ。

だから決して才能とかを理由に父を超えたと、傲慢に思つてはいけない。

「ん、そういえばリスクさんっていくつ何ですか？　僕は十七歳なんですけど」

「俺は二十三だ」

「俺は多分、八億歳だぜ」

「じゃあリスクさんは二十一か二でこの剣使いこなせたんですね。凄いなあ」

リョウスケが尊敬の眼差しを向けるのには少し照れたが、自分はまだ未熟だと伝えながら魔剣を受け取り持ち上げた。ちなみに、デイメイションがとんでもない年齢だなと、さり気なく耳を傾けていたりもする。

とりあえず背中の中鞘に剣を仕舞おうとしたら、デイメイションが「俺にも持たせてくんね」と好奇心いっぱい表情でお願いしてきた。

「ああ、構わないが」

彼ならあつさり振りませそうだなと思いながら、俺は魔剣を渡したのだが――。

「おう、サンキュ！　よつとな」

デイメイションが剣を縦に構えた瞬間、予想だにしない出来事が起きた。

《いや〜ん！》

奇怪な艶かしい叫びと共に、刀身が爆発した！

刀身の破片が飛び散る中、三度目の気まずい沈黙が漂った。

「……あり？　爆発したぜ？」

「何であああつ！　おかしいだろ！　何でデイメイションさんが持ったら刀身が爆発すんの！」

「なあ、爆発した時にへんな声が聴こえなかったか？」

「いや、聴こえはしたけど――て、リスクさん！」

「は……はは……王家の……家宝の魔剣が……ボンッて……あ」

あまりの事に訳が分からないまま、俺の視界は闇に沈んでいく。
「うわああああ！ リスクさんすっかりしてえ！」

薄れゆく視界の中、慌てふためいたリヨウスケが叫んでいるのが
微かに見えた。

夕方、俺は目を覚ました。

岩に背を預ける形で寝かされていた俺は、まだ覚醒していない目で
辺りを見回してみると、夕陽を前に顔を俯けて立つ彼らを捉えた。
妙に空気が重苦しく見える。

「どうしよう……刀身の破片は出来るだけ集めたけど、直すのは無理だよね……」

掌で口を覆い、難しい表情でバラバラの刀身を見据えるリヨウス
ケ。

「大丈夫さ、これくらい唾つけときゃ直るぜ！」

そう言いながら、座り込んで破片一つ一つに唾を付けて修復を試
みるデイメイション。

「直ってたまるかぁ！ 唾で直る魔剣でどんだけだよ！」

確かにそうだ。これで直ったら奇跡を通り越して異常だろう。

「ノンノン！ 昨日言っただ。俺は唾で治癒できるってな！」

これまた天に手を翳してガッツポーズを見せるデイメイション。
だからその自信と根拠はどこから来るのだ？

それに刀身に全く変化無いじゃないか。

「ちげええ！ 治すと直すは意味が違うから！ これは物！ 生物
じゃないから無理！」

「えっ？ マジで？ ……チッ」

「何でここで舌打ち！ 悪態付く訳が解んないよ！」

「よし、良ちゃん頑張れ！」

「オイイ！ 誰のせいで壊れたと思ってんだあ！」

「もちろん俺さ！」

自覚はしてるのか！

そんな不敵な笑みを浮かべて自分を指差すデイメイション。明らかに反省とか、罪悪感とかの色が伺えない。

「自覚してるなら、もう少し申し訳ないって顔をしろお！」

顔を真っ赤にして叫ぶリヨウスケ。怒ってくれるのはありがたいが、当の本人は鼻をほじくってまるで聞いていないぞ。流石にこの態度には俺も怒り、立ち上がった一言ぶちまけてやろうと思ったが――。

「へへへ、そう怒るなよ二人共。直す方法が無い訳じゃないぜ」

「へ？」

「本当か！」

「おわっ！ リスクさん！ 起きてたの？」

デイメイションは気付いてたようだが、リヨウスケは自分の後ろに立つ俺に驚きの様子を見せていた。そんなことよりも今は魔剣の修復だ。

デイメイションが言ってた直す方法とはいったい？

「ま、正確には、修復つつうより。最初に戻すって方が正しいかもな」

「戻す？」

「あとちよつとしたら来るはずだぜ。一応、良ちゃんが破片を必死に集めてる時に連絡しといたんだ」

「え、あの時サボってると思ったら、連絡とっていたんだ。でも誰に？」

俺達が疑問の眼差しをデイメイションに向けていると、彼は「来たぜ！」と俺達の後方の空を指差す。流されるがままに振り向くと、夕陽に重なるように黒い割れ目が現れ、その割れ目から激しい爆音が響いてきた。

「な、なんだこの音は？」

「この音、走ってるバイクのエンジンの音じゃ」

「バイク？ 何だそれは」

俺が訊ねたその瞬間、黒い割れ目から魚のような形状をした、大きく細長い物体が飛び出して来た。驚く俺とリヨウスケの間を通り抜け、地面をえぐるようにこすりつけて“それ”は停止する。

黒い車輪の付いた白銀の魚——と俺は形容したが、その物体の上には人が跨っていた。夕陽を背にしてあるため影が濃くて見えにくいが、どうやらあれは馬のように移動するための乗り物みたいだ。確かにリヨウスケがバイクと言っていたな——リヨウスケの方を見ると、その名を再度呟いていた。

と、その時だ。

「銀色の魚だつて？ もっとマシな喩えは出来ないのか。僕の單車を魚に喩えるなんて、センス悪すぎだね」

女性の声質とも想える細い声が、バイクに跨っている人影の方から聴こえてきた。

子供の声？

リヨウスケよりも幼いのか、または女性なのか。

バイクから降りた声の主は、徐々にこちらへ歩を進めてくる。次第にそのシルエットの正体が見えてきた。

純白とも言える輝きを放つ美しい髪を首筋まで垂らし、デイメイシヨンのようにつり上がった目つきをしていたが、どこか覇気が観られない。しかし観ていると奥に吸い寄せられてしまいそうな、不思議な違和感を持った血色のつぶらな瞳。

何よりも驚いたのは肌。人の肌とは思えない程、真っ白だ。比喻など必要ない。そのままの意味で、彼の肌には色素が無かった。

そんな髪や肌とは対照的に真っ黒のオーバーコートを羽織り、全体を黒で染め上げた少年は、俺達の前で立ち止まる。デイメイシヨンは後頭部に腕を組んだまま前に出て、左片腕だけ崩し手を上げて挨拶した。

「ようアルビノ！ ちょっと遅かったな」

「久しぶりだねデイメイション。まあそんなことはいい。こっちはいろいろと忙しいんだ。さっさと用件を言ってくれないかな」

面倒臭そうに頭を掻き、アルビノと呼ばれた少年はデイメイションを冷めた目で見据えた。

「んつとな、実はかくかくじかじかで」

「……意味わかんないんだけど。ちゃんと説明してくんない」

訝しげに眉をひそめて、彼は苛立った声を威圧的に捻り出す。しかしデイメイションは全く動じず、寧ろ親しげに肩を組んで事情を淡々と説明し出す。

「——ってえ訳さ」

「なる程。実に下らないね。まったく、毎回毎回面倒ばかり、冗談なのはその腐った頭だけにしてほしいな」

「あつはははは！ まあまあ、とりあえず頼むわアルちゃん」

「うるさい黙れ。ん、これは……魔剣ソルデファアーか。これまたレアな物を壊したな、あんた」

デイメイションを一瞥して言い捨てると、彼は顎に指をさすらせ壊れた魔剣を物珍しげに眺めていた。

しかしそれ以前に——。

「君は知ってるのかこの剣を！」

俺が問い掛けると、彼は顔を上げてこちらを向き、軽く頷いた。

「まあ、一応知ってはいるよ。この世界でたった一つしかない、最強の魔剣だからね」

この世界で最強の魔剣？

それほど凄い剣だったのか。いつから存在しているのかいろいろと謎に包まれていた剣を、彼は知っているようだ。

いったい、彼は何者なんだ？

「あの、デイメイションさんの知り合いみたいですが。あなたは一体何者なんですか？」

リヨウスケが疑問を抱いていた俺に替わって訊ねると、少年は片方の眉を吊り上げてこちらを見据えた。

「僕か？ 面倒くさいな」

やれやれと芝居がかった調子で首を振るうも、彼は答えてくれた。
「通りすがりのアルビノ・ヴォルフイーユ様だ。ありがたく、一生忘れず覚えておくがいい」

それもあり傲慢無礼な態度で。何なんだこの少年は。デイメイシヨンとどことなく雰囲気似ているが、口が悪すぎる。

「え？ と、通りすがり？」

困惑の表現を浮かべるリョウスケ。そりやそうだ。言っている意味が判らないし答えになっていない。デイメイシヨンに喚ばれてきたのは判るから、何者なのかをちゃんと教えてほしいんだが。

「まあ、僕のことはずまずおいといて。今はコイツを直すのが先だろ……違うかな？」

そう呟いたアルビノと言う少年は、右手を壊れた魔剣に翳した。すると魔剣は黒く薄い網膜のようなものに覆われ、彼の手の動きに合わせてふわりと浮かび上がる。そこから先、俺は目を疑った。バラバラだった刀身が徐々に元の形に復元し始めたのだ。

「よし、これでいいだろ。ほらっ、ありがたく受け取れよ」

直ったかどうかを片手で軽々と魔剣を振り回し確認した後、アルビノは俺に剣を渡してくれた。しかし凄いな、リョウスケより頭一つ分も低くて幼い外見なのにも関わらず、身長百八十センチはある俺と同じ長さのソルデファアを持てるなんて。

デイメイシヨンと同じく、彼も次元の神なのだろうか？

「済まない。君が何者かは知らないが礼を言う」

「良かったなリスク！ へへ、大義名分だったぜアルビノ！」

「どの面下げてそれ言ってるのさ。てゆーか、意味判ってワザと言ってるの？」

憎らしげに言うアルビノだが、この事態の発端となったデイメイシヨンは無邪気な笑顔を見せていた。

しかし、不思議な力だ。

突然現れたアルビノと言う少年。

彼は本当に何者なのだろうか。

「それは次回で俺が説明してやるぜい！ 次回、次元調律使アルビノ！ こうご期待だぜ！」

突然天に手を翳し叫ぶディメーションだった。

チャプター4 『次元調律使アルビノ』

「よし、行くか」

「ああ、行こう」

「この下りを越えたら帝国の門ですね」

丁度月が現れた頃、俺達は今、門が見えるところまで下っていた。帝国まで後少しだ。

「おい……」

今は夜だ。このまま奇襲を仕掛けて門を突破し、帝国に突っ込むべきだと思うが……。

「おい」

デイメイションに視線を逸らすと、彼は腕を組んでやる気満々の笑みを浮かべていた。どうやら、同意見のようだ。

「聞けえっ！」

不意に俺達の後ろから、アルビノの叫び声が響いた。

「おおアルビノ！ いたのか！」

「いたのかじゃない！ そのお前らもワザとか！ デイメイションみたいに大袈裟なりアクションとるな！ 気付けよアホ！」

リヨウスケと俺を指差してアルビノはがなる。ああ、そうだ、アルビノは何で同行していたんだ？

「お前らデイメイションのアホに影響されるなよ……」 ったく。普通、さっきのやりとりはおかしいと思うだろ！ 話がかかなり飛んでるだろが！ だいたい、デイメイション！ あんた僕が何者なのか説明すんじゃないかったのか！」

「あ、思い出したぜ！」

「お前はああっ！」

俺も思い出した。確か夕方に現れたアルビノが何者なのかを思っていたらデイメイションが『それは次回で俺が説明してやるぜい！ 次回、次元調律使アルビノ！ こうご期待だぜ！』などと言って

いたような気がする。

「あ、確かにデイメイションさんがアルビノさんについて説明するって——って、何でも事もなかったかのように話が進んでたの！」

「気付くのおせええ！ デイメイションよりあんたらが一番早く異変に気付くべきだろ普通！」

「す、すみません。何かあまりに普通な始まりだったんで、つられてしまいました」

頭を下げて謝るリヨウスケに、アルビノのため息混じりに肩を落とした。まあ、確かにリヨウスケまでこんな調子じゃあ、やり切れない気持ちになるのは判らなくもないんだが。

「へへへ、まあアルちゃん。気にするなっ」

「あんたが原因だろが！ ああもう、早く話せよ！」

肩に手を置いて言うデイメイションにアルビノはこめかみに青筋を立てつつも、投げやりな口調で返した。

しかし、夕方から夜までの数時間、何も言わなかったアルビノもどうかと思うのだが……。

「そのあんた。今なんだった？」

睨まれた。

とても威圧的な眼力だった為か、俺の体中から冷や汗がどつと吹き出した。どうやら彼もデイメイション同様に心が読めるらしい。感じからして怒らせるとマズそうなので、あまり余計な事は言わないでおこう。

「んじゃ説明するぜ」

などと思う間にデイメイションが語りだした。

「アルちゃんは、シラビト族っていう肌の真っ白い人なのさ。終わり！」

「コラコラコラッ！ 説明がアバウト過ぎるぞ！」

「ジョーク、ジョークさ。シラビト族ってのはな。次元に干渉する神の一族なんだ。ま、由緒正しき次元の神様って訳だ」

なるほど——ん？

までよ。今由緒正しきと言っていたな。そうするとデイメイシヨンは正式な次元の神ではないのか？

俺がそう自分の中で定義を付けたところで、アルビノが否定を口にした。

「次元の神っていうのは、あくまでも総称に過ぎない。あんたの世界にも神はいた。次元や時間に干渉出来る高位の神がね。もつとも、その神は既にこの世界を去っているようだがね」

確かに、この世界の古文や伝承でも、デイメイシヨン並みの事象を起こせる神の存在は記されていた。

しかし何故か神の存在は発覚されていない。

「そう、伝承などには残っても、その世界に存在する“モノ”たちの目に留まることはない。神と呼ばれている者なんてみんな、自分のしたいことをしてぶらぶらしているのさ、こいつのようにね」

そう皮肉るアルビノは、親指で後ろに立つデイメイシヨンを指差した。

「ははは、照れるぜ！」

「いや、誉めてないから」

デイメイシヨンの胸に裏拳を叩き込むアルビノ。なんか巨大な太鼓を叩いた時のような凄まじい轟きが響いたのだが、デイメイシヨンはまったく効いてない様子だ。

異様なやり取りに俺とリヨウスケが啞然としているのを目にしたアルビノは、一旦咳払いをしてから話を続けた。

「ま、そんな自分勝手な神様ばかりだから、放置された世界は勝手に強大な力を得たり、滅びの道を辿ったりしてしまう。それに関してはまだ多目に観てやれる。あくまでもそれは身内事だからね」

両手を天秤のように広げて、冷淡な口調と態度でアルビノは言い張った。話から彼が本気で他人事として捉えているのが窺える。なんだか『滅んでしまおうが知ったことではない』というように聞こえていい気がしない。俺の隣で聞いていたリヨウスケも、不快感を露わにしていた。

そんな俺達の気持ちなどお構いなしに、アルビノは話を続けた。

「けど、それ以上の事。特に次元と時間の干渉になると話は別だ。世界一つに留まる程度の混沌なら、個々の世界に生きる者達で解決はできる。けど、それが解決できないレベルだとしたら？ 他の異世界にもその脅威が浸食する可能性が生まれたとしたら？」

その話、今の俺の世界と繋がるのではないだろうか？

次元の悪魔の力は、俺のような世界のちっぽけな一つではどうしようもない強さだった。マダンが現れてから。長かった平和は一瞬で崩れ去り、凄まじい勢いで破滅への道を進んでいる。デイメイシヨンが現れるまで、俺達の力ではどうにもならない状況にまで陥っていた。

「そう、今の君の世界がそうさ。こんな次元の悪魔のようなイレギユラーが浸食している世界は、探せばいくらでもあるんだ。放っておけば世界は当然滅び、脅威は膨れ上がっていく」

それを防ぐのがアルビノやデイメイシヨンの役目なのか。

「まあね。先にも話したけど次元の神は総称。種類は様々で定義らしいものは無いよ。このデイメイシヨンのように実態を持たない思念体や、自分の生まれも分からない者もいるからね」

複雑な話だ。何よりも規模が大きい。しかし、彼が言っている通りなら、俺やリヨウスケはその事態に直面している事になる。改めて、危惧を意識させられた。

「ちなみに、僕はその馬鹿と違って暇つぶしかでこの役目を担ってはいない。君と同じだよ。リスク・カルスタン」

まだ俺の名前は名乗っていないのにどうして判ったんだ。もしか彼は相手の記憶まで覗けるのか。

「君にも志があるように僕もまた、次元干渉術継承者として、次元調律使としての使命を全うし平穏を築いていきたいという志がある。だから、混沌を広げる原因が誰だろうと、どういった事情を持つかが、僕は容赦しない……」

この手で握り潰すと、アルビノは付け足し、血が滲み出て滴り落

ちるほど拳を強く握り締めた。

その姿を目にした瞬間、背筋が寒くなった。アルビノから得体の知れない威圧を感じたからだ。

女性のように凜々しく整った表情には、何の感情もこもってすらないのに。

リヨウスケも同じだろう、強張った表情でアルビノを凝視していた。

この時の彼はまるで、強い使命感を持つ無感動な暗殺者のようだった。いや、実際そんなものなのだろう。情に流されては達成は出来ない。何よりも、それを言い表すような信念を背負っているのが判る。

「まあ、それはそうとだ。ずっと気になってたんだけど……」

「え、あの？」

アルビノは胸の前に腕を組んで、リヨウスケを品定めするように眺めると、口を開いた。

「あんた。この世界のやつじゃないだろ？」

「ええ、そうですけど」

それを聞いた後、アルビノは眉間にしわを寄せ、やれやれと訝しげに首を振る。そしてずかずかとディメーションに近寄り、胸倉を掴んだ。

「どういつつもりだよディメーション。この世界と関わりのないやつを連れて来やがって」

怒りの形相でアルビノは問い掛けたが、それに対しディメーションは驚いた表情を向けた。しかし威圧されてでの様子ではなく。まるで、信じられないと言った様子だった。

「お、おいアルちゃん……良ちゃん見て何も感じねえの？」

「どういう意味だ？」

「マジかよ……」

アルビノが胸倉から手を話すと、デイメイシヨンは、どうしようかなといった思案顔で右手で口元を隠し俯いた。いつになく真面目な顔付きだ。いったいリヨウスケには何があると言うのだろうか？俺の隣でリヨウスケも、二人のやり取りに困惑の色を見せていた。「とにかく、あまり彼を連れ歩くな。次元干渉を受けないあんたや僕でない限り、他の存在が他の世界に干渉すると異常が起きるんだ。何が原因で異端化するかわからないんだから——って、聞いているのか？」

「ん、ああ。判ってるぜアルちゃん」

先程まで考え耽ってるデイメイシヨンだったが、直ぐにいつもの笑顔で返した。

「絶対判ってないだろ？ まったく。とりあえず、僕は急用があるから。あんたなら次元の悪魔なんか問題ないと思うが、油断はするなよ」

頭を掻きながらも言い捨てると、アルビノは手を正面に翳す。翳した先に黒い割れ目ができた。

> i17246 — 291 <

バイクに跨りアルビノが何かを弄ると、バイクはまた走っている時の爆音を唸らせた。走行するとバイクの爆音は激しさを増していく。アルビノがそのまま勢いよく黒い割れ目の中へと入って行くと、割れ目はゆっくりと塞がった。

「またなアルちゃん！」

アルビノが聞いているかは解らないが、デイメイシヨンは誰もいなくなつた空間に手を振った後、こちらを振り向き元気よく言い放った。

そういえば、いつの間にかデイメイシヨンではなく、彼が最後まで説明していなかったか？

結局デイメイシヨンは何もしてないのでは——。

「おし、んじゃあマダンのいる帝国へと行くとすつか！」

ごまかすデイメイシヨンの言葉で気を取り直し、俺達は帝国の門

まで歩き出した。

それから、門までたどり着いた俺達だが、ここで予想だにしない出来事が待ち受けていた。

「よっしゃ、門に着いたな」

目の前にそびえ立つ竜の紋章が彫られた大門を、デイメイションは眺めていた。

「デカい。何十メートルあるんだろ？」

リヨウスケはその圧倒的な存在感に息を飲む。そんな中、俺は付近を徘徊している門番がいなか周りに警戒を配るが、意外にも門番は愚か、その建物さえ見当たらぬ。そうなると、どうやってこの門は開かれるのか、疑問が浮かぶ。

「まあ、押して開けりゃあ、問題ないっしょ」

「無理でしょ。だいたい厚い鉄で出来た門を押して開け——」

目の前の光景に啞然とするリヨウスケ。開いた口は塞がらないとはこのことだろう。俺も目を疑った。

厚さ三メートルはあろう鉄の門を、デイメイションはデコピンで吹き飛ばしたのだ。いったいどれだけの密度がその指に集約されているんだ。

叩き付けられて散らばったパズルのピースみたく飛んで行く門の破片とデイメイションを見やり、俺は思った。

押して開けるんじゃないのかと。

「よっしゃ、行くぜい！」

そうデイメイションが門を抜けようとするも、一旦足を止めた。後ろから続く俺達も何事かと足を止めたのだが、その奥に目を通し

た瞬間、血の気が引いた。

「な、何コレ！」

「何でレッドドラゴンがこんな！」

そう、山脈で戦ったレッドドラゴンが、群れをなして門の前で待ち伏せしていたのだ。デイメイションがデコピンで破壊した門の破片がぶつかったのか、数匹は倒れていたが、それでも十体以上はいる。

「へへへ。ちょっとデンジャーでビッグな雰囲気プンプンだな」

こんな時にもかかわらず、デイメイションはヘッドアーマーを軽く親指で上げ、まるでこの状況を楽しんでいるかのような不敵な笑みを浮かべる。彼には危機感と言うものが無いのか？

「デイメイションさん。そんなことよりどうすんの！ このままじやあ帝国に入れないよ」

「そうだ、入ってもレッドドラゴンの餌食になるだけだ」

「リスク、良ちゃん」

不意に彼は呟いて、帝国の中央にそびえる城を指差す。

「俺がこいつら片付けるから、二人は走って行けよ」

「そ、そんな！ デイメイションさんたった一人で……あ、待って！」

リョウスケが引き止めようとするが、デイメイションは気にせず左腕を回しながら、強気な足取りでドラゴンの大群に身を進める。

「心配すんなよ、こんなの問題ないない。マダン戦の前のウォーミングアップだぜ！」

俺達に振り返り言い終わるや、デイメイションはいきなり俺達の視界から消えた。そして次の瞬間には激しい轟音と、空高く宙を舞って遠くで頭から落ちるドラゴンが眼に映った。

ドラゴンがいたと思われる場所には、デイメイションが拳を天に目掛け突き出していた。

「はっはあ！ 久しぶりにハチャメチャに暴れさせてもらうぜい！」
踊るように鉄のブーツを小刻みにリズム良く鳴らし、相手を挑発

的に指差して叫ぶデイメイション。ドラゴン達の視線が一気に彼へと集まる。

「よしっ！」

デイメイションの言葉を思い出し、今が頃合いだと見計らった俺は、とつさにリヨウスケの手を引いて駆け出した。

「リスクさん！」

「城に行こう！ 彼なら問題なさそうだ」

俺の言葉にリヨウスケはデイメイションを一旦見やると、納得して頷くと。俺の後ろへと続く。

走りながら付近に目を配ると、城下町には建物は在っても人の気配はまるで無かった。もしかしたら、帝国がマダンに支配された時から、住民は消されたのかもしれない。やつの横暴は今まで沢山見てきた。残忍な処刑方に、容赦なき略奪と支配。その最初の犠牲となったのが、この帝国というわけか。

そう想うと、マダンに対する怒りが沸々と湧き上がってきた。

俺の中にある正義感が、力強く打ちふるえた。

「うわっ！ 後ろからドラゴンが！」

リヨウスケの悲鳴で振り返ると、後方から俺達を追い掛けてくる一体のドラゴンを捉えた。

ドラゴンは既に、リヨウスケを引き裂きてしまいそうなところまで迫っていた。

「くっ、やらせるかっ！」

俺は踏みとどまって襲い来るドラゴンに魔剣を振るった。

波動斬でどうにかなると思えないが、何が何でもリヨウスケを助けたいと言う一心で、俺は魔剣をがむしゃらに振るって波動斬を連続で放ち続けた。

それでもドラゴンは怯む程度で、大して効いていない。その代わり、リヨウスケを何とかドラゴンの牙に掛からずに済んだ。

「リヨウスケ！ 俺が時間を稼ぐから走れ！」

俺はこちらにまで駆け寄ったリヨウスケに叫んだ。

「で、でもリスクさん！」

「いいから！ 俺も隙を見て離脱する！」

もしかしたら、デイメイションが助けに来るからと付け加えて、俺はリヨウスケに先を行くよう急かした。

しかしリヨウスケが悲痛な表情で噛み締めて頷いた瞬間、ドラゴンが炎を吹きかけてきた。

「まずい！ うおおおお！」

とつさに剣を前に構えて水の防壁魔法で防いだが、長くは続きそうにない。最悪な事に周りが炎に囲まれてしまった。防壁から少しでも出たりしたら、炎を食らい丸焦げになってしまう。

このままでは、リヨウスケを逃がすこともできない。

絶望的だ。現状では遠くで戦っているデイメイションに期待は出来ない。このままでは……。

「り、リスクさん」

「リヨウスケ——！」

いや、弱気になるな。今、力の無いリヨウスケを守れるのは俺だけだ。ここで諦めたら、リヨウスケも死んでしまう。

もう、誰も死なせない！

無力を味わうのは、もう嫌だ！

力を、もっと守れる力が欲しい！

そう強く願った時だった。

魔剣が真紅の輝きを放ち、俺の中の魔力が一気に膨れ上がり、水の防壁魔法の効力が強まったのだ。

「こ、これはいい！」

体の疲労も徐々に癒えていき、その後も更に力が膨れ上がった。そして——。

「はあああつ！ 波動斬！」

無意識にも俺は剣を薙払うように振るって、波動斬を繰り出した。その威力はとてつもなく、空から炎を吹いているドラゴンを、炎ごと両断したのだった。

両断され、二つに割れたドラゴンの体は、青いガスを吹き出しながら地面に落ちていく。

「こ、これはいったい――」

あまりの不可思議に、前の波動斬とは段違いの威力になっていた事に、俺は困惑を隠せずにいた。そして更に、その動揺を掻き立てるような不意打ちがきた。

《にゃーはっはっは！ リスクちゃん上出来だよ！ やっとボクの力を引き出せるようになったね！》

「け、剣が喋った！」

「あ、この声！」

驚いた。まさか、魔剣が喋り出すとは、それもデイメーションが持つて爆発した時の声と同じだ！

《ふっふっふのふ。さあて、リスク。ボクの力を今こそ見せ付けるにゃあ！》

自信たっぷりに、魔剣は言い放った。

チャプター5 『救世主は彼』

「波動連牙斬！」

次から次へと迫り来るレッドドラゴンを蹴散らし、俺とリヨウスケはマダンのいる城を目指す。

《にやははは！ どうだいリスク。ボクの力、凄いでしょ！》

魔剣ソルデファアが楽しそうに問い掛け、俺は小さく頷いて言葉を返す。

「しかし。何で今まで教えてくれなかったんだ？」

《ん？ 何をかな？》

「お前が実は喋れると言うことだ」

俺は訊ねながら、空から襲いかかって来たドラゴンを跳躍して避け、素早く首を切り落とす。

魔剣の力で、ディメイション程ではないが身体能力が大幅に上昇したのだ。そのおかげで、今の俺はドラゴンを二、三体を相手にまともに戦えるようになった。

《ああ、喋れる事を隠してた訳じゃにやいよ。ディメイションって神様が触ってから喋れるようになったのにや》

「ええっ！ ディメイションさんが触ってからって、あの時？」

俺の隣りを走るリヨウスケが、驚愕しつつ訊ねる。

《うん、でもその時はディメイションのゴッドパワーがあまりに強かったから力が逆流して、ボク自身が耐えきれず壊れちゃったんだにや》

そして『にやははは！』と愉快げな声で笑うソルデファアに、リヨウスケは――。

「ゴッドパワーってなに……？」

隣りでげんなりと訝しげな顔で呟いた。まあ、そんな彼に『あまり気にするな、深く追求しても疲れるだけかもしれないから』と、アイコンタクトで伝えた。

《まあ、その後でアルビノって人がボクを直すついでに強化してくれたから、おかげでリスクが力を解放し易くなる程にまで質が良くなり、今に至るわけだね。にゃっははは》

そうして歓喜にうかれるソルデファア！。しかし、魔剣がこんな明るい性格をしていたとは、最初はあまりの意外性に引いてしまったが、話を聞いてるとこれが面白く。また元々の付き合いが長かったからか、魔剣の軽い態度に慣れるのに時間は掛からなかった。

まあ、改めてよろしく頼むとしよう。

《こちらこそ、改めてよろしくにゃあ》

な、お前。心が読めるのか！

《持ち主のだけにゃ》

そうか、まあ今更そういう能力を前にしても慣れてしまったし、別に構わないか。

「リスクさん。着きましたよ！」

そういう話してる間に俺達は、マダンの城、その城門前に到着していた。

帝国の門に負けず劣らず、レッドドラゴンを象ったレリーフが刻まれた巨大な漆黒の門。強固さを露わにして佇むこの門も、今の俺なら破壊は可能だ。

俺は集中力と魔力を高めるため、柄を強く握り締めて上段斬りの姿勢に構えた。

《ああん！ リスクう——そんな強く握られたらボク。興奮しちゃう！》

魔剣のせいで高まっていた集中力と魔力が大幅に減少した。

「オイイ！ こんな時にあんた何変な事言ってるのオオ！」

ずっとけたリヨウスケが、赤面しながら起き上がって叫ぶ。

《だって、リスクが握る部分はボクの——ああん。ダメダメ！ 恥ずかしくて言えないよお！》

頼むから止めてくれ。そんな事を言われたら余計集中が出来ない。そもそも、お前は男なのか、それとも女？

《女の子だよ。最近はおクっ子が人気でしょ？ だから一人称はおクにしてるのにな》

知るか！

聞かなければよかった。更に集中が出来ない。だいたい、俺の握ってる剣のグリップは、人の体でどこに当たる部分なんだ？

《言えないよお。恥ずかしくて》

ああもう。あんまりじれるから、何だか苛立ってきた。

とりあえず、俺は全てを無視する事にして集中力と魔力を高めることを意識した。ソルデファアは色っぽい口調で俺にいろいろと誘惑気味に責め立ててきたが、それでも無心になりパワーを増幅させていく。にしても、魔剣の嫌がらせが逆に無我の極地への引き金になるなんて、なんとも皮肉なことか――。

「うおおおつ！ 波動、連牙斬！」

集束された力を一気に解き放ち、魔力を全て刀身に流した俺は、渾身の波動連牙斬を振るい放つ。三日月を形作った複数の光の刃が、連続で鉄の門を切り刻んだ。

そして門は、切れ目が入ると次には滑るように崩れ落ちていった。「凄い。リスクさんパワーアップしてる。これならマダンも倒せるんじゃない？」

崩れ落ちた門が地響きを立てて砂埃を巻き起こす中、俺の立つリョウスケが嬉しそうに言った。

「いや、油断は出来ない」

彼は期待しているようだが、俺は未だにマダンを畏怖している。何せ、奴はこの世界を僅か数年で支配するだけでなく、更にはリザードマン、ドラゴンと軍勢を強化して従えている。

帝国の兵士や付近に生息するモンスターを始め、短期間で世界を手中に納めつつあったマダンだ。きっと、奴はディメーションに引けを取らない強大な力を持っているにちがいない。

ここから先、気を引き締めて掛からなければ、死を招くことになるだろう。

「よし、行こう。リヨウスケ、ソルデファ―」

《おうにゃ！》

「うん」

デイメイション、俺は一足先に奴のところへ向かう。必ず俺達に追い付くことを信じているぞ。

今もまだ彼が戦っていると思われる、火の手が上がる帝国の門の方を見やり俺は、心の奥で呟きを残すと共に、意を決してリヨウスケと城内に侵入した。

城内では漆黒の鎧で身を包んだ騎士や、リザードマンなどが配備されていたが、俺はリヨウスケを守りつつ、それらを蹴散らして上の階へと駆け上がって行った。

「うおおお——どけえっ！」

そして、玉座の間を守る二体の金と銀の騎士を纏めて波動斬で両断し、薙払い。そのまま扉をぶち破ってマダンのいる玉座の間へと突っ込んだ。

「遂に、遂にここまで来たぞ。マダンッ！」

俺は玉座に腰を降ろしてる黒い影に剣を差し向けた。次第に影の姿がはつきりとしてくる。

「ふうん、城内が騒がしいと思えば、君でしたか。その顔、確かリスクって名でしたっけ？」

「お、女！」

俺達は目を疑った。玉座に君臨していたマダンとは、妙齡の女性だった。

前髪に青いメッシュの掛かった白髪、同色の白い肌。

幼さを感じさせるも、艶やかで凜とした顔立ち。

優しく見据える蒼天のように透き通ったつぶらな瞳。

そして純白でロングのウールコートを羽織った、全くの予想を翻す美女。

「ふふ、いかにも魔王な外見をしていると思ってましたか？」

マダンは俺を嘲るように微笑し、玉座から腰を上げて悠然と立ち尽くす。

《うわあ、マダンってスタイルいいね。出てるところ出て、締まることは締まってるよ》

前髪をかきあげて見下すようにこちらを見据えるマダンに対し、ソルデファアはしょうもないことを口にした。

「あんたはこんな時に何を言ってるんですか……」

呆れ顔でリヨウスケは呟いた。同感だぞリヨウスケ。

「ふふ、私はルックスには自信を持っておりましてね。嬉しいですよ。そう言っていただけ」と

低調に頭を下げて礼を示すマダン。顔を上げると、女神を連想させるかのように優しく微笑みかけた。しかし腰をくねらせ、胸を乗せるように腕を組む姿勢は、何ともけしからん。

《うわあ、リスクってオヤジみたいな事言うね》

うるさい黙れ。だいたい、あんな腹黒そうな女よりも、ハノの方が全然スタイルが良いし、美しい。

《ハノちゃんは胸ペツタンコじゃん》

貴様あああつ！ 次それを口にしたら埋めるぞ。

《怒らないでよ。事実じゃん》

「あ、あの、リスクさんとソルデファアは何を話してるの？」

「少年、君は聞かない方が賢明ですよ」

俺と魔剣へ訝しげに訊ねるリヨウスケを、マダンがクスクスと笑いながら忠告した。どうやら、マダンも相手の思考を読み取れる能力があるようだ。

「まあ、私くらいにもなれば、相手の思考を読み取るのもわけない

ことですよ」

手のひらを返し、含みの籠もった笑みを浮かべるマダン。蒼い瞳を細め、俺達をしつかり捉えていた。

流石はボスか。視線からは冷酷な殺意が感じられる。

マダンは既に戦闘体勢に入っていた。

「マダン。お前の目的は何だ？」

俺も気持ちを切り替え剣を構えて、マダンを睨み据えて問い掛けた。

「今更それは愚問では？ 次元の悪魔の目的を知っているのですから、訊く必要は無いでしょう？」

何が可笑しいのか、桃色の唇に指をなぞらせ、色気ついた笑みを浮かべたマダン。さつきから笑顔を絶えず崩さず、俺達を見下す。奴の十分過ぎる悪意がひしひしと伝わってくる。

「……そうだったな。これ以上話をしても無駄だな」

俺は魔剣を握る力を込め、そして奴に覇気を込めて言い放った。

「マダン！ お前を倒し、この世界を救う！」

俺はソルデファアを大きく振り上げながら、地面を蹴りだし、一気にマダンへと間合いを詰めた。そして、瞬時に横に剣を薙いだ。

「あらら、遅い過ぎですよ」

マダンは腰だけを動かし、後ろに身を反らし、俺の斬撃を紙一重でかわす。

柔軟かつ機敏な動き。しかし、まったくの余裕の表情から、ワザとギリギリまで引き付けての行動だと窺えた。

くそっ——ならっ！

俺はすぐに切り替えし、縦斬りに移行しようと試みた。

「避けるのも、面倒ですね。よいしょっ」

だが、それよりも速い身振りで、マダンは跳ね返ったバネのように後ろに反らしていた上半身を起こし、その勢いを乗せた掌底を俺のみぞおちに当てた。

「ぐはぁ！」

心の底まで響くような痛烈に思わず呻きをあげてしまった俺は、マダンの掌から弾き飛ばされ、リヨウスケの手前にまで転がった。

「り、リ斯克さん！」

「リヨウスケ、来るな」

起き上がって、近寄ろうとするリヨウスケを俺は手で制止させる。リヨウスケは愁い、いや、危惧の念を抱いてる様子で俺を見据えていた。

「大丈夫だ。俺とソルデファアは勝つ」

自分自身も含めて安心感を持たせるために、俺は意気込みを發した。

そうだ。まだ戦いは始まったばかり。先手を取れなかったが、次は当てる。

「ふふふ、いいですね。その活気に満ちた顔を、絶望に染め上げるのは実にいいです。ああ、そうだ」

マダンは何か思い出したように軽く手を叩くと、手のひらを俺に翳し、魔力を集めて行く。

最初は手のひらサイズの球体が、次第に魔力を吸い取り、遂にはマダンの胸を覆う程にまで膨張した。

「ゲームをしましょう。ドッジボールというゲームです。私考案のオリジナルドッジボールですから、少々ルールは違いますがね」

両手の中央に浮かばせてる、電撃が迸る黒い魔力の球体を見やりながら、マダンはルールを説明し出した。

「まずは私が投げますから、あなたは打ち返して下さい。私もそれを跳ね返します。ちなみに、この魔力の球体は魔力を吸い取り膨張し続けます。つまり――」

長引けば長引く程、球体は膨張し続け、威力が増幅していく。そ

うなると最終的に食らった方は、大きなダメージを負うという訳か。
「そのとおり。では、いきますよ。それっ」

「なっ！」

は、速い。軽く前に押す仕草にも関わらず、マダンが飛ばした球体は、風を切り裂くような速さでこちらに押し寄せてきた。

「くっ！ うおお！」

魔力の球体をどうにか受け止めた俺は、目一杯の魔力を斬撃に加え、そのまま押し返した。すると球は俺の体を覆う程にまで膨張し、マダンへと飛んでいく。

「よしっ！」

これだけデカイ魔力の球なら、マダンも流石に受け切れまい。そう思った俺だったが、それはすぐに甘い考えだと思い知らされた。
「あらあら、勝負は始まったばかりですよ。そんなに急ぐのは良くないですよ。ほら」

なんとマダンは、軽く手を添えてやるだけで魔力の球を俺に弾き返したのだ。それも、更に球体を膨張させた状態で。

「くっ！ ぐおおお！」

《り、リスク！ これはヤバイよ！》

明らかにレッドドラゴンも飲み込めるだろう、それ程にまで巨大化した魔力の球体に俺は戦慄を覚えた。

マダンの魔力がまさかこれ程とは、予想を遥かに上回っている。

俺は魔力を高め、飛んで来た球体を押し返そうと必死に踏み止まろうと試みた。しかし、徐々にのし掛かって来る重さは上がるばかりで――。

「ぐ、ぐうああっ！」

このままでは、押しつぶされる！

「リスクさん！」

「リヨ、リヨウスケ……逃げろ！ 君まで巻き添えを食らう前に！」
リヨウスケは入口に近い位置にいる。彼だけでも逃がさなければ、時間を稼がなければ！

「で、でも！」

《も、もう耐えれないにやあー！》

ソルデファアの嘆きと共に、徐々に膨張していく魔力の球体は遂に天井まで及ぶ大きさにまで広がり、俺と魔剣を飲み込んだ。体全体に激痛が走った。

焼けるような、痺れるような。鋭く熱い痛みが、俺を襲った。

俺は、このまま消滅するのか……？

ここまで来て……終わってしまうのか？

徐々に意識が保てなくなり、視界が薄れていく。

意識が飛ぼうとするその時――。

「諦めんなよ。まだお前を死なせはしないぜリスク」

救世主は、現れた。

『ダブルブリット・フィスト！』

どこからともなく飛んできた漆黒のグローブが、膨張した魔力の球体を貫いた。

ぽっかりと中央に穴が空いた魔力の球体は、眩い光を放ちながら派手に爆散した。

「何っ！」

腕の袖に額を覆い隠し、眩しげに眉を顰めて爆散した球体を見やるマダン。ここで初めて奴の顔色が、驚愕へと変わった。そして、仰向けで倒れている俺の所に、彼が天井から降り立った。

「へっへっへ！」

マダンの魔力球体により天井が崩れたおかげで、見えるようになっていた夜空に浮かぶ満月の光が、彼と俺を照らし出す。

そんな中、彼は不敵な笑顔を俺に向けた。

「大丈夫か。リスク」

「あ、ああ」

「へへっ、いよしっ！ パーティーには間に合ったみてえだな！」
月を目掛けて彼は手を翳し、高らかに名乗った。

「デイメーション！ 参上だぜい！」

そして、マダンに指差し、にやけ面で彼は言い放った。

「覚悟しなっ、次元の悪魔。こっからは、この俺が相手だ！」

チャプター6『デイメイションは燃えている!』

「へへっ」

相変わらず余裕のある態度を露わにし、デイメイションはマダンに対して不敵な笑みを浮かべた。

逆にマダンは険しい表情で彼を睨み、忌々しげに発する。

「デイメイション。そうですか、あなたがあの次元の神。デイメイション・ザ・カオシック」

「はっはあ! 俺も有名神になったなあ!」

「当然ですよ。あなたは次元の神の中でも異質中の異質。何より次元の神の中で最も数多く、強い次元の悪魔を撃破してきた強者。我が主、タキオン様もあなたと次元調律使アルビノ、そして時の女神ラミアグレスには注意しろと申してましたしね」

デイメイションを指差しながらマダンが口になると、指さされた本人はよろりと後退り、顔色を驚愕に染めて叫んだ。

「な、何いつ! た、タキオンだとお!」

何だ? デイメイションがタキオンと言う言葉に過剰な反応を示したが、何者なんだ、そのタキオンとは……。

「——って、誰だ?」

ずっこけるマダンにリヨウスケ。ここにいる全員が面食らった。

知らないのに何でそんな知ったかぶりなりアクションを取るんだデイメイション!

一瞬にして緊迫の雰囲気がぶち壊れたぞ。

「ぐう、タキオン様を知らないとは、愚かしい。実に愚かしいですね。いいでしょう。説明しましょう、タキオン——」

「説明しよう。タキオンとは、次元の悪魔で最も力を持ち、次元の悪魔を束ねる総大将だ。奴を中心に次元の悪魔は統率され、計画性ある行動を行っている。全知全能の馬鹿だ」

マダンの説明を遮り、人差し指を立てて勤勉な態度で説明するデ
イメイション——って。

「知っているじゃないかデイメイション！」

さっきのはワザとだったのか。というか、妙に説明曖昧じゃない
か。特に一番最後とか悪口だろ。

心なしか、デイメイションのせいで見せどころを奪われ、それ故
に虚しく跪いているマダンの姿が嫌に惨めに見える。

「く、まんまとやってくれましたねデイメイション！ さっそく私
に恥をかかす精神攻撃とは、やりますね」

いや、攻撃だったのかアレ？

悔しげに齒軋りを立てて身を起こすマダンだが。何だかコイツも
馬鹿っぽく見えてきたぞ。俺と同感か、リヨウスケも呆れ顔で見て
いた。

「まあ、良いでしょう。先手は取られましたが。ここからはずっと
私のターンです」

力強く指差し宣言を下すと、次の瞬間マダンが俺の視界から姿を
消えた。

「まずは、小手調べといきましょうか！」

その声に気が付いた頃、奴は既にデイメイションの背後に回って
おり、跳躍座間に連続蹴りを繰り返した。

凄まじく鋭い蹴りだ。突くように放たれ続ける両脚が、虫の羽ば
たくような音を出し、無数に在るように見える。

「へへへっ！」

しかしそんな蹴りの嵐を難なくデイメイションは流す。上半身を
僅かに揺らす程度のモーションなのに、一撃もヒットしていない。

構わず着地後でもマダンとは休む暇なく攻撃を繰り返す。風を切り
裂くような後ろ回し蹴りも跳躍して避け、その後に続けざま放たれ
た追撃のハイキックを左手でガードした。

威力を吸収出来ずに弾き飛ばされるも、デイメイションはバウン

ドすることなく砂埃を巻き上げて地を滑り、時間差をおいて踏み止まった。

なんて攻防戦だ、これが神と悪魔の格闘。

僅か数秒の出来事なのに、気が付けばもう手に汗を握っている。あまりの速さと勢いに、俺はただ息を呑むだけだった。

「へっへへ。いい蹴り放つじゃねえかマダン。だけど、まだまだだぜ」

不敵な笑みを崩さず、寧ろワクワクしてきたと、興奮の高鳴りを表情に出しているデイメイション。屈み気味の姿勢から立て直し、下げていた拳を胸の高さまで上げ、構えを取った。

「フツ——こんなのは序の口ですよ。そろそろ本気でやります」

対するマダンは、膝を上げていつでも蹴りを出せそうな態勢のまま、指を振ってウイंकを送りつけた。

あれほどの凄い格闘戦を行っておきながら、両者はまだ本気じゃなかったと言うのか。

《ば、化け物だにゃあ》

お前が言っても説得力ないぞ、ある意味ではお前も化け物なんだから。

《失礼だにゃあ！ てゆうか、あの二人の打撃戦何だけど、見てて凄いにゃあ。マダンの一撃一撃は、リスクが繰り出した全力波動斬と同等の威力だったよ》

「な、なに！」

デイメイションはそんな一撃を、左手一本であっさり防いでいたと言うのか？

《そうにゃ。でも二人が言った通り、まだまだこれからみたいだにゃあ》

じゃあ、これから行われる戦いは、より過激なものになるのか。

《多分そうにや、だから早く非難しないとヤバいかも》

とは言っても、俺の体はボロボロだ。回復が間に合っていない。腕を動かすのもやっとで傷の治療魔法すら行つのも困難な程、体は衰退している。

それでも動かなければと、どうにか身を起こそうとした所で、リヨウスケが俺にまで駆け寄り、満身創痍の体を起こしてくれた。

「すまんリヨウスケ」

「いえ、早く安全なところに移動しましょう」

肩に手を回して俺を支え、リヨウスケは必至に入口まで引きずり移動する。その途中、俺はデイメイションを見やった。

「マダン。マジで戦い合う前に、ちつと訊くぜ？」

右手は腰に当て、左手でマダンを差してデイメイションは問う。

マダンは不可解に眉を顰めながらも『どうぞ』と手で肯定を促した。「さつきドラゴン蹴散らした時に出会ったんだけどよ。小さい少年少女達にな。……アイツらの親、帝国の民で全員お前に殺されたみてえなんだ」

経緯を語るデイメイションの表情は、何時になく険しい。顎に手を添えて、思い悩むような仕草で更に話を続ける。

「んで、ちよつと思つたんだ。何で子供達だけ生かしていたのかわつてな。民を殺した時、子供達もその場にいたみたいだけど。お前子供に何もせず、高笑いだけして去ったそうじゃねえか？　ちよつと興味あるんでな。訊かせてほしいのさ」

そして、問い掛けたデイメイションは横目にマダンを見やる。紫色に輝く彼の瞳には、黙するマダンがくつきりと映し出されていた。暫しの沈黙が訪れるも、それはマダンの高らかな嬌笑が打ち破った。奴の凜々しさ溢れる声には、艶めかしさもあるが、しかし、共に邪念を感じさせるものだった。

「何を訊ねるかと思いきや、そんなの決まっています。面白いからですよ」

面白いから……だと？

「ふふふ、だつてそうでしょう？ 養ってくれる親が亡くなった子供達の絶望していく様は、観ていると何とも滑稽。快感ではないですか？ くくく——あっははははははは！」

何て、何て奴だ！ 子供達が苦しんで生きる様をコイツは、コイツは楽しんで見物していたというのか！

「ゆ、許せない。いったい子供達を何だと思っっているんだ！」

流石に聞き捨てならないマダンの言動に。今まで本気の怒りを見せなかったリヨウスケも、ここにきて初めて敵意の含まれた怒気を発した。

「そうですねえ。玩具ですかね？ 暇つぶしの遊び道具。ふふ、帝国を飛び回るドラゴンに、町を徘徊するリザードマン。それらに見つかって狩られる際に響く子供達の断末魔は、ホントに心が和ませるハーモニーですよ。ははははは！」

高らかに笑い声を上げるマダンを前に、俺の隣りでリヨウスケが齒軋りを立て、血が滲み出る程に拳を握り締めていた。

「リヨウスケ……」

気持ちは俺も同じだ。こんな奴に今まで殺されたみんなは弄ばれていたのかと思うと、憎くて仕方ない。

《リスク……》

家族を始め、仲間達が涙を流し死に逝く姿を、平然と眺めて楽しんでいたコイツが許せない。

「なる程なあ！」

そんな中、何度かデイメイションだけは両腕を組んで、目を閉じて何度もうんうんと軽いテンションで頷く。そして、溜め息混じりにやれやれと横に首を振ると、先の態度とは打って変わった鋭い眼光をチラつかせて口にした。

「もしかしたら、お前のような奴でも救いようはあるかなあ——っ
て思っていた」

次第に剣幕も凄みが増し、彼から強いプレッシャーを感じた。

「だがよ。お前からこんなこと聞かされたら。あの少年少女達の言

葉を思い出したら、俺のハートが熱くなってきたぜ」

両拳を胸元でぶつけ、火花が散ると共に、彼は力強く言い放った。
「願いたい叶えてやるぜ。約束通り、マダンをやっつけてやるぜガキ共！」

感じる、猛火のように燃え盛る意思を。デイメイシオンは今、初めて怒りを露わにしている。

淀みなくマダンを睨み据える紫色の瞳は、美しく煌めいていた。

彼の熱い心が、こちらにまで伝わってくる。

「ふふふ、御託はそろそろ終わりにして、始めましょうかね」

狂気的笑みを歪めて、マダンは足幅を広げ姿勢を低くし、弓を放つような構えを取った。

「おうよ！　ぶっ飛ばしてやるぜマダン！」

対するデイメイシオンも拳を前に構え、リズム良くステップを踏む。

切迫感ある間が空いたと思った刹那——デイメイシオンが先に動き始めた。

『ダブルブリットフィスト！』

放たれた二つの剛拳。

もはや俺の肉眼では捉えられない。稲妻の域を超える速さだ。しかしマダンはいつの間にか屈んだ状態になっており、それを俺が確認した時にはマダンの後ろの玉座が、爆発を起こし吹き飛んだ。後方の壁も破壊され、夜の山並みが見える。

「ふっ、今度はこちらの番です」

そうマダンが直立してから、細い腰を軽く捻って半回転する時、デイメイシオンは俺達に掌を向けて防壁魔法を展開させ、そして跳躍した。

その頃にはマダンが、鋭利さの増した回し蹴りを繰り出していた。何故、相手に詰め寄らずその場でそうしたのかに違和感を覚えたが

……次の瞬間、俺達はその意味を理解した。

風を斬る音が聴こえたかと思えば、何千もの人が入ろうとスペースが有り余る広さを持つ玉座の間が、マダンの回し蹴りの軌道と同じ線を描き、斜めに崩れ落ちた。

《す……凄いにや。今のは回し蹴りでカマイタチを起こしたのかなにや？》

お前でも、何をしたのか全く解らないのか。

《デイメイションがとつさにバリアを張ってなかったら、ボク達スパっていつてたにやよ！ スパって！》

あの微妙な腰の身振りだけで、こうなることを予感していたのか。なんて勘の良さだ。

レベルが違う。神と悪魔の戦いは、これほどまで高いのか！

瓦礫が城外と部屋内に崩れ落ちる中、俺は空にいるデイメイションを見上げ、彼の凄さを改めて実感した。同時に、マダンの力に畏怖を抱いた。まだ奴の攻撃は始まったばかりだ。

「ふふふ、まだまだ行きますよ。それぞれそれぞれそれそれそれそれええッ！」

「な、何！」

《にやあ！ 嘘！》

「れ、連射出来るのかあの技！」

左足を軸に、マダンは宙にいるデイメイションにあの蹴りを放った。数十メートルはマダンから離れているにも関わらず、蹴りの風切り音が無数に聴こえる。

回し蹴りから、踵落とし。上、中、下段、前蹴りとランダムに動きは統一されない。その多彩な蹴りの連携モーションは、次第に目に見えるスピードを超えていく。

速すぎる。まるで、竜巻だ。マダンの動きを形容するなら、そうとしか言いようが無い。

上空にいるデイメイションは大丈夫なのか！

「へへへ、遅いぜえ！」

デイメイションも負けてない。体を捻り、回転を加えてと、空中であのかマイタチを軽々かわしている。

『受けな。イオン・バースト！』

ジャケツトを大きく開いて胸をさらけ出し、必殺の一撃をデイメイションは放つ。標的へと目掛け、閃光は突き進む。

「ふっ、そんな単調な攻撃！」

直撃するかと思いきや、マダンも背中からコウモリを模した翼を展開させて飛び上がることで回避。直後に紅い閃光は地面を貫いた。マダンのいた場所には、ぽっかりと巨大な穴が生まれた。

その頃にはデイメイションは着地をきめていたが、空にいるマダンに目を向けて険しい顔を見せた。

俺達も追って見上げてみると、満月を背にマダンが右手を上を翳し、妖しげな笑みを浮かべていた。蒼天のように青くつぶらな瞳は、今となつては狂喜で濁っていた。

「うふふ、足手まといがいると、苦労するでしょう？」

マダンは意味合いな言葉を並べ、翳している手の平の上で魔力の集束を始めた。

「ですからこの帝国ごと、吹き飛ばしてあげますよ。あははははは！」

そうして後ろの満月を覆う程に膨張した黒い魔力の塊を、奴はこちらへと目掛けて投げつけた。

《や、ヤバいにゃあ！ あれ、帝国どころか山脈も、この辺一帯を完全に吹き飛ばせるにゃあ！》

「何だと！」

マズいじゃないか。帝国にはまだ子供達がいる。俺やリョウスケもいる。逃げられるのはデイメイションだけだ。

このままだと、みんな死ぬ。どうすればいいんだ。

「仕方ねえ。コイツは使う気はなかったんだが……。切り札を使う

しかないな」

「え、切り札？」

訝しげにリヨウスケが訊ねると、デイメイシヨンは小さく頷いてから正面に手を差し出す。すると手前に、黄金に輝く滑らかな丸みのある棍棒が現れた。

「そ、それって！」

驚愕するリヨウスケを尻目に、デイメイシヨンは棍棒をマダンに向けて言い放った。

『デイメイシヨンのバット！』

チャプター7『受ける！ 必殺のデコピン！』

黄金に煌めく金属の棍棒——デイメイション・バット。

いったい、それは何なんだ？

どういった武器なんだ。

棍棒の黒く細い部分を右手で握り締めるデイメイションに、ただ眉をしかめていた俺だが。

「へへへ。ま、見てなつて。ああ、しゃがんでおけよう。立つたら危ないぜえ」

デイメイションは一旦俺達に振り返るとそう手で促せ、不敵な笑みを浮かべて棍棒を何度か横に軽く振り回す。次にはこちらへ目掛け落ちて来るマダンの魔力球に視線を替えて、肩に棍棒を乗せて構える。

打ち返す——そんな対抗意識が伝わる構えだ。しかし無茶だ。叩き込んだ瞬間に爆発とかしたら危険だぞデイメイション。

そんな懸念を抱く俺が次に見た光景は、大きく目を見張るものだった。

『カキイーン！ デイメイション・インパクトオ！』

おひただ

夥しい電撃を纏う魔力の球体を、デイメイションは直撃寸前のタイミングで棍棒を大きく真横に振るい、軽々と打ち返したのだ。そしてデイメイションの言い放った擬音と似た、爽快感ある金属音を奏で、マダンへと向かって行くではないか。

「ハッハア！ 一本足のリズム打法だぜい！」

振り終えたデイメイションは、してやったりの不敵な笑顔で飛んでいく魔力球を見送る。

「な、何ですって！ う、うわわ！ うわあああああ！」

驚愕したマダンの顔色が青く染まる。

マダンにとって予想外のハプニングだったのだろう。デイメイションが打ち返した漆黒の魔力球は、白く神々しい光の球へと変化を

遂げ。更にはより巨大に、より加速を付けて返された——その所為なのか、反応が遅れたマダンは回避を行えず、そのまま光に飲み込まれてしまう。

マダンを飲み込んだ光は、月の彼方へと螺旋を描くように変則的な動きで飛んで行き、だんだんと小さくなる。

目視が出来なくなつた頃に、眩い発光は起きた。

遠くの空で光が爆発した——にも関わらず。月を覆う程の紅い発光が、世界を夕焼けに染め上げた。凄まじい威力だ。これがデイメイション・バットの力なのか。

「へっへっへ。ホームランだぜい！」

俺達が腕で目を覆いながら発光の眩しさに背ける中、デイメイションはトントんと棍棒を右肩に載せ、左手は腰に当て、愉快に眺めていた。

時間が経つと発光は次第に薄れ、空は本来の色彩を取り戻す。満月が照らす夜空へと。

「……やったのか？」

不気味な静寂が包む中、俺は月を睨み懸念を囁いた。
すると――。

「うぐあ！」

静寂を払う呻きが響いた。何かと、視点を月夜から玉座側に移し替えてみれば、何とマダんがうつ伏せで倒れていた。そのマダんの隣りには、空間に黒い切れ目が生じている。どうやら、間一髪空間を切り裂いて中に入り込むことで、ここへ移動したようだ。

しかし、一時的な撤退を行うならば、何故この場所をマダンは選んだ？

「空間移動つてのはな。なかなか難しいんだぜリスク」
デイメイションが語るにはこうだ。

空間の移動を行う条件には、円・点・線の三つを揃えないといけ

ないらしい。

円——空間移動範囲の拡大。それを使うには一定のエネルギーを練り上げなければならない。練り上げた量により、移動範囲が増減する。

点——その中で最も重要な要素の一つ、それは目的地。移動先を予め捉えておくこと。移動先のイメージを固定し続けなければならない。

線——もう一つは連結、トンネルを繋ぐこと。その工事をやらねば道は生まれない。これが一番力を使うようだ。

これらの作業を行うことで、空間移動は可能となる——と、デイメイションは説明してくれた。

《でも、言っとくけどリスク。天才魔術師でもこれは恐ろしく至難の技なのにや。デイメイションやマダンは一アルタイムであっさりやっているけど、魔力にしる何にせよエネルギーの質量凝縮や調整はね、究極魔法の詠唱時間や儀式の取り組み以上に難易度高いんだよ》

ソルデファアが補足を追加してくれたおかげで、不可解がようやく解けた。

なる程、ただでさえ時間と技術を必要とする以上、あの状況では遠くに逃げる準備が整わない。マダンがここを選んだのは、この場所が既に記録されたポイントだったから、という訳か。

《そういうことにや。よく出来ましたリスク。ご褒美としてボクの艶めかしいボイスを》

いらん。止める。怖気が走る。

《そこまで言うのかにやあぁッ！》

とりあえず今はマダンだ。奴はどうなっているんだ？

「はぁ……はぁ——う、あぁ……！」

見れば奴は苦痛に顔を歪ませ、荒い息を吐いて呻いている。ウルコートは直撃の際に脱ぎ捨てたのか、あるいは光に飲まれた時に

消滅したのか、羽織ってはいなかった。

所々が焦げた白いシャツに、灰色のスラックスの右足側は太ももまで破れ、白い素肌からは生々しい赤い擦り傷をさらけ出していた。痛々しく胸を押さえて悶える姿には、敵とはいえ同情を禁じ得ない。

「ぐ、ぐう……く、クソオオオオオオオ！」

《にゃ、にゃあ！》

だが、俺のそんな同情心とは裏腹に、仰向けで身を大の字に寝かせて、マダンは怒りの咆哮を上げた。先の満身創痍だと抱いた思考を撤回してしまいそうな、そのとてつもない覇気と怒気が籠められた叫びに威圧され、俺達は後ずさってしまった。

「クソガアアッ！ ふざけやがってエ！ 何がバットだ！ ワタシをコケにしやがって！」

目の端は最大までつり上がり、狼を想わせる鋭い牙を剥き出し、荒れ狂う野獣のような表情を見せるマダン。あの余裕と愛嬌に満ちた顔が、今では信じられないくらい変わり果てていた。

「許さん。許さんぞデイメイショオオオオン！」

ゆらりと身を起こし、猫背でうなだれた状態から、勢いよく空を仰ぎ見て怒り叫んだマダン。次にはその蒼く、妖しく光る瞳にデイメイションを映し出し、蒼いガスのような息を唾液と共に漏らしながら、身を低めて前のめりに疾走する。その様は地を這いずり蠢く大蛇の如くと言えよう。

対するデイメイションは、首をコキコキ鳴らして余裕綽々の笑顔で襲い来るマダンを見やっていた。

「へっへへ。まあ、落ち着け——よつとあ！」

マダンが繰り出した飛び膝蹴りをヒラリと回り込むように避ける。「黙れ糞野郎！ ぶっ殺してやる！」

素早くターンをキメたマダンは瞬く間にデイメイションへと追いつき、鈍器を持った時の動作で拳を振り下ろす。けれどデイメイションは頭上から振り下ろされた拳を左手で難なく払い、更には顎を

目掛けて繰り出された追撃の前蹴りをも背面を反らすように避け、そのままバック転へと移行、そうして離脱を図るもマダンは執拗に攻め込んで――。

「へっへへ、こつちだよん。ヘーイ！」

「ンガアアアアッ！ 待てやゴルアアア！」

遊んでいる！ デイメイシヨンの奴、ワザとマダンに必要な攻撃をせず、バック転しながら逃げ回っているぞ。マダンも流石に逆上して思考が働いていないのか、無駄な追撃を繰り返している。

「いい加減にしろオ！ このヒョーロク玉が！」

「ええっ！ ヒョーロク玉って、古っ！」

何なんだヒョーロク玉って？

そんな俺が疑問を抱く中、マダンは手を上に翳し、詠唱を素早く唱え、落雷攻撃を連続で繰り出した。それでもデイメイシヨンは軽々とリズミカルな動きで飛び跳ねて巧みにかわす。

「へへ、フェアにゲームで勝負してやるぜマダン」

最後の落雷を側転でかわした後、デイメイシヨンはマダンを指差し告げた。

「何いっ！ ゲームだと！」

コケにされていると思ったのだろうか。鋭かった眼孔を大きく見開いて発するマダン。このまま更に怒り狂ってしまうかと思いきや。「勝負はジャンケン対決！ 負けたヤツは勝ったヤツの攻撃を強制で食らう！ どうだ？」

「お、おおおう！ 面白そう！ 乗った！ やりましょう！」

「ええっ！」

あっさりと食いついたぞ！

《ま、マダンって根っからの遊び好きなのかにや？》

解らん。けれどさっきの怪物地味な表情が嘘みたいに一変して、つぶらな蒼い瞳を輝かせているな。まるで玩具を目の前にした子供だ。

「へへへ、んじゃあ逝くぜマダン？」

「ふふふ、無敗伝説を誇るこの私にゲームを挑んだことを後悔させてあげましょう」

「ねえ、ディメイションさんの言葉、少し変に聴こえたの気のせい？」

《さあ？》

何故か和やかな雰囲気になっているが。リヨウスケがディメイションに感じた疑問には同意見だ。俺にも“いくぜ”の部分が妙に変な余韻を感じた。

「ジャンケン！」

などと思う間に、勝負が始まってしまった。ディメイションとマダンとは掛け声と共に、手を隠すように構える。

「ポン！」

そして手をスナップ気味に差し出した。

ディメイションが出した手は、拳を作っている。対するマダンは、手を開いて出していた。

暫し沈黙が漂う。

この光景を前に、俺の隣りで眺めるリヨウスケの表情は固く強張っていた。俺はジャンケンと言うゲームを知らないのだが、コレはどっちが勝った事になるんだ？

そう思う中、マダンはニヤリと艶笑し、手を真上に突き出して叫んだ。

「ふ、ふふふ。ふはははははは！ 勝った。勝ちましたよ！ 私の勝ちだあ！ やったやった！ あははは！」

高らかに掲げてスピンの掛かった踊りを見せるマダン。しかし何と云うことだ。負けたディメイションは、ヤツの攻撃を強制で食らわないといけないのか！

「さあて、約束通り、私の一撃を受け——」

「何勘違いしているんだ」

「え？」

俺がルール何て守らずマダンを倒すんだと口しようとしたら、愉

快に笑うマダンの言葉を、デイメイションが凄みのある声色で遮った。

「まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！」

「え、ええ！　だって私が勝ったんですよ！　わ、私が攻撃して良いはずでは？」

困惑するマダンにデイメイションは力強く指差し告げた。

「このゲームは、負けるが勝ちのゲームなんだぜい！」

「ちよっ！　嘘つくなっ！　お前今そのルール作っただろ！」

「うるせえええっ！　俺がルールだ文句あつかああ！」

「ええっ！」

デイメイションがキレた！

何という理不尽な逆ギレだ。

驚愕に染まるマダン。同時に抗議の色が窺われるも、デイメイションは無視して天に手を上げる。

「よって、俺のターンだぜい！　へっへっへ。覚悟しな、マダン」

そして振り下ろし指差したデイメイションは、ニヤリと不気味な笑みを浮かべながら、じりじりと困惑するマダンに歩みよる。

「そ、そんな馬鹿な……う、うわわ」

困惑にマダンは愁いを帯びた顔で後退るも、すぐに詰め寄られ、デイメイションにより前髪を書き上げられる。

「罰ゲーム、だぜーい！」

そして、デイメイションは爽やか過ぎるくらい満面の笑みで、涙目のマダンのデコに右の握り拳を向けた。

『ウルトラ・デコピン・タイフーン！』

「がふぁっ！」

響きある叫び声に合わせ、デコピンは叩き込まれた。

デコピンをぶち込まれたマダンは物凄い勢いでひっくり返り、地面を何度かバウンドしてふっ飛んでいく。まるで水面に投げ込んで飛び跳ねる小石のようだ。

それと同時に、デコピンの影響による衝撃波なのだろうか、紅い

光の突風が巻き起こり、繰り出したデイメイシヨンの前方を軸に周りの瓦礫が——果てには玉座までもが城の外へと吹き飛ばされた。

吹き荒れる風が止む頃、俺は目元を覆っていた腕を下ろした。見ればマダンが地べたに這いつくばっている。

玉座側の壁はこじ開けられ、ジュウタンや飾りに玉座、あまつは瓦礫までも綺麗さっぱり全て吹き飛ばされたからか、帝国の街並みから山脈まで、見晴らし良く外がさらけ出しされていた。

「へへっ。決まったぜい！」

デコピンを繰り出した姿勢のまま、デイメイシヨンは言い放つ。

「……デコピン凄すぎ、てゆーか、マダン何で逃げなかったの？ 普通ルール守る？」

《マダンって律儀だけど、アホだにや》

もっともだ。マダン頭悪いだろ。

このアホらしい光景を俺達は、虚しさを漂わせて啞然と眺めていた。

だが……。

「ぐ、ぐううう。おのれデイメイシヨオオン……自分ルールとは卑怯なりい」

マダンはまだ死んでいなかった。あれほど壮絶な一撃を諸に頭から食らったにも関わらず、平然と立ち上がった——。

《おわあ！ 頭が欠けて脳みそ見えるにや》

「うぷっ！ はっ、吐き気が……」

全然大丈夫じゃないようだ。ソルデファアの言う通り、頭が抉られたように欠けていて、左側の目上からは脳みそがさらけ出されていた。リヨウスケが吐きそうになるのは無理もない。くつきり中が見えるのだから。

というか、あれほどのデコピンを受けといてこの程度の損壊、と

いうのもある意味すごい気がするんだが。

「へへ、まだやるかいマダン？」

そんなマダンにデイメイシヨンは右腕を左手で支え、飛び出す鉄拳こと、ブリット・フィストを放つ体勢に入っていた。

立つのがやつとでフラフラなマダン。明らかに勝敗は決している。もはやトドメを刺されるのを待っただけのはず——なのだが、当の本人は異様なくらい落ち着きを払っていた。

妖しく煌めきを放つ瞳孔にはデイメイシヨンを始め、その後ろで観戦している俺達も含め、鋭く眼を凝らして舐め回すように見回す。そして今の状況に何とも似付かわしくない、不可解な笑みを見せた。「……くくく、まさか。アレを使わねばなくなる程追い詰められるとは、思いもしませんでしたよ……ふははっ」

薄笑いで軽く肩を揺らし、血反吐を地に飛び散らせ、唇に垂れた鮮血を拭き取りながら、マダンは口にした。

「タキオン様にプレゼントする玩具でしたが。ちょうど良いです、あなたでその力を試してみましよう。ふふふ、ふははははは——」

……

そして、高笑いの途中、マダンの背中から青白いガスが抜け、同時に高笑いはピタリと止んだ。

次の瞬間、マダンは糸が切れた人形のように崩れ落ちた。

「し、死んだ？」

誰にでもなく、リヨウスケが恐る恐る問い掛けた。

「いや、肉体を棄てて、どっかに逃げ出したみたいだな」

マダンに近付き、その頭を掴み上げて確認するデイメイシヨンは、険しい顔で呟いた。

「ふははははは！ 逃げてませんよ！」

不意に、マダンの声が頭の中に響いた。リヨウスケやデイメイシヨンが辺りを見回すところを見ると、彼らにも聞こえているようだ。「くくく、外をご覧なさい。そして——」

俺達はその言葉に導かれるように玉座の間から駆け出し、城の展

望台へと向かい、海に目を向けた。

遠くの海からゆつくりと、徐々に黒い影が姿を現す。

「な、なにあれ……」

「ば、馬鹿な！」

『——そして、絶望しなさい！ 私の姿に！』

この海面から現れた存在は。確かに存在するだけでも俺達を絶望へ突き落とすに十分な脅威だった。

《にゃ、にゃあああ！ あ、あれは！ リヴァイアサンだにゃあああ！》

海面から現れた影、輝く水色のウロコに覆われ、三日月のような鋭い牙を口元から刃やす、紅い眼光を煌めかす一角の水竜。昔本で読んだ覚えがある伝説の怪物——リヴァイアサン。

そんな、あれは実在したのか。

《当然にゃあ！ だって、あれはボクがリスクのご先祖に当たるガウルスと一緒に封印した怪物にゃよ！》

「な、何だって！」

《しかも、あのリヴァイアサン。あの時とは比べものにならない魔力とサイズになっているにゃあ！》

確かに、遙か先の海から現れているあの怪物は、この帝国全体の規模を越える巨体と言っても過言じゃない。

《多分、マダンが取り憑いたから巨大化したんだにゃ。あれからマダンの邪悪な魔力を感じるにゃ》

『ふふはははは！ その通り。さあ、ファイナーレと行きましょうか？』

遠くから俺達を睨むように見据え、口元を歪めるマダン。

この世界を滅ぼさんとする絶望が、破壊を意する咆哮を上げた。あんな化物、どう戦えばいいんだ。勝率すらゼロと強要させるような存在に——そんな後退る俺達の前に、仁王立ちで口元を吊り上げる者がいた。

「へへへ、確かに、コイツはクライマックスな展開だなあ」

デイメイションだ。

次元の神だけは、やる気満々に奴をすっかり見据えていた。まるで恐れを知らないと言わんばかりに、その紫色の眼孔を凝らす。

デイメイションはリヴァイアサンを指差し、闘志に満ちた声で叫んだ。

「行くぜマダン！ コイツがラストバトルだぜ！」

チャプター 8 『山田良助の謎』

「死ねえ！ デイメイション・ザ・カオシック！」

体を僅かに横に動かすマダン。海面が次第に盛り上がり、空高く迫り立つ水壁すいへきが帝国へと押し寄せてくる。

「大陸もろとも波に飲まれるがいい！」

夜空をも覆い尽くす津波は、前進するに連れて勢いと高さを増していく。その光景を城の屋上から眺めていた俺達はただ、その迫り来る脅威に畏怖して後退ることしか出来なかった。

けれどデイメイションだけは、俺達とは違う反応を見せた。

「へっへへへ。そうはさせねえよ！」

「あ、デイメイションさん！」

デイメイションは言い放つと共に屈伸すると、空高く跳躍して城から飛び降りた。そして高い民家の屋根を次々に飛び移り、海岸へと向かう。あまりの移動速度に俺の目は影しか追えなかったが、確かにそこへ向かうのが見えた。

「デイメイションさん……… いったい何処へ？」

「多分、海岸に——」

曖昧ながらも俺が居場所を伝えようとしたその時。

「リスク。ボクを地面に突き刺すにや。遠視魔法と光景表示魔法でデイメイションを映し出せば、観る事が出来るにやよ」

ソルデファアが口を挟んで効率的な案を出してくれた。

なる程、百聞は一見に如かずだ。俺はさっそくソルデファアを地面に突き刺し、言われた通り魔法を唱えた。俺を中心に六芒星ろくぽうせいを象った紋章陣が浮かび上がると、紋章に歪が生まれ、次第にデイメイションとその風景を映し出す。

彼はやはり海岸の岩場に佇んでいた。何故か顔を隠すように両腕を交差させ、迫り来る津波を見据えていた。

よく見ると、体から紅いオーラが浮き出し、炎のように揺らいで

いる。何をする気なんだ？

訝しげに映像を眺めていた俺達だが。その答えはすぐに出た。

『みんなを守れ』

瞳を閉じ、バツの字に交差させたその腕を空に向け、デイメイシヨンは静かに発した。心地よい声調が響く。

『デイバイン・ウォール！』

開眼したデイメイシヨンは力強い発声に合わせ、交差していた両腕を大きく振り広げた。その動作と声に呼応するかのように、朱色の煌めきを放つ光の壁が現れた。

その巨大な壁は、津波を海岸前で防ぎ。更には遠くの海にいるマダンへと跳ね返してしまった。

《凄い……凄いにゃあ！ あのとんでもない津波を、デイメイシヨンは水一滴も陸地に浸透させずに跳ね返したにゃ！》

デイメイシヨンは帝国だけじゃなく。帝国を囲む山脈付近も含め、陸地に侵入する可能性のある波を全て防いだと言っのか……。

「アニメのヒーローみたいだ……ははっ」

圧巻させる光景にリヨウスケも興奮気味だ。嬉しそうな笑みを浮かべている。しかし、ヒーローの意味は解るのだが。アニメとは何だ？

少し気になった俺だが、さすがにそんな事を訊ける状況では無いので、一応保留にしておこうと思う。

「俺がいる限り、この世界を次元の悪魔の好き勝手にはさせねえぜ、マダン！」

張った胸を左拳でドンと叩き、右手でびっしりとマダンを差し、デイメイシヨンは対抗意識をアピールする。

対するマダンは。

『ふふふ……』

デイメイシヨンの防壁で戻ってきた津波を受けたのだが、全くモノとしてもしていない。あの規模の巨体にとっては、帝国を覆う津波も小波同然と言うことか。

『この程度で粹がりますか。笑わせますねえ』

大きな口を三日月に歪め、マダンとは心身の余裕を告げた。けれどデイメイションには予想の範疇だったのか、そこなくちゃなと状況を楽しんでいる様だ。

「へへっ。当たり前さ！ 何故なら——」

デイメイションは言葉を区切ると、何故か踊りだす。逆立ちして両脚を広げ勢いよく旋回したと思えば直ぐに体勢を切り替えし、両手を交互に地に着け離しを繰り返し、足腰を地面スレスレで回転させている。何という躍動感のある動きだ。思わず魅入られてしまった。

「相変わらず無駄に凄いな。デイメイションさんのトーマスフレア」

「トーマス……？」

「あ、簡単に言えばブレイクダンスって踊りのパワームーブってやつで、パフォーマンスの一つです」

つまり円舞の技の一つか。なかなか奥が深そうな踊りだな。あの嵐を想わせる荒々しいダンス。実に俺の興味をそそる。

《リスクはゆったりした感じより、荒々しい演舞が好きだもんね》

まあな……。

などと思ってる間に、デイメイションが逆立ち状態から体を跳ね上げらせ、加えて空中で数回身を回転させて着地すると、屈んだ姿勢のままマダンを指差す。

「何故なら、ここからが俺の本領だからさ！」

不敵な笑みを浮かべると、デイメイションはすぐさま地を蹴り出し、そして海面を駆け抜けた。

どういった魔法なのだろうか、それとただ走っているのだろうか？《魔力や神力が感じられなにかいから、多分デイメイションは素で走っているにや》

何という凄まじい走力だ。あれほどの脚力を得るに致まで、いたいどれほどの鍛錬を研いできたのだろう。

そんな俺が息を飲んで見据える中、デイメイションはマダンの手

前まで距離を詰めていた。

「よっしゃ、先手必勝！」

そう口にするとき、メイションは屈伸の素振り無しで跳躍を決め、マダンの真上にまで飛び上がる。そして、両手で赤いジャケットを開いた。さらけ出した鉄の胸板に埋め込まれているのは三角形のルビー、そこに赤い光が収束されていく。

『イオン・バースト！』

ルビーから赤紫の閃光が放たれる。

それは今までで見てきたイオン・バーストの中で最も高威力と広範囲の一撃だった。明らかに島一つくらいはあるマダンの体を、軽々と飲み込んだ。

「おおっ！」

「や、やった？」

マダンを吹き飛ばしたかに見えた。

《いや、まだにや……》

けれどもソルデファアだけは、この決定打を否定する。俺とリョウスケはその言葉に思わず一瞬体を震わせ、目を凝らし映像を見た。すると――。

『……ふふん、その程度ですか？』

顔を覆う煙りの中から赤い眼光が浮かび上がった。

「そつ、そんな！」

悪意に満ちたその眼光は、俺達の背中に戦慄を走らせるには十分なものだった。

次第に煙りは晴れ、無傷のマダンが顔を見せた。不敵に裂けた大口を笑みに歪め、メイションを見据えていた。

「馬鹿な！ あれが効いてないだ！」

愕然とさせる光景だ。有り得ない。リザードマンを軽く一掃し、辺り一面をえぐり取る程の破壊力を持つ技。それもより力の入った

必殺の一撃に傷一つ無いなんて。

降下しているデイメイションも、剣幕を張ってマダンを見ていた。
「マジか？」

さすがに本人としても面食らったのだろう。しかし、そんなデイメイションにマダンは一秒の静止は愚か、一抹の容赦もなく攻撃を仕掛けてきた。

「やべっ！」

巨大な三本指の手が、デイメイションを引き裂こうと襲い来る。マダンめ、巨体に似合わずなんて機敏な動きだ。咄嗟の判断からデイメイションは身を固めるが、左側から迫り来るマダンの一撃に弾かれ、激しく海に打ち付けられた。

バウンドを繰り返す毎に水しぶきが激しく散ってゆく。そうして、デイメイションはそのまま海に沈んだ。

《にやわわわ！》

「デイ、デイメイションさん！」

「デイメイション！」

俺達が叫んだのは丁度その頃だ。

時間が経つが、一向に浮かんでこない。不気味な静けさが俺達の懸念を深めた。

まさか、やられたのか？

胸の鼓動が強く脈打つ。このままデイメイションがやられたら、誰も対抗出来ずマダンにこの世界は消滅させられる。情けないくらい、俺の心は不安に駆り立てられた。それと同時に、浅ましく矮小だと卑下しながらも俺は願った。

デイメイション！ お前がいないと世界は救えない。だから、立ち上がってくれと。しかしあんな風に打ち付けられてしまったら、体はバラバラになってもおかしくない。彼が無事である可能性は…

…そんな、絶望に染まりつつあるその時。

『むっ？』

海上が盛り上がり、次の瞬間には水しぶきが上がり、ディメイシヨンが飛び出した。

「おおっ！」

「ディメイシヨンさん！」

《無事だったにや！》

ああ、本当に良かった。

だが、それだけじゃない。なんとディメイシヨンは宙に浮いているではないか。

「空を飛べたのか！」

「ええ、飛べますねディメイシヨンさんは」

《飛べたのに何で今まで走ってたのかにや？》

もつと疑問だ。帝国に向かう際にしてもそうだが、海の上を走るより、明らかに飛んでマダンに向かって行った方が良かったのではないか？

さっきのマダンの攻撃も、飛び回ればかわしきれたはずだろ。

「へへっ。ノリだぜ！」

「ノリかよオイ！」

ディメイシヨンはこちらに顔を向けて舌をチロリと出し、ウィンクして見せた。明らかに人をおちよくっていると見て取れる、間抜けな笑顔だ——と言うか、何でこっちが映像で観ているのが解るんだお前。

しかもさっきまでの会話を聞いていたのか？

「ははは、まあな」

「それじゃあ、さっきの攻撃もノリでワザと食らったの？」

こちらの不安を煽り立てるための演出か？

「ふふん、ヒーローにピンチはつきものっしょ？」

それが真意か！

「そんな無駄にヒヤヒヤさせる演出はいりません！ 真面目にやつ

てよ！」

キレ気味のリヨウスケ。何て言うか、二人の会話を聞いていると、やっぱり危機感が無くなる。だがまあ、それはそれで不安が飛んで安心するからいいのだが。

「怒んない怒んない。ま、実際やべえんだよなあこれが……」

「えっ？」

「どういうことだ？」

「あのイオン・バースト。フルチャージだったんだ。上手く破壊対象だけに食らうように調整したから地形に影響はねえけど、本来なら太陽だつて一撃でぶっ飛ばせる威力だったんだぜ」

何だと！ それほどの一撃が全く手応え無しかったと言うのか！ 驚愕に俺達は戦慄した。あれがデイメイシヨンのとっておきだとすれば、到底勝機はゼロに近い。このままでは、敗北は確実となる。「どうするんだデイメイシヨン！ 他に手は無いのか？」

焦る気持ちを隠せずに、俺は問い掛けた。するとデイメイシヨンは、マダンが口から放つ光弾を再度フルチャージのイオン・バーストで相殺させた後、少し疲れた様子で呟いた。マズい、本当に追い詰められているようだ。

「……一つだけ、あるぜ」

一つだけ……それはいったい何だ？

「祈る。そして願う。それだけだ」

「い、祈る？」

《ね、願う？》

がむしやらに振り回すマダンの腕を、飛び回って避け続けながら、デイメイシヨンは深く頷いた。

「ああ、それだけでいいんだ。何でか知らねえけど、良ちゃんがいる時にみんながそうしてくれるだけで、凄いパワーが漲るんだ」
みなぎ

「えっ？ ば、僕？」

「なんだって！」

思わず驚きの声を漏らした俺は、リヨウスケを見やった。本人は

よく解らないと言った様子で自分を指差しデイメイションと俺を交互に見ていた。

失礼ながらも、俺はずっと疑問に思っていた。彼はどうみても普通の人間、何よりも戦いとは無縁の存在だと。彼の世界を聞いた限りでも、それは良く判った。だからこそより謎は深まるのだ。何故、デイメイションは危険へと彼を引きずり込むのかについて。アルビノがデイメイションに忠告した際に見せた不可解な反応、それが今になって少し掴めてきた。

デイメイションがそんな彼を連れていた理由は、こういった非常事態に備えての事だったのか。

「ま、詳しい理由は俺もよく解ってねえけど。良ちゃんを連れていく理由はそこにあるんだ——と言うわけだから、頼むぜみんなっ！」

こちらに親指を立て、デイメイションは二カツと笑い、八重歯を閃かした。そして、すぐにマダンへ突撃して蹴りを入れるも、大して効果は得られず。平然としたままマダンは拳で振り払う。それをデイメイションは更に高度を上げること、紙一重に難を逃れた。見る限りまだまだやれそうだが、このまま長期戦になればデイメイションはいずれ動きを捉えられ、劣勢に追いやられるだろう。しかし、そんなことを俺が心配しても、何も変わりはない。

やはり、彼の言葉を信じ、今は祈るしかないか。

「リョウスケ！ ソルデファー！ 祈ろう、デイメイションの勝利を！」

そう、俺達が成すべきことは、デイメイションの勝利を祈り、願う。そして信じることだ。

《リスク……よしっ！》

「信じましょう！」

意気込んで両手を胸の前で合わせ、リョウスケは祈願し始める。俺も柄を握る両手に力を入れ、マダンに負けるなど、必死に心から彼に伝えた。ソルデファーもまた、強くデイメイションの勝利を願っていた。

そうするとだ。

不思議な事に、体に妙な違和感を覚えた。

熱い。何だこれは、力が……力が漲る。

次第に、この不思議な感覚が視界に現れた。俺の体から、赤いオーラが揺らめき、溢れ出てきた。いや、俺だけじゃない。ソルデフアーからも力の上昇が感じられる。

《凄いやリスク！ みんなの力がぐんぐん上がっていくにやあ！》
「ああ、みんな上がっていく。リヨウスケも——……リヨウスケ？」
な、何だあれは？

リヨウスケの姿が、若干変化していた。黒髪が真紅へと変わり、緩やかに輝きを放ち、背中からも蜃気楼のようで、また朧気のある虹色の翼が生えていた。

翼は力強く真っ直ぐに、羽根を広げている。ぽつぽつと粒子がその付近で浮かび上がっては消えてを繰り返していた。粒子からは、魔力とも想われる、けれど魔力などよりも優しく、暖かい力を感じた。

「リヨ、リヨウスケ？」

そんな彼に俺は恐る恐る声を掛けるも、リヨウスケはただずっと黙止したまま瞑想するように瞳を閉じ、ずっと祈願の姿勢を保ち続ける。

いったい君は、何者なんだリヨウスケ。

『ぐあああつ！』

そう思うち、マダンの呻き声が響いた。慌てて俺は映像に視線を戻す。すると、マダンの顔を蹴り上げるデイメイシヨンの姿が目についた。

『よっしゃあああッ！ きたきたきたぜえ！』

真っ赤な輝きに身を包まれたデイメイシヨンが、痛快と言わんばかりに両拳を胸元でぶつけ合わせ、天を仰ぎ叫んだ。

『な、何故だあ！ デイメイシヨンの攻撃力が上がっただ！』

『へへっ！』

デイメイシヨンは不敵に笑い、蹴られた顔を押さえて困惑の色に染まるマダンを指差す。

『覚悟はいいかマダン？ みんなの思い、食らってもらっぜっ！』

ここからが反撃だと、意思表示を伝えたデイメイシヨン。何にせよ、リヨウスケのおかげでどうにかなりそうだ。

頑張ってくれ、デイメイシヨン！

チャプター9 『予想外の事態』

『はあああ——だあつ！』

紅蓮の輝きを身に纏うデイメーション。

空中で弧を描くように身を翻し、加速をつけてマダンの腹部へと突撃を開始する。右の鉄拳が奴の青い楯鱗じゅんりんを打ち砕き、内側の赤い皮膚にまで拳が突き刺さる。

『ぐふあつ！』

苦痛にマダンの呻き声が響いた。

『ぶつ飛べええ！ ゼロ距離ブリット・フィスト！』

この密着状態からデイメーションが轟くと、次の瞬間けたたましい爆音と共にマダンの体が、くの字の体勢で吹き飛んだ。

『ぐおおあああああつ！』

激痛の叫喚を上げながら、マダンの体が空高く打ち上がる。腹部からは燃え盛る炎が爆発的に噴き出しているが、それは多分、あの鉄のグローブから噴出されているのだろう。

そういえば、俺は未だにデイメーションという存在が具体的に何なのか解らないのだが、何故に手が外れるんだ？

《デウス・エクス・マーキナーってやつだからにや》

デウスエクスマキナ？

《その読みも間違いではないけど、まあ早い話しは機械の体の神様って思っておけば良いにや》

お前もデイメーション並みに説明がアバウトだな。まあ解りやすいではあるが。

『くそおつ！ なめるなあ！』

などと、そんなくだらないやり取りをしている場合じゃない。見れば、マダンが苦悶の表情ながらも怒り叫んでいた。そして体をのけぞるように反らし、ブリット・フィストから抜け出す。

ブリット・フィストの方は旋回してデイメイションへと戻り、拳の無い右手首を彼が差し出すと、金属音を立てて腕と繋がった。

マダンの方に目を遣ると、奴は上空に浮かび上がったまま、息を大きく吸い込んでいた。

何をするつもりだ？

《あれは多分、高威力の魔弾を口から出そうとしているにや》

マダンの動作の意図を語るソルデファアの口調には、緊張が纏っていた。だが、ソルデファアの言うとおりだとすれば、これが大地に直撃すれば――

《そうにや……、あのデイメイションがフルチャージのイオン・バーストで打ち消すのがやっとだった攻撃にや。全力でマダンが繰り出した場合は、この世界は一瞬で消滅するのは確実……》

「そんな……どうにか出来ないのか。このまま撃ち出されたら――」
『大丈夫です』

俺の不安が大きく膨らむ中、不意に祈願を捧げる姿勢のリヨウスケが、閉じていた瞳をゆっくりと開き、穏やかな声で語り出した。

『信じて下さい。デイメイションさんを……彼が、全てを護りますから――絶対に』

「リヨウスケ……」

そのリヨウスケの声には、彼への絶対的な信頼が感じられる。何故だろう、彼の言葉を聞いていると、俺もデイメイションを心から信じられる気がしてきた。

《リスク！》

そんな彼を見ていた俺だが、ソルデファアの声でハッと我に返り、俺はデイメイションの方はどうなっているのかと視点を戻す。するとやはり不敵な笑顔を見せるデイメイションが映るが、彼は力むように身を縮ませていた。赤い光が彼に集まるように見えることから、何やらエネルギーを溜めているように見られるが、いったい……。

《質量が徐々に膨れ上がっているから、リスクの言うとおり力を集めてるようだね。急速にマダンの魔力を追い上げようとしてるにや》

俺の疑問にソルデファアが答えてくれた。つまりデイメイションもマダン同様に収束した一撃で対抗するつもりと言う訳か……ハッ——マズイ！

空中を見上げてみれば、既にマダンは先手の一撃を放つ体勢に入っていた。それを眼にした俺は声を上げたが、既に手遅れで——
『死ねえ！』

無情にも青白い閃光が、全てを滅する絶望の光が放たれてしまった。大きく開かれた口から放出され、勢いよく大地に向かってくる。

「ば、万事休すか！」

『へへ、チャージ完了だぜ！』

焦りに叫ぶ俺の声を合図とするかのように、デイメイションは高らかに声を上げて天から迫り来る青白い閃光を捉え、不敵な笑みを浮かべた。そしてジャケットを開き、いつものあの一撃——イオン・バーストを、放つ気か？

『いつけええええ！ カオシック・ブラスター！』

《んにゃ！》

「えっ！」

イオン・バーストじゃない？

驚愕する俺達を後目に、胸部から放たれた紫色の閃光ことカオシック・ブラスターが、邪悪な光を飲み込んで、マダンへと突き進む。
『な、なにiiiiiiii！ ぐあああああつ！』

紫の稲妻を帯びた閃光はそのままマダンの腹部へと直撃し、その巨大な体を空の彼方へと突き上げた。

『ば、バカな！ この技は、タ……オン様と同じ！』

何だ。今、マダンの奴が、何かとんでもない事を叫んでいなかったか？

咄嗟の事だった為に、上手く聞き取れなかった。

『よっしゃあ！ こいつでト・ド・メ・だ・ぜ！』

そんな中、デイメイションが力を溜める姿勢で紅い光を勢いよく噴き出す……ように見せたかと思えば、今度は深く屈み、上空へと

弾けるように飛び上がる。そして、体から出ている真紅の光が、球体状となりデイメイションを包み、加速していく。

「まさか……」

《マダンに体当たりする気なのかにゃ？》

俺もソルデファールと考えは一緒だった。けれども予想とは大きく違う行動をデイメイションは見せた。

押し出され、もはや全ての大地を見渡せる高度にまで達したマダンに、デイメイションは赤い閃光に身を包み、そのまま上昇して間合いを詰めて行き。逆さまに体を返すと、蹴りの姿勢のまま力オシツク・ブラスターの光の中へ加わり、マダンの腹部に追撃を与えた。『ウオオオツ！ デイメンション・クラアアツシュ！』
力強い轟きを載せて蹴りを放ったデイメイションは、マダンの腹を一気に貫いた。

『う、嘘だ！ こ、この最強の器が！ リヴァイアサンが——負けるなんてエエエエエ！』

驚愕に顔を歪めるマダン。ぽっかりと腹部の空洞に、赤い粒子が集まる。

『アギヤアアアアアア！』

そして体を大の字に広げ、マダンは断末魔の悲鳴と共に爆砕した。凄まじい発光が溢れかえり、夜空を赤色に染め上げる。

『はっはあ！ 決まったぜ！』

大地に背中を向けてダイブしているデイメイションは、してやったりの笑顔で爆発を見やり、ガッツポーズを取った。

「おおっ！」

《やったにゃあ！》

その様子につられて、俺も同じように拳を前に握りしめていた。

まさに勝利の瞬間だと、実感して――

しばらくして、デイメイシヨンは落下しながら空を切り裂く素振りを行い、切り開いた次元の狭間へと入り込む。

俺達のいる城の屋上で次元の狭間が生じると、そこからデイメイシヨンが飛び出し、空中で回転を決めて俺達の手前に着地。そして満面の笑みを浮かべ、親指を立ててこう言った。

「勝ったぜ。みんなのおかげでな！」

俺も彼の笑顔につられて綻んだ。しかしそれと同時に、リヨウスケの容態の事を思い出した。

「デイメイシヨン。リヨウスケなんだが」

「え？　僕がどうかしました？」

俺がデイメイシヨンに彼の変化を伝えようと本人へと目を移したのだが、知らぬ間に彼は元の姿に戻っていた。何事も無かったかのように首を傾げている。

「リヨ……リヨウスケ？　いつたい、いつ元に？」

「え？　あの……元って？」

《お、覚えてないのかにや！》

「はあ……何故だか途中から記憶がなくなつて」

「おいおい良ちゃん！　俺の逆転劇を観てなかったかい？」

頷いたリヨウスケに、デイメイシヨンはやれやれとかぶりを振るのだが、それよりも――

「デイメイシヨン、気付いてなかったのか？」

「んあ、何が？」

「いや、リヨウスケの変化に――ッ！」

な、なんだ！

今、体に何かが入るような感覚が――！

「どしたんだリスク？　良ちゃんが何だつて？」

不気味な違和感から戸惑う俺に、デイメイシヨンが話の続きを聞くとうと耳を傾けた。

マズい。駄目だデイメイシヨン――来ちゃダメだ！

「死ねっ！」

自分の意志とは裏腹に、俺は何故かそう口走り、デイメイシヨンの脳天を目掛けてソルデファーを振り下ろしてしまった。

「うおっ！ あぶねっ！」

咄嗟に拳で受け止めたデイメイシヨン。押し上げるように刀身を弾き出し、後ろへと跳び退る。

良かった。どうにか防いでくれた。

「ど、どうしたんですかリスクさん！」

違う！ 俺は何もしてない。体が勝手に！

困惑するリヨウスケに訴えた俺だったが、声は出なかった。

これはいつたい。どうなっているんだ？

自分でも訳が解らない。心中まごつく俺の不可解を知ってか、ソルデファーが叫んだ。

《リヨ、リヨウスケ！ リスクは、マダンに取り憑かれてるにやあ！》

「えっ！」

な、なんだって！

そうか、だから体を動かせないのか。次元の悪魔は、あらゆるモノに取り憑いて意のままに操れる。俺自身も例外ではないんだ。

「くくく、流石は魔剣ですか。持ち主の心を感じ、読み取れるだけあり、すぐに原因も解ったようですね」

《く、でもマダン！ お前にボクを使わせるつもりはないよ！ ボクの主はリスクだにや！》

「残念ですが、言うことを聞いてもらいますよ。私の力で無理やりにもあなたの力を解きます」

そう口にするや、俺の体から青色のオーラが溢れ出し、それがソルデファーに流し込まれていく。

《あうっ、うわああああ！》

ソルデファー！ 止める！ 止めるんだマダン！

「ククク、止めると言われて止める奴っていると思います？」

抵抗など無意味とばかりに、ソルデファアの全身に電撃が通り、共に悲鳴が響いた。それが愉快とばかりに、刀身に映る俺ことマダンの顔は凶悪な嘲笑を浮かべていた。それでも俺は何度も呼び掛け、止めると叫んだ。ソルデファアに対する懸念も込めて——届くはずも無いのに。

《う、うああ……い、意識が……ごめん……リスク！》

最後に弱々しい声を絞り出し、ソルデファアの意識は事切れてしまった。そしてこの瞬間と同時に、刀身が青白い光を妖しく放つ。

「ふははは！ これで、リスクとソルデファアは私の操り人形と武器になりました」

ソルデファアを右肩に乗せ、俺は——いや、マダンがデイメイションに囁いた。

「ふふふ、デイメイション。あなたには本当にイライラさせられましたよ。私の器だけじゃなく、タキオン様へのプレゼントのリヴァイアサンまで消滅させたんですからねえ」

刀身をデイメイションに指すように向け、余裕の籠もった口調で語るマダンだが、その言葉の奥には、口で言う以上のどす黒い憎しみの怒りが含まれていた。

俺はマダンに乗っ取られている為か、感情をハッキリ感じる事が出来た。こいつは今までの戦いから、自棄になるのを通り越して吹っ切れている。だからこういう手に出たのだ。しかしだからこそ恐ろしくある。他者の心を煽ったり人質など当たり前、悪魔当然の所業に、躊躇いなど何一つ無い。

現に俺を操ることでデイメイションは迂闊に手出し出来ないでいる。マダンは怒りに身を任せて暴れるよりも、逆に冷静になる方が具体的且つ効率性ある手を選ぶ可能性が増え、厄介なのかもしれない。

俺は次元の悪魔の危険性に、改めて畏怖を胸中に抱いた。

「さてと、では第三ラウンド。いえ、ファイナルラウンドといきま
すか——そらっ！」

そう切り出したマダンは、すぐさま波動斬をデイメイション目掛けて繰り出した。次元の悪魔の力にソルデファアの力がミックスされたのが起因か、俺が放ったとは思えない大きさと威力を兼ね備えた青白い波動斬が生まれた。

当たったら危険だ。かわしてくれデイメイション！

「うおっと！」

俺の願いが通じたのか。デイメイションはリヨウスケの背中を片手で掴み上げて波動斬を飛び越える。しかし、マダンも跳躍して空中にいるデイメイションへと接近して、斬撃の嵐を繰り出した。

「ちっ！ やべえな！」

「ふははは！」

片方の腕はリヨウスケを持ち上げているため、デイメイションは空いている左手でマダンの斬撃を受ける。そして一撃一撃を拳で巧みに受け流す——が、この状況は永く続かず。僅かに隙が生じ、それを逃さず畳み掛けてきたマダンの蹴りを食らってしまった。

リヨウスケを守るように抱き締め、背中で蹴りを受けたデイメイションは、高速で地面に叩き付けられてしまうが——その際にもデイメイションは、リヨウスケを衝撃から守るため、自ら背を向けて地に激突することで、彼を救うクッションの代わりを担う。

「デイ、デイメイションさん！」

「いてて、へへへ。心配すんな良ちゃん。俺は誰よりも頑丈さ」

瓦礫を退かして立ち上がるデイメイション。

「しかし、こいつぁ厄介だぜ」

後頭部をさすりながら俺を、マダンを身構えて見据える。そんな彼に避難してると手振りで下がるように促され、懸念の色に染めつつも、リヨウスケは指示通り小走りでデイメイションから離れた。

見下ろしている俺にとって、それが心をキツく締め付ける。操られてしまっているとはいえ、仲間を傷つけてしまった自責の念が、心を覆い尽くしてしまいそうだ。

「へへ、気にするなよリスク。寧ろお前がマダンに操られるって可能性を見落としていた、俺の方が悪いんだからよ」

デイメイション……。

「ふふふ、まだまだいきますよデイメイション！」

それでも、俺の想いとは裏腹に、マダンは容赦なく斬りつけてくる。デイメイションは反撃は一切行わず、ただただ斬撃をかわし続ける。

「ふははは！ やっぱり、仲間を相手だと攻撃出来ませんか？ 言っておきますが、リヴァイアサン同様に、私を攻撃したらリスクの体は傷つき死にますよ。何せ、雑魚の次元の悪魔とは違い。深くリnkしてますからねえ。私のような上級悪魔は」

そう一旦打ち切るとマダンは再度嘲笑う。

く、くそっ！ 何て汚いやつだ。デイメイションにそんな事が出来るわけ——

「アアアアアアッ！」

「……へっ？」

「おオオあたあッ！」

「ぶへあ！」

アレエエエッ！ 殴った！ しかも遠慮なく顔面を！

マダンは情けない声を出し、俺の体は地面を転がった。

「オイイ！ あんた何してんのオオオ！」

愕然と叫ぶリョウスケ。そんな彼をチラリと一瞥した後、胸に殴った左拳を当て、デイメイションは瞳を閉じて呟いた。何故か雲が動き出し、月の光がデイメイションだけを照らすように傾いている。「リスクが心の中で言ってたんだ。『俺の事は構わずやれ！』とな」
言ってない！ 言ってないぞデイメイション！

「嘘つけえ！ てゆうか、少しは躊躇しろよ！ 何あの殴るときの雄叫びと顔付きは！ 完全に劇画タッチだったじゃないか！ 北〇〇拳を叩き込む気マンマンだっただろ！」

「いやあ、本当さ」

「何その済ましたような自信！ どっからくんの？ ねえ、どっからくんの！」

怒り叫んだリョウスケに対し、デイメイションはどこか遠目で語る。

多分、いや俺はきつと口にしていたかもしれないよ。けれど、言う前に殴るかな普通……。殴らないよね？

絶対ワザとノリで殴っただろ？

「あ、バレた？」

やっぱりノリなのか！

「いやいや、実はちよつとマダンの攻撃と言葉にムカツときちゃつてよ。ぶつころな気分になったんだよ。まあ、お返しな」

もっと質が悪いじゃないか！

「ぶつころ」ってなんだ！ 「ぶつころす」って意味なのか？ そうなのか！

うつ伏せの状態から俺は、笑顔で頷くデイメイションを見やり、呆れから思わず溜め息づいてしまった。もちろんそれ心の中でだが……しかし、相変わらず軽い態度を見せていたデイメイションだが――

「まあ、冗談もここまでだけだな……」

何故かそう呟くと、先程のが嘘みたく表情に陰しさが表れた。この時、俺は思いもなかった。

まさか、デイメイションがあんな行動をとるとは――

チャプター10『そして神話となった』

俺としては正直、デイメイションには幻滅したぞ。まさか本当に殴るとは思ってなかったんだから、裏切られた気分だ。

「ははは。ま、細かいことは気にすんなよ」

俺の事だから気にするに決まってるだろ！

俺が心で異議を訴える中、うつ伏せだったマダンは起き上がる。唇から滴り落ちる鮮血を拭くと、忌々しげにデイメイションを鋭く睨んだ。

「ちい……。まさか、本当に殴るとは思いませんでした——ふふ。やはり、リスクを死なせたくないみたいですねえ。あまり力が入ってませんでしたよ」

そ、そうなのかデイメイション？

俺がデイメイションに問いかけると、彼は笑顔だが、少し懸念を含んだ様子でこちらを見ていた。どうやら俺は誤解していたようだ。考えてみればそうだ。デイメイションが本気で殴れば俺の上半身は——（R18規制です。ピー）——して、グロテスクな肉の塊になっていただろう。ふざけてはいたが、内心は躊躇いがあつたのか——

「ま、リスクは友達だからな。死なせるつもりはねえさ」

頬を掻きながら言うデイメイションを見やり、マダンは不思議そうに眉を顰めたが、すぐに悪意のある笑みを浮かべて訊ねた。

「ほう、それじゃあリスクを攻撃しないと言う訳ですか？」

「ああ、ここからはもう反撃はしねえよ」

デイメイションは澄まし顔で両手を軽く上げて、約束をするように告げる。

「ふふふ、そうですか。なら、死ね！」

それならばとばかりに、マダンはソルデファアを握る手に力を込めて踏み出す、一気にデイメイションにまで間合いを詰めて、剣で薙ぎ払う。

キレのある鋭い攻撃だが、速さからして、彼ならば避けるのは容易いはず。

だが――

「ぐうつ！」

あろうことが、デイメイシヨンは避けなかった。

咄嗟に拳で防御し、斬られはしなかったものの。マダンがそのまま力任せに降るった一撃に圧され、吹き飛ばされたデイメイシヨンは壁に打ち付けられてしまった。

「デイメイシヨンさん！」

「おっと、良ちゃん。巻き添え食らうから来ちゃダメだぜ」

駆け寄ろうとするリヨウスケを、デイメイシヨンは手のひらを向けて制止させた。マダンは容赦なく壁にもたれ掛かったデイメイシヨンに突進して、追い打ちの斬撃を繰り出す。

避ける事が出来ないのか、或いはそうしないのか、デイメイシヨンはマダンの猛攻から逃げず、ただ受け続けた。その都度、後方の壁に彼が背中からめり込み、亀裂が広がって行く。

「ふふふ、どうやら本当に反撃はしないようですね。まあ、変な行動を起こせば、私はリスクの体で自害しますがね！」

そしてマダンの袈裟斬りが、デイメイシヨンの腹部に当たった。

壁が崩壊し、デイメイシヨンは王宮への廊下にまで、そのまま吹き飛ばされてしまう。

「ふふははは！ リスクを死なせたくないなら、そのまま切り刻まれて死ぬ事です！」

追撃を止めず、マダンは突進を繰り返す。これまで両の拳で巧みにガードし続けていたデイメイシヨンだが……あの腹部の一撃から、徐々にマダンの斬撃を食らい始めている。赤いロングジャケットや黒いズボンに少しずつ切り傷が刻まれていく。

「そらっ！」

太刀筋に気を取られた為か、マダンの不意に繰り出した蹴りが脇腹に直撃した。

「ぐっ！」

蹴り飛ばされたデイメイシヨンは、脇腹を押さえながらも地面を滑るように踏みとどまるも膝を突いてしまった。しかし情緒なく奴は攻め立てて来る。頭上から襲い掛かる刃を、デイメイシヨンは白刃取りで受け止めた。

それでもマダンはそのままソルデファーを握る柄に容赦なく力を入れ、体重を加える。必死に受け止めるデイメイシヨンの表情からは、いつもの不敵な笑みが忽然と消え失せ、険しくなっている。

このままだと危険だ。そう思い、俺は今度こそ伝えた。

俺の事はいいから、マダンを倒してほしいと。

自分のせいでデイメイシヨンが傷付くのは嫌だと――俺は、心の中から叫んだ。

するとデイメイシヨンはニヤリと笑み浮かべて、口にした。

「悪いが、そいつは聞けねえな」

先程の苦悶が嘘と思われる笑みを見せた彼は、形勢を逆転する勢いでソルデファーを押し返す。膝を付いていた状態から立ち上がり、マダンへ顔を近付けた。

「ここで俺がお前ごとマダンを倒しても、そいつはマダンに勝ったことにはならねえ……。それはな、リスク。お前がマダンに完敗したことを意味するんだ！」

いつになく真剣な眼差しで、デイメイシヨンは語り掛けた。そして白刃取りの状態を、刀身を横に振り払ってから抜け出し、一歩だけ後退ると静かに口を開いた。

「それでいいのかりスク？ お前は、この世界を守る剣になるって志していたはずだろ。自分の命すらも守る事が出来ずに、最後までマダンにやられっぱなしでいいのか？」

デイメイシヨン……。

彼の紫に輝く瞳は、真っ直ぐ俺を見据えていた。マダンではなく、

内にいる俺自身を。退くことを知らない自信と、純粹な優しさを宿した眼だった。

負けるんじゃない、諦めるな！

そんな言葉が打ち付けるように伝わってくる。

瞬きすら許さない鋭い眼光が、俺の心を強く揺さぶる。熱く沸き立たせてくれた。そう、彼の言う通りだ。ここでマダンと死んでも、結局は最後までマダンに弄ばれた事になる。俺にとって完全な敗北を意味するんだ。

「ふふふ、無駄ですよデイメイション。リスクには足掻くことすら出来ませんよ」

嘲笑するマダンは剣を構え、デイメイションに突進する。その胸を剣で突き刺そうと、刀身を前に突き出して――

「死ね！」

狂的な声を発した。

デイメイションは、避ける素振りを全く見せようとしない。ずっと俺を瞳に映し出し、見据えている。

避けられないわけじゃない。信じているんだ。彼は俺を……このままだと、刀身が彼を貫く。彼を殺してしまう――

ダメだ！

させない。これ以上、これ以上マダンの――コイツの好きにはさせない！

俺は気力を振り絞って、マダンの制御を抜け出し、全力でその突進を抑え込んだ。そのおかげか、刀身はデイメイションの胸の手前で止まった。

「な、か、体が！」

デイメイションは何度も助けてくれた。俺の可能性を信じてくれた。恩を返さず、その信じる心に応えずにしてどうする！

今こそ、全てにケリを着ける時なんだ！

「へへっ、そうだぜリスク。マダンなんて、お前の中から追い出しちまいな！」

負けるか……負けてたまるかあああつ！

「俺の……俺の中から、出ていけエエエツ！ マダァンツ！」

俺は驚愕するマダンに言い放ち、ぎこちなくだが後ろへと振り返り、渾身の勢いで波動斬を繰り出した。

『アアアアアアッ！』

青白いガスのようなものが、波動斬と共に俺の体から出て行く。多分、悲鳴からして、あれがマダンの本体だろう。

マダンの本体は波動斬と交わるように飛んで行き、王宮廊下の真つ白な壁に直撃する。壁は爆発を起こし、瓦礫を散らしつつ崩れ落ちた。ポツポツと灯が照らす、城下町の景色が見える。

「や、やった……」

息を荒げながらも、俺は呟き、デイメイション達を見やった。

「リスクさん！」

リヨウスケが喜びに溢れた様子で、俺に駆け寄る。

「はっははは。やっぱりお前はカッコイイぜリスク」

その後ろでは、デイメイションがウインクしながら、俺に拳を向け親指を立てていた。良く頑張ったなど、言葉を聞かずともその想いはしっかり伝わる。気が付けば、俺も同じサインを見せて、笑顔で応えていた。

心の中が、健やかに澄み切るのが解る。ああ、とても良い気持ち

だ。信じている者に応える、共に成し遂げてみせること。この達成感と喜びは、仲間との間でならば何倍にも膨れ上がるものだ。

俺はそれを忘れていた。信じているようなつもりでいただけだった。

俺はハノ達をあの時、転送させて逃がした時から、お互いを信じることを、共に成し遂げることを忘れていたんだ。嫌、逃げていたんだ。ハノ達は俺を信じてくれていたのに、俺はみんなの力を信じてなかった。

それだけじゃない。世界の剣になるだの志を口にしていたくせに、デイメイションに結局頼つてばかりで、すがっていた。そしてマダンに取り憑かれていた時も、俺はデイメイションに任せ、逃げていた。

『それでいいのかリスク？ お前は、この世界を守る剣になるって志していたはずだろ』

デイメイションは俺を、頑張れと励ましていたんじゃない。これに一番気付いてほしくて、あんなことを言ったのかもしれない。自分の弱さを、彼に気付かされた。

リヨウスケにもだ。ハノと同じく、俺を信じて、自分の出来ることを、精一杯の働きを見せた。そしてデイメイションとの信頼を見せてくれた。互いに信じ合うことで生み出される奇跡を、本当の強さを俺は知ることができた。

二人には、本当に大切なものを教えてもらった。

《り、リスク！》

「ソルデファー！ お前も戻ったのか？」

《うん、リスクがマダンを追い出してくれたから》

そうか、それは良かった。

俺は安堵の息を漏らしてソルデファーに微笑んだ。それと同時に、マダンに乗せた波動斬で破壊した壁から、青白いガスこと、マダン

の本体が浮かび上がる。まだ、生きていたのか……。

『ば、馬鹿な……有り得ない！ 次元の悪魔に取り憑かれたモノが、無理やり追い出すなんて……』

「へへ。解らねえかなマダン？」

澄ました表情でデイメイションが俺達の前に立ち、ガス状のマダンをビシツと指差す。

「本当に強え意志こころざしを持つやつは、神や悪魔ですら操ることは不可能なんだぜ！」

してやつたりな笑みを浮かべてデイメイションが言い張ると、マダンは悔しそうな唸りをあげて少し高度を上げる。

『……悔しいですが、ここは退くとしましよう。ですがデイメイション。あなたは以降から確実にタキオン様のターゲットになるでしょう。覚悟なさい』

そして、マダンの隣りに次元の狭間が現れる。多分、そこから逃げるつもりなのだろう。

「へへっ、なら、こつちも言わせてもらうぜ！」

デイメイションは格好付けるようにマダんに拳を向けると、キザな笑みを浮かべてこう返した。

「タキオンに伝えな！ “貸した金を返せ！” ってな！」

「イヤイヤイヤイヤ！ ちょっと、それ違うでしょ！ 普通は“俺は負けない！”とか“おととい来な！”とか、そんな台詞でしょうが！ もう台無しだよ！ てゆーか、敵に金貸すなっ！」

『ふふふ、良いでしょう。その言葉、タキオン様に伝えましょう』

「伝えるなよっ！ 明らかに嘘って解るだろ！ ああもう、次元の神も悪魔も馬鹿ばっかだああっ！」

《リヨ、リヨウスケ。落ち着くにやあ》

所々に頭を抱え込んで喚き散らすリヨウスケを、ソルデファアが宥めた。流石に疲れたのか、リヨウスケはゼエゼエと息を切らす。そんなみんなのやり取りを見ていた俺は、ただ啞然とするだけだった。

『ふふふ、では、去る前に一言……』

ゆったりとした動きで次元の狭間に潜り込んで行く中、最後にマダンは発した。

『覚えてなさい!』

《お決まりの捨て台詞だにや!》

「言わなくてもいいでしょうが……」

もう疲れたと言わんばかりに、リョウスケが溜め息混じりに呟く頃には、マダンは次元の狭間の奥へと入り込む。狭間は次第に狭くなり、完全に閉じると消滅した。

「へっへへ。勝ったな」

僅かな沈黙の後で、デイメイションが嬉しそうに呟いた。

「ああ、マダンには逃げられてしまったが……」

マダンがまだ存在すると言う事は、再度この世界を攻めて来るに違いない。そんな不安が胸中に深く食い込んで、素直には喜べなかった。

「安心しなリスク。またマダンがこの世界に現れる事はねえさ」

「えっ?」

俺の肩に手を置いて、デイメイションは言った。

「その前に俺が、必ず倒すからよ」

そう口にする、デイメイションは親指で自分を指して、穏やかな笑みを見せた。

何故だろう。相変わらず根拠も無いはずの言葉だが、彼の自信に満ち溢れた瞳を見ていると、不思議と心の不安が取り払われ安心できる。そして彼を信じてみたいと思う——そんな気持ちになるんだ。

「デイメイション……判った。俺はお前を信じるよ」

自然と口元が綻んだ俺は、デイメイションに握手を求めて手を差し出す。

「ああ、任せな!」

「仮に現れたとしても、俺達でもやれるよう頑張ってみせる。みんなで力を合わせて、追い出してみせるよ」

「へへ、だとすると、俺の出番は尚更なさそうだな」

ふふ、必ず俺達が勝利するって信じているんだな。やはり君は、最高の神様だ。デイメイション。

そして、鼻の下を擦りながら笑顔を絶やさず、デイメイションは握手を交わしてくれた。握りしめたその大きな手は、全てを包み込むような暖かさを宿していた。

「よし！ そんなじゃあ行くか良ちゃん」

握手を解いて、デイメイションはリヨウスケへと振り返り明るく言う。右手を上へと翳し、マダンと同じく空間に次元の狭間を開く。

「ええ、行きましょう。マダンを追い掛けに」

頷いたリヨウスケはデイメイションの隣に駆け寄ってから、こちらを振り向く。

「リスクさん。いろいろ助けてくれてありがとうございました」

優しく微笑み、御辞儀をした。相変わらず慇懃な振る舞いだ。これは俺も見習わないといけないな。

「リヨウスケ。それはお互い様だ。それに君とデイメイションのおかげで、俺はいろいろと大切な事を学んだよ」

「え？」

そう、例えどんな状況でも、友を信じること。そして、一人の力ではなく、みんなの力を合わせることが、本当に大事だと言うことをね。

ハノを始めとする仲間達に、ちゃんと謝らねばいけない……。それ以外にも、まだまだ沢山ある。俺はこれからも、この学んだことを生かすでしょう。

そんな思いを心に抱き、俺は狭間へと入って行く彼らに手を振っ

た。

「本当にありがとうリョウスケ、デイメイション……また、いつかこの世界に来てくれ。その時は、みんなで君らを歓迎するよ」

《また会おうにゃ》

「はい。また会いましょうリスクさん達！」

「へっへへ。今度来た時は、お前が興味津々だった、ロボットダンスを教えてやるぜ」

覚えていてくれたのか？

「デイメイションさん。リスクさんに変な事を教えない！ リスクさんのイメージを考えてよ」

「はははっ。んじゃあなあ！」

リョウスケは溜め息混じりでデイメイションを見やり、やれやれと頭を振るうと、こちらを向いて明るい笑顔で手を振った。

同じくデイメイションも手を振る。その間に、次元の狭間は次第に閉じて行き、完全に塞がると、狭間は消え去った。

《行っちゃったね》

「ああ、そうだな」

城外へ出た俺は、海の方角を眺め、口元に笑みを残したまま呟いた。

水平線からは日が上り始めていた。僅かに出てきた朝日が、燃え上がる炎のように、空と海を真紅の色へと輝かせる。

俺は息を呑んだ。不思議な程にこの光景が、清々しくて。

マダンを追い払った後だからか、まるで、やっと訪れた世界の平和を、太陽が祝福してくれているように思えたのだ。彼の、デイメイションの着ていた上着も、この真っ赤な太陽と同じ色をしていた。

太陽……彼らはまさに、この希望の光そのものだ。

ありがとう……。

改めて、俺は心の中で世界を救った彼らに礼を言った。感謝の気持ち、自然と涙にもなつて溢れ出てきた。

情けないくらい、ボロボロ泣いた。たった二日程度だったのに、何十年も共に歩んだ友達と別れるような哀しい感覚が、胸の中で溢れている……違う、『ような』ではないんだ。

『俺達は今、友達だもんな！』

そうだ、二日程度でも、何十年分もの絆を結んだ――

「俺の、大事な友達なんだ」

《リスク……》

「……行こう。ハノに、みんなに会いに」

《そうだね、行こうリスク》

溢れ出る涙を無造作に腕で拭い、ソルデファアを肩に乗せて、俺は城を後にした。

それから帝国に残っている子供達を連れ、俺達が入った時の門に着いたその時だ。

「リスク様！」

聞き覚えのある声に俺は驚いた。俺の目の前に、ハノが仲間達と共にいるではないか。彼女は俺に駆け寄ると、勢いに身を任せ俺の胸に飛び込んできた。

「ああ、よくぞ御無事で……リスク様……」

彼女の赤く染まりつつある頬から、熱い涙腺が流れ落ちる。

「心配を掛けた……すまないハノ」

胸元から彼女を離し、その肩に手を乗せて、俺は想いを込めて謝った。すると彼女は首を横に振り、嬉し涙ながらも笑顔を見せてくれた。

「いいえ……あなたが御無事なら」

そして、彼女は俺の首に両腕を絡ませ、もう一度体を抱き寄せた。

俺も彼女を受け入れ、無言で彼女を優しく包み込んだ。

もう、二度と突き放したりはしない、逃げたりはしない——そう、心に刻んで。

「リスク様。マダンは……マダンは何でしたのですか？ あの海から現れた怪物は？」

そうか、あれだけデカイ怪物なんだ。みんな見ていたのだな。

「ああ……話すよ。俺が見た、全てをね」

伝えよう。みんなに……世界を救った。虹色の翼を持つ天使と、次元の神のことを。

そして、彼らは後に、この世界の神話となった——

次元の神と、虹色の翼を持つ天使が。世界を救った英雄として、いつまでも語り継がれた——

第一章 完

第一章エピローグ『本物のマダン』

> i 1 2 4 4 4 — 2 9 1 <

「へえ、倒しちゃいましたか」

玉座の間。その入り口側の破壊された壁際に佇む私は、彼ら、デ
イメージョンと山田良助の姿を眺めていました。どうやら、これか
ら偽物の私を追いかける御様子で。

リスクは彼らを見送った後、どこか嬉しさと虚しさを纏わせた表
情を俯け、廊下へと出て行かれる。気配を消しているとはいえ、彼
と入り口前ですれ違っても、まったく気付かれませんでしたね。

ずっと顔を俯けたまま王宮廊下から下へ続く階段を降りて行く様
から、どうやら警戒は既に解かれた模様。いや、警戒心どころか、
複雑な感情で心の中がいつぱいなのでしょう。だから周りに目が行
かないのだと思われますね。

彼の心境に、私がどうこう接するのは御節介であり、また筋違い。
逆に彼を余計な混乱へといざなうかもしれません。そういう訳です
ので、接触は控えましょう。

さて、彼、リスクが去ってから玉座の間を見渡してみた私ですが、
これまた随分と荒れてらっしゃる。あらら、玉座まで粉々です。昔
は私がのんびりと腰掛けて本を読み漁っていましたが、見る影も在
りませんね。

次に私の目に止まったのは、マダン。魔王マダンと呼ばれていた
者の亡骸。

「ほほう……」

思えば、食い入るように私は彼女の亡骸を調べていました。興味
が尽きませんからねえ、自分と瓜二つの体。これは隅々まで探らね
ば。

ふむ、幾つか違いがありますね、コレ。前髪のメッシュ、瞳のカラーリングが青い。本物である私との見分けをつける為の印ですね？

とはいえ、なかなかの出来映えで。身長からスリーサイズ、もしかしたら臓器のサイズまでもが、私と同じなのかもしれませんね。ただ、やはり模造品です。どうやっても本物である私には劣る。肉体に使われている素材は不明ですが、シラビト族の強靱な肉体と比較するまでもない、実に脆弱な物。

「まったく……くだらない」

タキオンは、次元の悪魔でもない私に惚れ込んで、愛人、右腕になれと声を掛けて来ました。

ですが、流石に無理というものです。

彼は、我々タイラント・スパイダーが所有する怪物計画の一部書類プロジェクトテラの存在確認、奪取を目的として我々を引き入れようとした。彼の性格上、私達を仲間にして戦力に加える気もあつたのでしたが、傍若無人かつ、傲岸不遜。慇懃無礼も度が過ぎるというものです。

何よりも我々は、この怪物計画を完全に無へ葬るため動いている。協力ならまだしも、私利私欲が目的と判ってながらイエスと頷く程、馬鹿ではありませんよ。

この偽物は、そんな申し出を断った私に対する嫌がらせか、または本気で私に惚れ込んでいたか、そのどちらか。

多分、後者でしょうね。そういうお方ですから、彼は。

手に入れられないのなら、造ってしまおうと愚考を案じたのでしよう。欲しいモノは何が何でも、手段を問わず選ばす手に入れる。それが彼の信条ですからね。

「こんな物を造ってしまう程、あなたは私を引き入れたかったのですかね？」

滑稽——そんな思いから溢れ出た言葉が、この部屋で虚しく木霊

する。着信音が鳴り出したのは、ちょうどこの時でした。まるでタ
イミングを狙っていたみたいですね。

ふふ、笑いが込み上げちゃうじゃないですか。

手のひらに収まるサイズの通話器機を、私は腰のベルトに下げた
ポーチ——黒いハートのデザインをしたものです。カワイイでしょ
？——から取り出し、軽く口付けを交わしてからペアを押してあげ
る。私に繋がれと試みているであろう、彼の為に。

「はあい」

「ボス、やつと繋がりましたね！」

声調は、やはり苛立ちと呆れが入り混じっておられる。ご立腹の
ようです。しばらく連絡を取るのを忘れてましたからねえ。

「お元気でしたか？」

「お元気でしたか？　じゃないですよ！　今までどこで何をやって
たんですか、ボス！」

ふふ、予想通りの反応、しかし彼の可愛らしいハスキーボイスは、
私の悪戯心をくすぐりますね。

「いろんな世界を旅してました。今はその一つに戻って来ています。
私の偽物が何やら荒らしていたみたいなので、ちよつとばかり灸を
据えにね」

「え、ボスの偽物って……タキオンの仕業ですか？」

ほう、流石は私の部下、勘がよろしいことで。おかげで今後の方
針がささつと決められそうです。

「ふふつ、私も罪な女です」

「……………」

あれ、返答返って来ない。スルーですか？　ねえ、スルーですか
？　ちよつと傷付きますよ、せめてツツコミくらい欲しいのですけ
ど。

はあ、まともな話しか応対する気ないと、沈黙で意思表示しちゃ
ってますね。仕方ありません。

「まあ、あなたが考えている通りですよ。一応、偽物はディメーシ

ヨンさんが退治してくれましたがね」

『デイメイション！ あ、あのいろんな異世界で噂を残しているアレですか？』

「ええ、初めて見ましたが、なかなかの強さでしたよ」

『へえ、ボスと戦ったら、どっちが勝ちます？』

「さあ、でもあなた方のトップに立つ身ですからね。負けるつもりはないですよ」

彼の安堵の笑い声が耳元で広がる。私の言葉から、本気の勝ち気と察したのでしよう。

デイメイション・ザ・カオシックは強い。ただ、やはりタキオン・ザ・カオシックと比較すれば、まだまだ力不足。タキオンと戦った私の勝手な評価ですが、これは間違っではないかと。ですがデイメイションを含め、興味深いものがありましたね。

山田良助——彼は実に不思議な力を持っている。デイメイションがピンチに陥った際に見せたあの力、あれはただ仲間の力を上昇させているのではなく、みんなの力を最大限に引き出し、その引き出した力をデイメイションへと送り、デイメイションもまたみんなへと更なるパワーを送る。力の消費が無い、無限の上昇サイクルを繰り返していた。

デイメイション自身の潜在能力も侮れませんが、その限界すらも突破させる支えに彼はいる。二人セットで無限大のパワーを発揮していた。

もし、彼がデイメイションと同じ“カオシックを継ぐ者”であるタキオンの手に陥ってしまえば……。

「危険ですね……」

『ボス？』

「ああ、いえ。何でもありませんよ」

『それよりもボス！ あのですね——』

「ふふ、あなたが何を伝えたいのかも判ります。幹部の皆さんが荒れてらっしゃるのでしょうか？」

『そうです！ 皆さんボスの不在に怒ってますよ。特にソリティアさんとターディオンさんが困ります。八つ当たりで僕の班の部下が殺されちゃったんですからね！ 今では体がサイボーグ化してますよ……』

「いいんじゃないですか？ あなたの部下は結局のところ、パワーアップしているのでしょうか？」

『良くありませんよ！ 何で僕の部隊が彼女達の八つ当たり役を担わないといけないんですか！』

「冗談ですよ。落ち着いてください」

『落ち着いていられないですよ、もう』

本当に困っておられるようですね。確かにこのまま放っておけば、何を仕出かすか分かりませんね。血の気の多いヒステリックなユリイさんとターディオンさんなら、お互いに殺し合いとかやり兼ねませんし、イーグレッドさんは珍事や些事でも高額報酬を要求して来そうだし、戦闘狂のウルライズさんに限っては殺し合いに混ざりそう。

そんなんだから彼、ユウト君を皆さんの纏め役に就かせたのですが、やはり一癖二癖のある面々を抑えるには、無理がありますか。しかし、私はまだ組織に帰る訳にはいきません。

山田良助とデイメイションに接触し、同行してみたい。彼らには謎が多い。本来の目的である怪物計画の行方を追いつつ、タキオンの魔の手から、山田良助の保護も行いたい。

それに彼は私好みですし、味見したいという動機もありますしねえ。まあ、そんな訳でやはり私はこのまま組織には帰還せず、彼らに付いていきますか——と、連絡先の彼に話すと、不本意な溜め息が混じるも、了解で応えてくれました。ふふ、何だかんだで女性の我が儘に弱いのですよね、彼。そんな可愛いところ、私は好きです。後で気持ち良くしてあげましょうか。

『いりませんよ』

「え、な、何のことです？」

『どうせ、変なお礼でも考えていたのでしょう？ 全裸で添い寝とか』

流石は私の部下、侮り難し。私の思考パターンを理解してらっしゃる。しかし、普通は喜んで了承しませんかね？

私ルックスだけじゃなく、テクにも自信あるんですけど……。

『知ってますかボス。ボスは組織内では“抱きたくない危ない美女ワースト1”なんですよ』

な、何ですってええええッ！

「じよ、冗談——」

『マジです』

ちょ、即答ッ！

ひ、酷い。酷すぎる。私は単にみんな好きだから軽いスキンシップのつもりで——（R18規制です。ピー）——やっていたのに。

『もう少し真面目に生きてくださいボス。そんなんだから（ズバッ！）やら（バキューンッ！）やら（ドンドコドン！）やらと変態三冠女王なんてレッテル貼られるんですよ』

シヨックの余りに膝を付いていた私に、更なる容赦ない追い撃ちッ！

『他にも——』

「止めて、もう止めて！ これ以上私の心を挟らないでええ！」

『ブラックハーツなんて二つ名を持つあなたがよく言いますね。まだまだ他にも——』

頭を抱え込んで悶えている私などいざ知れず。ブスブスを私の体に言葉の槍がッ！

アウッ！ 止めてッ！ そこ、よ、わいッ！ アッ！

『な、なんか変なことしてませんか？ ボス、なんだか息が荒くな

ってますよ」

「な、なってますんよ。と、とりあえず！」

そう、とりあえず、本題に戻すとしましよう。ああ、マズいマズい。しかしけっこう罵られるのも——（R18規制です。ピー）——機会があればやってみますか。

「気を取り直して指示を出しておきます。今からあなたには私の偽物の亡骸を送りますので、解析をお願いします。いろんな方面で役立つでしょうから。イーグレッドさんも同伴させてください。報酬は私が後ほど支払うと伝えておけば、了承するでしょう」

『了解ですボス。他にはありますか？　というか、あつてほしいのですが……』

「はいはい、勿論ありますよ。好戦的な彼らのストレスを発散する為のミッションがね」

『内容をお聞かせください』

「引き続き怪物計画を潰すことは優先されますが、追加ミッションです。次元の悪魔も見つけ次第、潰せ。これだけ言えば後は個々で行動してくれますよ」

『ほ、本当にそんなアバウトな命令でよろしいのですか？』

「ええ、皆さんも馬鹿ではありません。何よりもターディオンは客人であり、彼女の目的が次元の悪魔のボス、タキオンなのですからね」

暫くの沈黙が私と彼の間を支配するも、それは彼の了解の返事により破られた。

『皆さんにはボスの現状報告後、先程の指示を送ります。よろしいですね？』

「ええ、そうしてください」

『はい、では』

「ああ、それと」

『はい、他にも?』

「次元の神やら、他の組織との接触は控えてくださいね」

『ええ、判ってますよ。我々タイラント・スパードの存在は、可能な限り穏便に隠蔽する。でしたよね』

「その通り、ではよろしく」

通話器機をポーチに戻した私は、偽物の亡骸に手を翳し、次元転移を行う。次元干渉術は、通常の次元転移よりも極み掛かっており、いちいち切り裂くだの呪文を唱えるだの無駄な予備動作は不要。

感じるだけ、イメージするだけで、次元の扉は開き、道は繋がる。他者から見れば、パツと視界から消滅しているように見える瞬間移動。それが次元干渉術の次元転移。しかし、この技術の本領は、シラビト族の有能性はそこではなく……ん、この気配は。

あらら、来ちゃいましたか、そろそろ行動を開始しようと思っていたのに。

「見つけたぞ、マダン・ヴォルフィーユ！ まさか、ここにいたとはな」

背後から声。懐かしいのですが、強い敵意を感じますね。それにしても――

「もう、私を昔のように“姉さん”と呼んでくれないのですか?」

振り返ってみれば……ああ、いる。私の最愛の弟。憎悪を抱いた弟。シラビト族の生き残り――

「アル」

「僕を、アルと呼ぶのは止める……今の僕は――」

次元干渉術継承者アルビノ・ヴォルフィーユ。

彼は高らかに、誇らしげに名乗り、私を鋭く睨んだ。赤い瞳から発せられる眼光の輝き、それは燃え盛る炎を連想させる。

本当に綺麗な瞳です。同じシラビト族でありながら私の瞳は、彼とは対照的に濁っている。鏡を見る度、あなたと出逢う度に、自分が如何に卑下した存在なのかを思い知ります。お互い白く美しい肌と髪を、血色の瞳を持ち合わせておりながら、あなたは美しい。そして私は醜い。

ユウト君が私を墮落の化身のように蔑んでいましたが、本当のところ、自覚はあるんですね。でも、これが私。邪悪な魂を引き継ぎし魔女、マダン・ヴォルフィーユです。生まれた時から蔑まされて生き続けて来た。絶望を何度となく味わった。死にたいと思うことは沢山あった。ロクな生を歩めなかった。

それでも耐え忍んだ。自分を嫌いになれないから、私は在り続けた。

「お前を、今度こそ倒す」

「……そうしてください。私の最期は、あなたに殺されることなのでね」

「だったら大人しく殺されろ」

冷徹な口調に、躊躇いの無い気迫。本気の殺意がひしひしと伝わってきますね。彼は光の魂を受け継ぐ者、私を葬る為に生まれた。祝福された生を歩んできた者。

何度も羨ましいと思った。何度も憎いと思った。妬んでいた。けれど、それ以上に愛している。弟であるあなたは、私に唯一優しくったから。倒れ掛かった私を、背中を支えてくれた。

なのに私は、そんなあなたを裏切った。闇に堕ちてしまった。それは今でも後悔しています。

それでも私達はお互いに傷付けあう宿命にある——だということならば、私は彼の敵として立ちはだかることで、愛情を表現しようと決心した。いや、そうするしかなかった。

「いいえ、まだ機は熟してませんよ」

けれどいつかは訪れる。私が完全に闇に染まる時が、彼がそうやってしまった私を打ち倒す時が、必ず訪れる。そういう宿命の下に生まれたのだから、私達は――

「黙れ、殺す」

どうやら、空間の歪曲包囲網を張って、私と彼を包み込んでいるみたいですね。視界は歪みで広がっている。これでは彼を倒さねば、出られそうにありません。

歪曲に触れたらアウト。体は一瞬でジェル状になってしまうでしょう。そうなれば、例え死ななかったとしても無防備となり、結局は彼に殺される。空間の歪曲を直すことは可能ですが、そんな時間を与えてくれる程、甘くはないんですよえ。

さて、彼も構えてますし、私も真面目にやりますか。手加減して倒せるような相手ではありませんしね。我が弟ながら、強敵です。

「本気でやりますよ。アル」

ディメーションとの接触は、もう少し後になりそうですね。

頭上から次元転送、落ちてくるのは漆黒のグローブ。甲には砕け散ったハートが彫られしレリーフ。これは、私自身を象徴するもの。壊れ物、堕ちた心を意味する。

「眼に焼き付けなさい、アル！」

装着したグローブを君に翳すことで、このレリーフを記憶に刻ませましょう。

「これが私。マダン。マダン・ヴォルフイーユ。悪魔を上回る墮落の権化なり！」

始めましょう。淫乱に狂いし穢れの円舞曲をッ！

第二章プロローグ『いまさらなヒロイン』

色彩が無限に広がり、歪に渦巻く世界。次元空間。夜空の星のように煌めく数々の光は、存在する異世界への出入り口だ。

そんな空間を漂う集約した青白いガスの球体。それは偽物のマダンという器を無くした次元の悪魔。魂とも、思念体とも呼べる存在だった。

『まさか、この私がこんな醜態を曝すとは……。タキオン様になんと伝えようか』

次元の悪魔は切なく呟いた。それもそのはず、何せ器であつたあの体は、自分の主であるタキオンから授かつた肉体なのだから。

自分が崇拜するタキオンから貰い受け、大事に使つていた器。それがまさか、次元の悪魔として貢献に励む最中、デイメイションとかいう名前からして胡散臭げな次元の神によりあっさりと敗れ、更には器も破壊されてしまうとは、全くの予想外である。

挙げ句の果てに、タキオンへ献上する予定の品だつた最強とも呼べる器、リヴァイアサンを失い。加えてその異世界の住人の一人ではないリスクに取り憑くも、たかが気合いで追い出されてしまうという始末。

上級の次元の悪魔と成り立つた身でありながら、この上ない醜態を晒し続け、もはやプライドはスタスタに切り裂かれてしまった。

『くううう……それもこれも、すべてはデイメイションのせいです！』

すべて順調だつたのが、たつた一体の次元の神が乱入したことにより、全てが滅茶苦茶にされてしまった。そんな屈辱を思い返した次元の悪魔は、改めて憤りを思い出し、吐き捨てるように言った。

『この仕返し、必ずしてやりますよ。今度は私の考えたゲームで、たっぷりけちょんけちょんにしてやります』

あのジャンケンゲームで、デイメイションにまんまとしてやられた事が忘れられないのか、変なところを根に持つ次元の悪魔は、どこか根元からズレた仕返しを決意する。

「とりあえずはタキオン様へ報告して、新しい器を貰い。今度こそデイメイションを潰すでしょう」

次元の悪魔が嘲笑を含めた声調で、打倒デイメイションを企んだその時だ。

「生憎だけど、それは無理よ……」

突如として後方から、女性の声がした。透き通るような、凜とした声だ。

「な、誰だ！」

後方に視点を変えた次元の悪魔は、目の前にいた存在に、驚愕の声を漏らす。

「き、貴様はまさか！」

「久しぶりにデイメイションの力を近くで感じたから、この辺かと思つて来たけど……まさか、次元の悪魔に遭遇するとはね」

確実に獲物を補足しうる、野性を宿した黄金の瞳。肩まで伸びる無造作な髪は白銀の煌めきを宿す。その左右の間からは、犬や猫と同型の獣耳が突き出ていた。

腰から生えたふさふさの尻尾をしなやかに揺らす。髪と同色の獣毛を纏う人型の肢体。容姿はさながら気高き白狼を想わせる。

野性と上質な気品を雰囲気纏う、彼女の名は――

> i 1 7 2 5 1 — 2 9 1 <

『時の女神……ラミアグレス！』

またか――と、うんざりした様子で首を振るい、彼女は言う。

「繋げて言うのやめてくれる。私の名前はラミアグレスよ。まあ、そんな事はどうでもいい」

焦りを含んだ声を出す次元の悪魔に、ラミアグレスの鋭利な獣爪が指差す。

「あらかじめ忠告しておくわ。あんたに逃げ場は無い。おとなしくすれば、楽になるから……言うとおりになさい」

『ヒッ!』

一見して無感動な表情を向ける彼女。だが、威圧感ある声色に、次元の悪魔は戦慄を覚えた。

すぐにここから逃げなければ、喰い殺される。

そんな獲物になった気持ちに追い込まれ、次元の悪魔は脱兎の如くと言わんばかりにラミアグレスから飛び出すように逃亡した。

だが――。

「狼は……狙った獲物を、そう簡単には逃がさない」

そう呟く彼女は、ゆっくり頭上に右手を翳す。掌の上で銀色に輝く粒子が集束され、光は次第にリング状を形作る。

翳した右手で光のリングを掴み取り、体を捻る。そこからラミアグレスは身を数回転させ、リングを投げた。まさに円盤投げのスタイルだ。

リングはジグザグに荒々しい動きで次元の悪魔へと飛んでゆき、回り込んでリングの中央に入れると、凝縮して真紅の電撃を迸らせる。

『ぐぎゃあああ!』

リングから放たれる電撃によりその身が麻痺し、魂を完全に拘束されてしまった次元の悪魔。苦痛の叫びと共に、動きが止まる。

苦しみ唸る次元の悪魔に、ラミアグレスは浮遊したまま、威圧的な気を漂わせて寄り付く。

『ひっ、ひいい! お、お願いします! 見逃してください! 二度と悪さはしませんから! どうか、どうかああっ!』

必死に命乞いを試みる次元の悪魔だが、ラミアグレスには情緒など全くない。大きく輝く獣の瞳に青白いガスこと、次元の悪魔の姿を映し、ただ冷たい視線を向けるだけだ。

「あんたを消すつもりはない――。ただ、見逃すつもりもない……」

ラミアグレスは次元の悪魔へと左手を添える。左手から真つ白な炎が現れ、揺らめく。

「生まれ変わって、出直しなさい……」

刹那、空間が次元の悪魔を中心に、ぐにやりと歪み出す。歪は次第にエス字から、螺旋へと歪みの極度を増してゆく。歪は次

『ぐぎぎぎぎ……！』

それが酷くなるに連れ、共にねじ曲がっていく次元の悪魔が、奇妙な呻きを上げていく。

「今度は、そんな奪うだけの時を歩まず。歪みの無い、清らかな未来を歩みなさい」

歪みが限界に達する瞬間。今まで無慈悲だったラミアグレスの表情が優しく、哀しげな微笑みを見せた。彼女が次元の悪魔に翳している白炎を纏った左手を、潰すかのように強く握り締めたのは、それとほぼ同時のことだった。

『あ…… あああ…… あああ…… タ…… タキオン様ああ……』

渦状に歪んだ次元の悪魔は一気に凝縮され、次の瞬間、金色の粒子となり飛散した。

「あんたが生まれ変わった後に幸福が訪れるよう。祈らせてもらうわ……」

空間の歪みが薄れ、正常へと戻る中、ラミアグレスはふつくとした胸の谷間に手を当て、うつむき加減に切なく呟いた。

「ありや？」

次元空間を漂うように移動していたデイメイションが、首を傾げた。

「どうしたのデイメイションさん？」

「次元の悪魔が消えちゃった」

唐突に告げられた言葉により、彼の背中にしがみついている良助の顔に、驚愕の色が浮かぶ。

「えっ？　つまり、次元の悪魔は死んだってことですか？」

「まあ、そんなとこだな。それよりも次元の悪魔が強制転生をやる前に感じた波動。ありやあ、ラミちゃんだな」

「え？　ラ、ラミちゃん？」

一体誰の事を差しているのだろうか？

そう思いながらも困惑する良助に、デイメイションは語り出す。

「次元の悪魔がちょっとだけさり気なく言ってたろ？　時の女神ラミィアィグレスのことをさ。俺の姉貴分のようなやつなのさ、ラミちゃんはな」

「あ、姉貴分……？」

初耳でもある分、意外でもある。まさかデイメイションにそんな関係の神がいたなんて。それがどんな女性なのか、良助には全く想像も付かなかった。

少なからず、デイメイションが姉貴分と慕うくらいだ。もしかしたら半端ないくらい変わり者なのだろうか、少し失礼と思いながらも、彼は息を呑むのだった。

「まあ、近いみてえだし。行ってみるか」

そう呑気に言つと、デイメイションは少し移動速度を速めた。次元の悪魔が消えたと思われる場所を、彼らはただ目指すのだった。

新たな冒険と戦いが待っているとも知らずに――。

チャプター1『新たな旅』

漆黒が辺りを包み、周りには小さな灯火が所々に煌めく。宇宙に広がる星ぼしと大差なく輝くこれらは異世界への扉。

この空間は、言うなれば次元の狭間。次元を移動する者は、皆この空間を漂い。そして自身のいた世界とは異なる場所へと足を踏み入れる。但し、それを可能とするには、それ相応の力と資格が必要。つまりは、選ばれた者だけの特権である。

私もまた、その中のちっぽけな一人。周りからは時の女神などと呼ばれている、傲慢な存在だ。実際のところ、私は時の女神でもないし、また次元を越える次元の神でもない。ただ、こういった所行が出来るだけの半獣半人の女。それが私、ラミィアィグレスの実体だ。

元を辿れば、私はアグと言う名の白い雌狼だった。ところが、私はある日を境に命を落とした。薄れ逝く意識の中、ある男が私に時を操る力と、次元を駆ける力を授けてくれたのが始まりだ。

半獣半人の生体として転生した私に、男は自分の世界で『荒ぶる女神』の意味を持つ、ラミィアィグレスと言う名をくれた。それからは異世界をさまよい歩いていた。次元の悪魔の存在を知ったのも、そんな時だった。

次元の神、ディメイション・ザ・カオシックと出会ったのも――

「ようラミちゃん。久しぶりだなっ！」

次元の狭間にて、次元の悪魔を強制転生をした後だ。後ろから不意を突くかのように、緊張感の欠片もない、明るい声が私を呼んだ。
「……久しぶりねディメイション。何千年ぶりかしらね」

後ろを振り返ると、彼はいた。私が初めて出会った次元の神、デ

イメイション・ザ・カオシック。相変わらずの笑顔は今も健在だった。格好から雰囲気まで昔から何一つ少し変わっていないが、一つだけ違うところがあった。それは彼の背中に少年がしがみついていること。

「元気だったかいラミちゃん！　へへへ、俺は電気だぜい！」

「無理にふざけるのは止しなさいよ。それに、あんたの背中にいる少年は誰なの？」

私は呆れながらも、左手を空に指差しているデイメイションに訊ねた。

黒髪に学生服の少年は、頬を赤く染めながら私を怪訝そうに見つめていた。心を覗いて見ると、彼はデイメイションから私がデイメイションの姉貴分だと聞かされたのが理由で、私が彼に似たエキセントリックな女性をイメージしていたようだ。

眼にしたら余りにも私の存在は予想と反したらしく、何よりも私が艶めかしい女性として見えるらしいので、こうして上がってしまった。まあ、私の外見は獣毛に覆われた身体とは言え、彼らの世界で言えば裸同然なのだろう。興奮から随分と心拍が乱れているのが判る。

「あ、あの。や、山田良助と言います。ど、どうも……」

彼はデイメイションの肩越しからこちらを恥ずかしそうに見て、照れくさそうに自己紹介をしてくれた。どうやら、自分が美しいと感じた女の前では、内向的になってしまいう傾向が彼にはあるようだ。付け加えて、彼は私に対して僅かながらも恐れを抱いている。口調の厳しさや威圧的な声色から、近寄りがたい者と捉えてしまっている。それとは別に多少嫌らしい妄想も立ててはいるのだが……。そこにはまあ、触れないでおこう。

——心が読めるのも考え物だ。

自身が持つ能力の一つに嫌悪感を抱きつつ、私は彼に一声掛けてみた。

「ラミィアィグレスよ。そう上がらなくていいわ。それと、君が思

っている程、私は美しくは無いし、口調が厳しく感じているみたいだけど、私はそんな冷たくは無いから」

冷たく無い——自分で述べるのもなんだなと、内心自嘲した。

「え、ええっ！　嘘！」

デイメイションと共に行動しているだけあり、彼は自分の心を読まれていたことに早くも気付いた。それと同時に、読まれたことに關して酷く困惑していた。

「ぜ、全部読んでいたんですか？」

「そうね。君が私の体を見て、エッチい事を考えていたのも全部ね」彼の心の中では雷が落ちた。恥ずかしさのあまりに、それを早く言ってほしかったと、あたふたと心の中で取り乱し。自分の今まで読まれた迂闊で愚かな思考に対し、頭を抱えて後悔の念を露わにしていた。

「は、恥ずかしい……。ご、ごめんなさい！　そういうつもりじゃあ無かったんです！　ただ無意識に、見た瞬間にそうイメージしちゃった訳で！　えと、その……」

どうにか誤解だと訴えたくて解釈の言葉を必死に探す彼の横から、デイメイションがニヤニヤとしながら口に出す。

「へへへ、良ちゃんはエロチシズムだからな」

「そ、そう。僕は愛欲主義者——ってゴルァ！　何を言わすんだあ！」

「え？　違うのか？　だって良ちゃんの部屋にはマニアックなエロ——」

「言うなあーっ！　前に言わないって約束したでしょうが！　何さらりと暴露しようとしてんのっ！　こんなあつさり、しかも最悪なタイミングで約束破んな！」

ごめんなさい良助。君が自分で過去を思い出したせいで、私は君のそれを読んじやいました。本当にマニアックな官能小説を持っているのね。

などと、思わず軽蔑の溜め息を漏らした私を見た彼は、自己嫌悪

で泣き出しそうな顔をしていた。

「えっと、私が言うのも何だけど、そんな気にしないで。とりあえず、君の心はもう読まないようにするから」

流石にこれ以上は話が進まなくなりそうなので、話を打ち止めるために私は告げておく。

「うう、何かすいません……」

私の配慮に、良助は大袈裟に感涙する。何とか事態の収集を治めた私は、気を取り直してデイメイションへと視線を替え、彼に用件を言った。

「デイメイション。早速だけど、あんたの力を借りたいの」

「ん？ 俺のか？ 次元の悪魔とかかい？」

本来なら次元の悪魔のように、異世界を狂わせる奴らと戦う使命や、倒す義理などない。だから大半の神々や、それに匹敵する強者は奴らを相手にしないし、寧ろ新たな力を得るために悪魔に魂を売る者も現れる。私やデイメイションはアルビノのような使命で戦っている訳でもなく、また誰かに借りがあるからとかで戦っていない。ただ、放つてはおけないから、自分に救う力があるのなら、そのために使おう。そんな独善的な正義感で戦っている。

甘い考えかもしれないが、そういう性分だ。この姿に転生する前から私は面倒事に自分から首を突っ込む癖があったが、直すつもりはない。それが私なのだから。

「話が早いわね。ちよっと数が多いのよ。それも、けっこう手強そうなやつらがいる」

そこまで話すと、デイメイションは待ってましたと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべた。

「へっへへ、ラミちゃんが誘うくらいの厄介者か。腕になるぜ！」

デイメイションは右手で左の二の腕をがっちり掴み、ガッツポーズを見せ付けて意気込みを入れた。相変わらずテンションが高い奴。疲れないのだろうか？ というか、見ているこちらの方が先に参ってしまう。

「んじゃあ、早速行くか。ラミちゃん案内よろしく」

「待ちなさい。まずは彼を元の世界に戻して。そうじゃないと連れて行けないでしょ」

私が良助を見つめながら告げると、デイメーションはさも不思議そうな顔で首を傾げた。

「……何で？」

「何でじゃない。普通にダメでしょうが」

他の世界の者が、他の世界に干渉してはいけない。これは先も話したように、干渉できるのは特殊な力を得た、選ばれた者の特権なのだ。見る限り、山田良助と言う彼は普通の、何の特殊な力も持たない人間。そんな彼が異世界へ足を踏み入れてしまえば、本来あるべき世界の在りようが大きく変わってしまう。アルビノや次元の神々は、本来そう言った乱れを防ぐ者達だ。

このまま異世界に干渉させ続けようものならば、良助は明らかに捕縛、或いは抹消の対象となるだろう。

「だから、彼を元いた世界へ帰しなさい。さっき彼の心を読んで判ったけど、幾つかの異世界に関わったみたいじゃない。幸い何も変化が起きてないけど、このままだと、あんたも纏めて周りに狙われるわよ」

「おーいおい。アルちゃんもそうだったけど、ラミちゃんまでそんなこと言うのかよ」

「ハア？」

やれやれと首を振るデイメーションに、私は思わず怪訝の声をを出してしまった。けれど、いつになく真剣な面立ちでデイメーションは言う。

「本当に感じねえのかよラミちゃん？ 良ちゃんから、なんつーかほら、不思議な感覚ってのかな？」

「いったい何を言っているのだろうか？ 何とか言葉に出来ないかと頭を捻っていたデイメーションだが、取り敢えずと続けて口に出す。

「とにかくさ、良ちゃんは普通の人間なんかじゃねだつて。何か
すげえんだよ。強い次元の悪魔と戦う時、良ちゃんがいると妙に力
が漲るんだ」

「力が漲る？」

「どういうこと？ この見るからに平凡そうな、ただ困惑した様子
で成り行きを見守っている少年に、いったいどんな力があると言っ
たの。」

私が彼をまじまじ見据えていたら、彼は顔を強ばらせてデイメイ
シヨンの肩に隠れる。

「あ、あの。い、一応僕自身もよく解らないんですよ。いつもデ
イメイシヨンさんが力が漲るとか言って戦っていた間の記憶だけは飛
んでいて……」

「記憶がない……」

「そうみてえなんだ。だからさ、やっぱり良ちゃんはそのまま放つ
てはおけないだろ？ もしかしたら、今度の戦いで解るかも知れね
えしさ。な、頼むよ。良ちゃんも同行させてくれ」

彼らの目を見れば解る。この話が嘘ではないことくらい。何より
もデイメイシヨンは隠し事はしても、嘘はつかない。そう、悪意の
ある嘘は絶対に。

アルビノすら解らない謎を秘めた彼——山田良助。確かに気にな
りはするけど、異世界に行くかどうかは彼の意味だ。デイメイシヨ
ンが決めるべきではない。それに危険を冒してまで行くのは、気乗
りではない。

「良助。君はどうしたいの？ 私達と一緒に行く？」

「僕は……」

「へっへへ。良ちゃんはいく——」

「あんたは黙ってなさいよ。良助の意思をはっきりさせたいのよ」
私がつっぱり言い放つとデイメイシヨンは『ラジャー！』と敬礼
しながら沈黙に入った。相変わらず憤りを煽るようなふざけた仕草
は、相手の感情を逆撫でさせ兼ねないものだ。私だからスルー出来

るけど、他の奴、特に初対面やアルビノだったら、確実にプチツとキレている。

それはそうと、私は良助の返答を待っていた。少し思い悩むように彼は俯けていたが、やがて決意を秘めた眼差しをこちらに向けて頷いた。

「行かせて下さい。僕には、僕自身にはいったい何があるのかを知りたい」

「下手したら、二度と戻って来なくなるわよ。それでも良いの？」
私達の戦いに巻き込まれれば、当然ながら命の保障は無い。私達も無敵ではないのだ。一步でもミスを犯せば、戦いに敗れてしまえば、死以上の苦痛が待っている。魂を砕かれ、二度と転生を遂げられない闇の底へと落とされるだろう。少なくとも彼は体感しているはずだ。デイメイションと共に危険の数々を。

いや、だからこそ彼は答えたのだろう。

「大丈夫です。デイメイションさんが言いましたから、俺がいる限り、お前は死なないって。僕はデイメイションさんを信じてますから」

彼の答え、覚悟は本物だ。これ以上どうこう口にするのは野暮というものか——私は瞳を閉じて頷いた。

「……そう、ならこれ以上は何も言わない。私も君を守りながら戦闘を行う。後、君の謎を探るのも含めて、出来るだけ行動は共にする。それでいいかしら？」

瞳を開いて問い掛けてみると、彼はこちらを見据えて頷く。迷いのない真っ直ぐな黒い瞳には、くつきりと私が写し出されていた。

「はい。よろしく願います」

「うん、よろしい。それじゃあ行きましょうか」

私が笑顔を返すと、彼も照れくさそうに微笑み返してくれた。どうやら、初対面時よりは、良い印象を受けてくれたらしい。私としてもあまり嫌われるのは好ましくない。情けない話だが、私は嫌われることが恐い。だから縁を大切にする。それを断ち切られるのは、

孤独を味わうよりもずっと辛いのか。

「お、やっとな出発だな！」

と、そこで鼻ちようちんを膨らませて寝ていたディメーションが、鼻ちようちんが割れると共に目を覚ました。

「——と言っか、ずっと寝てたんですか！ しかも立ちながらっ！」
「へへ、良ちゃん。俺はどんな姿勢でも寝れるんだぜ！ すげえだろ？」

「そんなくだらない特技自慢してどうする気よ……」

「ふっ。優越感に浸るのさ」

「馬鹿でしょあんた？」

まあ、今更言わなくても解ってはいるが。取り敢えず――

「気を取り直して、まずは目的地に行きましょう。場所は――」

いろんな種族が住み着く世界。

名はインフィニット。

チャプター2『伝説』

美しく輝きを放ち、満月は夜の世界を照らす。
寂しげに吹き付ける風が枯れた大地を撫でつけ、荒野に土煙が舞う。

大地に突き刺さった鉄クズに化石と化した巨大な骨——これらは、以前は兵器、または数メートルを超える生き物だった物。形として今も残しつつある全てが、この世界の過去を物語っていた。

「ここが、インフィニットよ」

私は隣にいるデイメイションと良助に言った。デイメイションの背中から降りて地に足を着けた良助は、この世界の在りようにうれい^{うれ}を帯びた表情で息を呑む。

「ここが……インフィニット。何だか、凄く寂しげなところですね

……」

「そうね。でも——」

現在^{いま}はまだマシなはずだろう。ここは過去、酷く激化した戦場だった。

それはたった一人の魔術師が織りなした混沌。

魔術師は力を持っていた。神に勝る、悪魔をも従える魔力をその身に宿して、世界に戦いを仕掛けた。圧倒的な力に、一人の欲望に、世界は邪心の闇に侵食されつつあった。

成す術なくこのまま世界が彼の手中に納まるかと思われた——そんな時、救世主は現れた。

救世主は、魔術師と戦った。インフィニットというこの世界を舞台に、嵐の輪舞曲の如く、数十年も激戦を繰り広げた。

長きに渡り、沢山の死者と犠牲の末、決着は着いた。永遠と思われた戦いは、救世主の勝利という形で幕を閉じた。

「後に救世主はこう告げて、このインフィニットから姿を消したそうよ——」

——世界は廻る。いつまでも、例えば私がいなくなろうと。過去はまた繰り返され、禍はループし続ける。

「その言葉にはどんな意味、そして思いが込められていたのかは判らない。だけど、彼女は世界を救うために戦った。それは事実であり、今もインフィニットの歴史に刻まれているの」

「彼女？ その救世主って女だったのかいラミちゃん？」

やはり意外だったのだろう、眉を顰めてデイメイションが問い掛けたのに対し、私は彼女を見やり頷いた。

「ええ、そうらしいわ。誰もその素性は知らない、謎の女性。彼女の名は——」

メシア・ピリオード。

忽然と現れ、邪悪な魔術師と嵐を連想させるような勢いでぶつかり合い、そして疾風の如く消え去ったと云われている伝説の救世主別名『銃撃女神』と呼ばれている。

実を言うと、私は彼女の存在をつい最近、それもこの世界の住人達が語る伝説を小耳に挟んで初めて知った。今も生きているのか死んでいるのかも解らない謎の存在。だけど、この世界に今は存在しない兵器の残骸や怪物の化石。何よりも、魔術などに近い何か特殊な力で扱われた大地が、彼女と魔術師の戦いをしっかりと物語っていた。

推測からすれば、彼女の力は私やデイメイションのような神々を軽々と超えるはず。

インフィニットはとてつもなく広い。私やディメーションが本気になっても、この世界を消滅させるのは至難の技だ。それだけ大規模な世界なのにもかかわらずメシア・ピリオードと魔術師は、この世界中の至る所を穴だらけにしている。

にしてもこれほどの存在が、何故最近まで神々の耳に入らなかったのか不思議でならない。彼女が未だインフィニットにいるのなら、どれほど高位な次元の悪魔が束になろうと、瞬く間に蹴散らされているだろう。

「だけど、次元の悪魔がこの地で動き出しているにも関わらずこうして放置されているところを見ると、インフィニットにはもう救世主はいないのでしょうね。だから今、次元の悪魔を止められるのは——いえ、止めるのは私達の仕事よ」

「よし、んじゃあ行くか！」

「ええ」

話を終え、私達は颯爽と駆け出す。次元の悪魔が集まっている場所へと。

当然ディメーションも私の後に続くが、それと同時に良助の悲鳴が聴こえた。走りながらも気になって後ろを振り返ると、ディメーションにしがみついている良助が、風に舞う鯉のぼりのようになっていた。

——こ、これはちょっとね。

彼の身が保ちそうにないと悟った私は、すぐに急ブレーキを掛けた。

「うお！ ラミちゃんどしたんだ？」

急停止により、鯉のぼり状態だった良助がディメーションの背中へと押し付けられるようにへばりつく。

「うげっ！」

彼の奇怪な呻き声が上がった。

そんな後ろの惨事に気にもとめず、デイメイションは首を傾げている。

「あ、あんたね……。少しは良助のことにも配慮しなさいよ。彼、普通の人間なのよ。殺す気？」

「だあっはっはっはっ！」

「えっ？　ちよっ！　何でここで笑うんですか！　意味解んないですよ！」

良助に同意だ。意味解んない。こいつは時々場違いな行動を取るから仕方ないと言えば仕方ないけど。何故笑う？

「なんとなくだぜっ！」

胸を張って言い切ったデイメイションの笑顔に、渾身の弾丸エルボーをぶち込んでやった。理由はなんとなくムカついたからだ。

「はははっ！　冗談だぜラミちゃん」

エルボーの反動で首を回転させながらデイメイションは言う。機械の体じゃなきゃ出来ない芸だ。生き物がやればドッキリどころじゃないだろう。しかし笑えない冗談であることに変わりはない。

「何が冗談よ。首をクルクル回してふざけたこと言ってんじゃないわよ」

冷たくあしらう私に対しデイメイションは「悪い悪い」と気兼ねなく謝ったが、その態度は明らかに悪びれていない。もう一発ぶち込んだるか、こいつは？

「まあ、確かに良ちゃんをあまり苦労させたくねーんだけどさ。ほら、せいぜいフィールドしか張れねえし、重力制御しても。走る時の揺れはどうにもなんねえだろ？」

「空飛べばいいでしょうが……」

「やだ！」

「ぶつわよ？」

胸を張って拒否するデイメイション。そのムカつく笑顔を目掛け

て拳を振り上げた私に、良助が宥めるように制止を掛けた。

「ま、まあ落ち着いて下さい。僕は大丈夫ですから、ね？」

「駄目よ良助。こいつは甘やかすと調子に乗るから」

私がデイメイシヨンの胸倉を掴みながら良助に異議を唱えていると、掴まれている本人が笑顔で閃いたと言わんばかりサイレンを鳴らす。何故に閃きの音が緊急警報機のモノと同じ？

「そっだラミちゃん！ ラミちゃんが獣化して良ちゃんと俺を乗せて走るってのはどうだい？」

立てた人差し指を前に出して、デイメイシヨンは案を述べる。

「獣化？」

その疑問に眉をしかめる良助を見やり、デイメイシヨンは説明しだす。

「ラミちゃんは獣人姿だけじゃなく、狼とか人に変身できるんだ。狼の姿ならいつも以上に速く走れるし、馬よりも大きいから俺や良ちゃんも乗せて素早く移動できるぜ」

それを聞いて良助は関心の声を漏らした。にしてもあの姿が——確かに狼になって二人を背中に乗せて走るのも良いかもしれない。良助を落とさないようデイメイシヨンが支えてやればいいから全力で疾走しても大丈夫だろう。多分……。

それとデイメイシヨンが何故空を飛ばないのか、獣化を提案した際に私はその訳を察した。空の方からだ次元の悪魔達に感づかれやすいからだ。逆に気配を殺しながら陸地を進めば、出来るだけ気付かれることなく接近出来る。障害物に身を潜めながら行けば奇襲攻撃も仕掛けやすい。だから私は、このデイメイシヨンの案をのむことにした。

「判った。二人とも少し離れてて」

「おうっ！」

活気の付いた返事を返すと、デイメイシヨンは良助をひよいと持ち上げてあつと言う間にここから数キロ離れ——

「——て、おいっ！」

離れ過ぎっ！

私は“少し離れてて”と言ったのに……。まあいい、とりあえず獣化しておこう。そうと決まれば、私は全身に力を入れる。体が光に包まれると徐々に肉体が軋み始め、私の骨格などが形を変えていく。一秒も掛からない内に、私の姿は白い毛並みの狼へと姿を変えた。獣化を終えて、私は彼らのいる場所へと軽快な足取りで駆け出した。

——そして。

「おっ。ラミちゃん来た」

「えっ、うわっ！」

数秒も掛からない間に彼らまで駆け寄り、そのまま飛び越えて後ろに回った。そんな私を目の当たりにし、良助は驚いて後ずさる。

「ほ、本当にラミアグレスさん？」

「ええ、私の姿の一つよ」

それから私は二人の前に立ち、背中に乗るよう指示した。するとデイメイシヨンは跳躍し、遠慮なく体重を掛け、尻から私の背中のしかかった。

「ぐほあっ！」

いったああっ！ 何てことすんのよこいつはっ！

背中から来た衝撃に、思わず口から呻き声が漏れたじゃないの。

「デイ……デイメイシヨン。あんた覚えときなさいよ……」

「わ、わりい。ついノリでやっちまったぜ」

ノリでやるなと憎らしい気持ちを感じに込めて睨み付けると、デイメイシヨンはやや慌てた様子で頭を下げた。

一応悪気はないらしいが、正直こういう乗り方は止めてほしい。

他ならとにかく、あんたのは重いよ。不愉快な感情に駆られるも、とりあえず私は気掛かりな良助に視線を移してみた。彼は必死に背中の上がろうと頑張っていた。私の体毛を掴み登っていくも、何だ

か辛そう。

「良ちゃん掴まれ」

「あ、ありがとうデイメイションさん」

そんな彼に、デイメイションが手を伸ばして良助の手を掴んだ。ふむ……いつもはつちやけたことをして周りに迷惑を掛けるけど。

何だかんだいってデイメイションは周りに気を使っているみたいね。「よっと！」

「うわあああああ！」

「あ、やべ、引き上げる力加減間違えた！」

前言撤回、こいつはただの馬鹿だ。このままだとヤバいので、私は急ぎ良助の落下位置まで駆け出した。そしてデイメイションが良助をキャッチすることで惨事は免れた。

「大丈夫か良ちゃん？」

デイメイションにお姫様抱っこされる形で、良助は息を荒げていた。次第に落ち着いたかと思えば――

「ふざけんなてめえ！ マジで死ぬかと思ったぞゴラア！ 殺す気かあああ！」

あの温厚そうなイメージが一変、狂暴化した良助が怒鳴り散らした。

それから一分くらいして。

良助は言うだけ言い尽くし、酸欠寸前に達したせいか肺を休ませるため必死に息を整えていた。

「良ちゃん。マジですまねえ。こんなつもりじゃなかったんだ」

いつになく、デイメイションが頭を掻きながら申し訳なさそうに告げた。これは珍しい。デイメイションが本気で謝るとは。流石に良助も怒る気も失せたらしく、一旦溜め息付いた後、出発しようと

口に出した。

「全く、次から気をつけて下さいよデイメイションさん」

目的地を目指し私が大地を颯爽と駆け抜ける中、良助が溜め息混じりで呟いた。

「いや、だから本当に悪かったって」

困惑の表情で、デイメイションは額の前で手を重ねて頭を下げた。
「もういいですって、それに僕もちよつと言い過ぎましたし」

「良助が謝る必要ないわよ。それだけのことしたんだしね。こいつ」

「はは、ラミちゃん手厳しいぜ」

まあ、本当に反省しているようだから、これ以上は言わないでおこうと思う。これから戦闘が始まる。士気が下がるのは好ましくない。コンデイションは良好で挑むべきだし、これから気を取り直すでしょう。まあ、それでもこいつはこんな事でへこむようなたまじやないだろうけど。

何にしても――

「デイメイション。あんたはその子をしっかり守りなさいよ。私もある程度はサポートするから」

「おう、了解だぜ」

「それと――」

「出来るだけ次元の悪魔による被害は少なめに。だろ？」

――解ってるじゃない。

その心構えを聞けて安心した。

それから更に走りつづけて数分。

荒野の先に、奴らの存在が感じられる廃虚が見えて来た。斜めに傾いたビルのガラスが、夜空の満月を映し出している。

「さてと、そろそろね。二人とも、準備はいい？」

「はい、オーケーです」

「へへ、んじゃあいくか！」

二人の意気込みを耳にした私は、更に速度を上げる。これから始まる戦いに備え、私はいつも以上に集中し、神経を研ぎ澄まし、戦闘体勢に入ると物静かに沈黙し続ける廃虚へと足を進めた。

この時、私は知る由もなかった。まさか二度と会えるとは思っていなかった、懐かしき友に出会うことになるうとは。

そしてそれが、悲劇へと繋がることになるうとは――

チャプター3『気持ちの擦れ違い』

「おかしい……」

「え？ お菓子？」

「もう黙れお前。ワザと聞き間違えてんじゃないわよ。気付いてるでしょ？」

この廃墟にいた次元の悪魔の気配が、忽然と消えたことに。

いや、だからこそデイメーションは気付かない振りをしているのだろうか？

多分、次元の悪魔は鳴りを潜めて、私達を罠にはめようとしている。いた以上、逃げ出したならその痕跡となるモノが残るはずだ。匂いだろうと気配だろうと、空間転移を行ったとしても、必ず何か痕跡が残る。

「だから、逃げようと、隠れようとしたって無駄よ」

私が廃墟の中央——昔使われていたと思われる高速道路——に佇み、語り掛けた。きっと次元の悪魔達に聞こえたはず。しかし待ってみても反応がまるでない。何故だろうか？

こういう場合、大抵は敵が不意を突くように飛び出してくるものだけど、これはいったい……

「クハハハハッ！ 隠れてねえよ。おびき寄せたんだよ」

あたり一面に木霊する若々しい男の声。聞こえたかと思えば頭上から人影が、蹴りの姿勢のまま光速で私の立つポイントへと突き刺さった。咄嗟に飛び退いて敵の攻撃を躲すも、直後の衝撃でプレートに亀裂が生まれ、瞬く間に砕け散ってしまった。

「うわわッ！」

「しっかり掴まって！」

崩れ落ちる岩盤の中を素早く飛び移り、私は乾燥した大地へと着地を決めた。

「ふざけた歓迎をしてくれるわね」

私に続いて、後方から着地を決めた謎の気配——おそらく先程の攻撃を仕掛けてきた人影——に皮肉を述べて、私はその姿を確認するため振り返るも……

「あ、あんたは……」

言葉を失った。何で声を聞いた時に気付けなかったのだろうか？目の前に悠然と立つ男は、人の顔立ちながらも全身は白の獣毛に包まれている。紅い瞳を闇夜に妖しく輝かせ、真っ白な長髪から尖った耳をぴくりと動かし、腰からふさのように多く集まって垂れ下がっている尻尾は、狼などのモノと一緒にだ。一目見て分かる。私と同じ種類の……半獣半人。

けれど、驚いたのはそこじゃない。この男の匂いは、忘れもしない。私が死んで転生する前まで、狼として生きていた頃の仲間。

「オウルッ！」

思わず変身を解いてしまった。その拍子に良助が転げ落ちた。支えてあげなさいよデイメイション。とはいえ、非があるのは私の方か。

「ごめん良助」

「い、いえ。お知り合いなんですか？」

「ええ」

半獣人化した私を見るなり、オウルは眉を顰めて両腕を組む。

「お前。アグか？」

「ええ、そうよオウル。久しぶりね……でも、どうして私達を攻撃してきたの？」

問い掛ける私に対し、ただオウルは俯いて瞳を閉じたままだった。「クク、クハハハッ！」

けれど、突然オウルは口角をつり上げて高らかに笑い出す。いったい何で？

「オウル……？」

「ヒヤッハハハッ！ 今日なんてツイてんだオイ！ タキオン様に命令されてメシア捜しに来てみりゃあ、次元の神が追って来たか

らうぜえと思つて待ち伏せしてりやあ。それがテメエたあな！」

そんな、どうしてオウルがタキオンのことを様付けで呼ぶの？

「ん。何だお前、タキオンの部下か？」

「おうよ。テメエは確かデイメイションだろ？ 話は聞いているぜ。

へえ、本当にそっくりだわなあ」

「聞いたか良ちゃん！ 俺はかつよくて優雅でユニークで素直クールな誰かさんにそっくりなんだつてよ！」

「いや、そこまで言つてないからあの人！」

「そんなことよりも！ オウル、あんたから流れているその力は、まさか……」

感じる。オウルから流れるこの禍々しい力。憎しみや、殺意、狂気、様々な負のエネルギーの流動は、次元の悪魔が持つ特有のものだが。おかしい。次元の悪魔に取り憑かれた対象者の気の流れは別々に感じるはずなのに、オウルからはそのような気配がまったく無い。

彼自身から放たれている。

まさか、オウルは次元の悪魔と――

「同化したの？」

私の問いに、オウルはニヤリと唇を三日月に曲げた。何がそんなに嬉しいの。同化が、何を意味しているのか判っているの？

「あの、同化つて？」

「そのままの意味よ。良助」

次元の悪魔は破壊衝動の思念体。秩序や生命など、様々な概念を破壊し尽くすことを目的とする。微弱でもその力は確実に周囲へ影響を及ぼす。

基本的に次元の悪魔とは、異世界にいる生物達の心の悪い部分、ストレスとなるマイナスが集まって生まれるものだ。悪霊の類いと違う大きな点はそこにある。

異世界からはみ出してしまう程の負のエネルギーが次元の狭間で誕生し、さまよい、自分が寄生する依代を探し、そしてすべてを破壊す

る。名前の由来はそこから生まれている。そんな次元の悪魔の力を利用する者達が、いろんな世界に数多く存在する。その一例が今のオウルのように、次元の悪魔と一つになること。

次元の悪魔は見境無く相手に乗っ取ろうとするが、相手側の力が強いと逆に追い出されてしまう。しかし、もしも相手側と次元の悪魔が限りなく近い性質であれば、馴染むように一つに変わりゆく。ある意味で、それも悪い意味で進化を遂げる。

「けれどよ。同化ってほぼゼロに近い確率のはずだよな？ 次元の悪魔と全体的に性質が一緒じゃねえと起きねえはずだけど」

デイメイシヨンの言うとおりだ。近しい性質の存在になど、そうそう巡り会えたりはしない。次元の悪魔は根本的にどの生命とも相性が悪いから、例えば対象者が最低最悪であろうと、意図的な同化でなければまず有り得ない。だとすれば何者かの陰謀により、望まぬ形として今の姿へと変貌してしまったのでは？

「クハハハッ！ アグ、どうせテメエのことだ。俺が無理やりに同化されたとも思ってたんだろ？」

「違うと言うの？」

「ああ、違うねえ。俺はタキオン様に頼んで、俺と同じ性質の次元の悪魔を造ってもらい。自ら今の姿になったのよ！」

さも嬉しげに、オウルは告白した。まさか、タキオンにそんな力があるなんて。実物を目にしたことはないけど、タキオンが恐ろしい力を持つ存在だとは耳にしていた。それはもしか、次元の悪魔を創造する能力のこと？

いや、そんなことよりも、どうしてまたオウルが次元の悪魔と同化などを望むの？

「ククク、アグ。あの日、目障りなテメエが事故で死んでから、群の中で俺がトップになると思ってたよ。けれどよお、あいつらテメエが死んだのを俺のせいになんて言ったんだよ」

私が死んだあの日……雪山での雪崩か。

昔からオウルは私のことを嫌っていた。私が仲間の狼から親しま

れているのが気に入らないと口に行っていることから、理由はそこにあるのだと思う。オウルは気性が激しく、狼としての野性が強かったけど、自己中心的で協調性がまるでなかった。何をイラついているのか、いつも神経を尖らせて周りを恐がらせてばかりで、時には仲間に暴力を振るうこともあった。

私が注意して、そのたびに喧嘩して険悪な空気になることが多かったのは覚えている。みんなはオウルを煙たがっていたけど、私はオウルのことは嫌いじゃなかった。寧ろ、小さい頃から一緒に育った彼を、弟のように思っていた。

「あいつらは寄つてたかつて俺を袋にしゃがった！ 痛かったぜありゃあ。最悪だった」

「本当に、本当にみんながあんたにそんなことを……」

「ハッ。テメエがいたから今までみんな我慢してたんだよ！ テメエがくたばって、俺を生かす理由も無くなったんだろ」

みんなが……みんながオウルを。信じられない、嘘だと言いたいけど。よく、みんながオウルを群から追い出そうと話をしていた。けれどオウルも仲間だし、放つてはおけなくて。だから私は、何度もみんなに彼を多目にみてほしいと頼んだ。

「クソうぜえんだよッ！ どいつもこいつも、みんなテメエの名前ばかり口にしゃがってよお！ 狩りが出来ても甘ちゃんなテメエばかりがちやほやされて、俺ばかりが疎ましがられて。ふざけてんじやねえよクソが！ だから全部ぶっ殺してやったのよ。タキオン様の助けを借りてな！」

「全部殺した……まさか、子供までも！」

「クハハハッ！ さいつこうだったぜえ、あのガキ共が死ぬ間際に言ったのは“お母ちゃん”とかじゃなくて、みんなテメエの名前だったからなあ」

そうしてオウルが両腕を広げ、夜空を見上げて笑う。ゲラゲラと、酷く下品に笑う。何が、何がそんなに楽しいの？

今まで一緒に生きてきた仲間を、どうしてそう簡単に切り捨てら

れるの？

沸々と、怒りがこみ上げてくる。けれど、違う。これはオウルが悪いんじゃない。

すべての原因は私だ。私がもつとしつかりしていれば、オウルはこうもならなかった。私がちゃんとオウルとみんなを説得して、絆を繋げられれば、こんな風にはならなかったはずだ。

どうしてあの時、私は死んでしまったのだろうか……

自分が死んだあの日、私はオウルとの仲を、絆を手にしたくて。いがみ合う関係じゃなく、お互いに信頼しあえる仲になりたくて、オウルと一緒に群から離れ、彼に話しを持ちかけた。

結局オウルを説得することは叶わず、いざこざの途中に起きた雪崩から身を挺してオウルを護った末に、私は命を落とした。

私の取った行動は、間違いだったのだろうか？

ただ、周りを悪い方向へと傾けてしまったただけなのでは——そんな気がしてならない。罪悪感が、心に染み込んでくる。

「さあて、昔話はここまでだ。戦いを始めようや」

「ラミちゃん。来るぜ！」

ディメイシヨンの言葉に合わせるかのように、所々で陽炎のように歪む黒い人影が現れる。人影は次第に形作り、半獣人達が姿を表す。私やオウルと同じく、狼の半獣人だ。しかし私やオウルとは違い、顔立ちは狼により近く、上半身は筋肉がより張り詰めている。

青白い眼光を放ち、唸りを上げて私達を睨む。

「狼に次元の悪魔が憑依したやつか？」

「おうよ、この狼どもはこの土地ではかなり凶暴なモンスターとし

て有名だぜ、それらに次元の悪魔をミックスしたんだ。強えぜ」

「上等ッ！ 纏めてぶっ飛ばしてやるぜ！」

デイメイションはそう意気込みを見せる。けれど私は……

「ラミちゃん。決めるのはラミちゃん自身だ。あいつと戦うのも、この場から身を退くのもな。俺は何も言わねえ、けどよ。これだけは言っぜ」

迷ったら負けだ——言うなりデイメイションは自分に襲いかかって来た次元の悪魔を殴り倒し、仰向けに倒れた敵の片足を掴むと、続けて襲ってくる次元の悪魔へと投げつける。そしてぶつかり合い怯んでいる合間に右手を突き出して言い放った。

『ブリットフィスト！』

放たれた鉄拳が二体の次元の悪魔を貫く。良助にも迫っていた次元の悪魔も纏めて後ろから貫き、デイメイションの右腕へと戻り行く。これらすべては一瞬の出来事だ。だから良助は何が起こったのか知る由もなく、ただ茫然と。動きを捉えていたオウルはオウルで口笛をふいてデイメイションに称賛の眼差しを送りつける。

「やるじゃねえか」

「へっへへ、何万、何億だろうと蹴散らしてやるさ」

「そうこなくっちゃなあ。テメエから潰すか？」

お互い不敵な笑みを浮かべ、今にも踏み込んで殴り合いでも始めようかと、攻撃の姿勢を見せた。このままデイメイションに戦わせて良いのだろうか？

いえ、避けては駄目。デイメイションにオウルを任せるわけにはいかない。

「待つてデイメイション」

「ラミちゃん……」

答えは決まったのかい？ そんな問い掛けとも取れる、真剣な瞳^めをデイメイションはこちらへ向けた。私は頷くことで自分の意思を、

覚悟を決めたことを伝える。するとニヤリと笑みを浮かべ、親指を立ててディメイションは返事を返す。

「任せるぜ、ラミちゃん！」

「ええ、あんたは次元の悪魔をお願い」

ディメイションに代わり、私はオウルの前に立つ。

「ハッ、最初に死ぬのはテメエか？ 良いぜ、どっちにしろテメエは——消すつもりだからな！」

唸り声と共にオウルは地を蹴り、私へと駆け出す。

オウル。あんたを止める——そんな想いを胸に、私も身構えた。

チャプター4『遠のく願い』

私が死んだあの日は、とても静かな夜だった。みんなが寝静まった頃、眠れなかった私は同じく目を覚まして落ち着けない様子のオウルに声をかけた。話があるから、ちよつと一緒に来てほしいと。『おいアグ。テメエ何のまねだ。俺をこんなところに連れてきやつて。とうとう俺を追い出す氣にでもなったのか？』

『違うわオウル。今日はあんたとだけ話しがたくて、ここに連れてきたのよ』

なるべく、優しく声を掛けたつもりだった。けれど、そんな態度が癪に障ったのかオウルの表情は不愉快そう。

『俺は、お前と話することなんざねえよ』

棘のある口調で、オウルは外方を向く。やはり聞く耳持たずか。けれどここで退いては駄目だ。今日こそ和解したい。

意を決して、私は口にした。

『オウル。話を聞いて。今のままじゃあんたは孤立してしまう。

だからもう一度みんなと話し合つて——』

『俺はとつくに孤立してんだろが！』

『してない！ 少なくとも私は、あんたのそばにいる。あんたを家族と思つてる』

私が言葉をすかさず返すと、オウルは怒りの形相で飛びかかってきた。抵抗しようと思えば出来た。けれど和解するためには、ここで争うわけにはいかないし、そんなことはしたくもなかった。だから抵抗はせず、なすがままにその暴力を受けた。

『……気が済んだ？』

『テメエ！』

ボロボロにされて横たわる私を見下ろすオウルの表情は、酷く疲れていた。傷付けることが苦しそうな、だけどそうせずにはられないと、攻撃的な衝動がオウルを暴走させている。何度も暴行は繰

り返された。

『オウル……私は。どうすれば良いの？』

『ああ？』

『どうすれば、あんたは私を受け入れてくれるの。どうすれば、みんなと一緒に分かり合えるの？』

『知るかッ！ テメエでも知らねえこと、俺が知るわけねえだろが』
今の私はいったいどんな表情をしているのだろつか。怒りに染まっていたオウルは、私の顔を見るなり言葉を濁らせた。どこか悲しみを感じる彼の声。やっぱりオウルは、どこかで和解を求めているのだと思う。けれど分からないのだ。自分を抑制する方法が、和解する手段を選ぶことすら出来ない状態だから。

オウルは今まで暴れていたのではなく、ただ、もがいていただけなのかもしれない。

オウルの心は荒んでいる。でも私にはそれを治す方法が解らない。だからといって、何も出来ないわけじゃない。

『オウル。だったら、私と一緒に探してくれる？』

『な、何言ってやがる』

『一緒に、探そう。一緒に探せば、考えればきっと見つかるよ』
体中に刺すような痛みが流れた。けど、それでも私は立ち上がった。

『馬鹿かテメエは。何でそうまで』

『家族だからよ……それ以上の、理由なんて必要ないわ』

オウルは私から目を逸らすも、態度はそれほど嫌そうには見えなかった。否定的ではなく、どこか迷いのある様子だった。この瞬間、オウルとの距離を僅かながらも縮められたんじゃないか？

もっと、これからゆっくり話し合っていけば、きっと分かり合える日も遠くはないのでは？

そんな希望の光が、私とオウルの間で輝き出した気がした。

なのに――

『何だ。この音？』

突如として、雪原が揺れ動いた。この地では、年に数回は起こる。そして、揺れが起こったと言うことは。

『これはっ！ 逃げてオウル。雪崩が来る！』

私はこれから訪れる生命の危機を必死に伝えた。間に合うはずもないと分かっているにも、叫ばずにはいらなかったから。

『ア、アグ』

『何を迷ってるの、早く。私のことはいいから』

怪我で満足に動けない私は無理でも、オウルはまだ間に合う。既に群の仲間は避難しているはずだ。オウルと私の状況に比べればまだ安心できる。懸念すべきは、私とオウルのいる此処だ。避難のできる場所が見当たらない。いや、辺りを見渡してみれば、一つだけ穴があった。ちょうど狼一匹くらいは入る横穴が。

『オウル。あの穴へ入って』

戸惑うオウルを引っ張り、無理やり押し入れて私は穴の手前に立つ。私自身を盾に使い、少しでもこの穴に雪が侵入しないようにする為に。

『お、オイ待てアグ。お前はとうするつもりだ。ここ、俺だけしか入んねえぞ！』

『ごめんオウル。一緒に考えようって言ったのに、無理みたい』

山頂を見上げてみれば、白い波が視界いっぱいに広がりこちらへと近づくのが見える。

『だからせめて、あんただけは助けたいの』

『何でだ。何で俺を』

『決まってるでしょ』

家族だからよ——そう答えた私に、オウルが表情を悲しみに歪ませた。そんな彼に、私は優しく微笑んだ。不思議と迫り来る死が怖くなかったのもある。けど、微笑みの理由は、オウルとの別れを少しでも湿っぽくはしたくないから。

『みんなのこと、あんたに任せるわね』

『任せるって、無理だよ。俺はお前のようにはなれねえよ!』

『ならなくて良い。あんたは、あんたのままで、これから変われば良いのよ』

死が、すぐそこまで来ている。もう視界は白で染まっている。もう助からない。でも、私という命が終わる前にせめて、これだけは伝えておこう。

『オウル。愛してる……さようなら』

次の瞬間、凄まじい衝撃が苦痛となり体中を駆け巡った。最期に、雪崩に飲み込まれる瞬間、泣き叫ぶオウルの声が耳に入った。

私の名前を、呼んでいた――

「クハハハッ！ どうしたよアグ。守ってるだけじゃ勝てねえぜ？」

皮肉なものだと思う。命を賭して大切な仲間を守った結果がこんな仕打ちだなんて。けれど世の中すべてが報われるわけじゃない。

無念の死を遂げる生命は数多くいる。自分だけが満足に死ねる保証は、どこにもありはしない。

「オラッ！ こいつは避けられるか？」

「くっ」

「おお、いいねえ。よく避けたじゃねえかアグ。そうこなくっちゃなあ」

過去を嘆いては駄目だ。大切なのは過去ではなく現在^{いま}。現在を変えていかなきゃ、自分の望む未来は来ない。それに、まだ私はマシな方だ。死んでしまったけど、こうして生まれ変わり、こうしてオウルに出逢えた。

敵として現れたのは心苦しくもある。けど、これは寧ろチャンスだ。まだやり直せるはずだ。だから今度こそ、暴力に取り憑かれた彼を止めねばならない。

「オウル。そろそろ、本気を出すわよ」

私は脇を締めて闘気を放つ。そして弓を引くように構え、体を低くして戦闘体勢を取り、オウルを睨んだ。

「本気だあ！ 舐めてんじゃねえぞテムエー！」

拳を振り上げてオウルは突っ込んでくる。そのスピードは稲妻を超える足を持つデイメイションよりも若干速い。けれど見切れないスピードじゃない。それ以前に、私に単純なスピードとパワーは通用しない。

何故なら“時”が、私に味方してくれるから――

突き出した拳は空を切る。その頃には私は既にオウルの背後へと移動を終えている。

「な、消えた？」

そつと、慌てて私を捜すオウルの肩に手を載せた。ビクついて、その手を振り払うようにこちらへと振り返ったオウルは、目を大きく見開いた。

いつの間に――そんな思考を過ぎらせているのだろうか。先程の強気な態度が一変し、緊迫している。後退るオウルに素早く踏み込んで、私は腹部に掌底を叩き込む。叩き込める分だけ、可能な限り打ち続ける。

最後に最大まで力を加えた正拳を腹部に入れると、土煙を巻き上げてオウルは地を滑って行く。不本意な後退りをさせられ、更には唾液を撒き散らす。苦痛のあまりにたまらず腹を押さえて膝を突くオウルの姿に、私は目を背けなくなった。

「く、クソが！ な、何で俺がこんな食らってんだ」

「無駄だぜオウル。マジになったラミちゃんには、誰も勝てねえ」

デイメイションが横から口を挟む。良助とデイメイションの周りには気絶した狼が転がっている。どうやら全部倒して次元の悪魔を強制転生し終えたようだ。

「な、もう倒しやがったのか」

「へへ、ウォーミングアップにはちょうど良いわな」

「クソが、どいつもこいつもムカつく、ムカつくぜっ!」

地面に拳を叩き付け、オウルは悪態を付いた。ふらりと立ち上がり忌々しげに私を睨む。

「テメエら纏めて始末してやる!」

「そいつは無理つてもんだな。言つたろ。本気を出したラミちゃんには、誰も勝てねえってな」

な、ラミちゃん——と、ウインクしてみせるデイメイション。手を出すまでもないと、両腕を胸元に組んで微笑んでいた。

自分が舐められていると、その態度に痺れを切らしたオウルは、私からデイメイションへと対象を切り替えた。殴りかかろうと駆け出すも、それは手前で阻止される。私が彼の目の前に立ちはだかることで。

「なッ!」

バカな——とでも心の中で叫んでいるような、焦りの色が滲むオウルの顎を蹴り上げる。続けて跳躍し、空高く舞い上がるオウルを追い越して、頭上から高速回転を加えた踵落としを決める。オウルが大地に叩き付けられた瞬間、彼の体を中心に亀裂が生まれた。

「ガハッ!」

大の字になり、小さく呻いて空を見上げるも、急降下してくる私を見やると驚愕へと染まる。恐怖に声を張り上げるオウルに私は拳を放つ。ワザと狙いはハズし、頬のすぐ横、大地に拳をめり込ませた。

「……な、何で。何で、テメエの姿を捉えられねえんだ」

荒々しく呼吸を繰り返し、オウルは疑問を口にする。

「ラミちゃんは、時使いのエキスパートなんだぜ」

「時使いだと？ 俺には耐性が付いてんだぞ！ 見えねえわけがねえだろが！」

「ま、基本的に高位の神々や悪魔は空間掌握術をモノにしているから。次元も時間も両方操れるわな。けれどラミちゃんは次元の力が劣る分、時の力を特化してるんだぜ」

デイメイシヨンのいう通り、私は次元を開く、繋ぐ、通る。つまり円、点、線の構築技量が次元の神より劣る分、時流変化の影響耐性と使用に適している。アルビノは私とは逆に次元干渉術という、空間を操ることに適した力を持つ。

「ま、要するにだ。ラミちゃんの時の力は他の神様よりも高次元なのさ。同じ時使いでも、ラミちゃんとは勝負にもならねえ。そんなラミちゃんの力を、お前がどうこうするってえのは無理な話さ」

デイメイシヨンは知っている。私が他の時使いとは一風変わった性質を持っていることを。

一纏めに時の力と言っても、その中にも種類がある。時流の流れに乗って動いたり、または自身に時の影響を与え、肉体を時の逆流で再生させたりなど。使用法は多種多様である。

私の力は、決められた範囲の時流変化。基本的に時の力を操る者は停止や加速に逆流など、世界全体を時流変化させる。一見それは最強と思えるのだろうが、実をいうとそれ程のものではない。

例えるならば、濃度などで示すべきだろうか。通常の時使いが世界全体を時流変化すると、本人の力が全体に広がるため、無駄に消費するだけでなく、効力も薄くなってしまう。逆に範囲を凝縮すると、効力をより百パーセントに近づけることが可能となる。

仮に前者と後者が時流変化を行えば、濃度の高い後者が限られた範囲内だが、時の支配権を得る。故に、時流変化の耐性を持つ者でも、後者を前にすれば並大抵なことでは太刀打ちできない。

オウルの有り様が、それを物語っている。

「クソが……」

悪態付くオウルだが、抵抗の様子が見られない。起き上がること

なく仰向けのまま、手前で佇む私を見据えていた。

諦めたように鼻で笑う。

「……どうしたよアグ。止めを刺せよ」

そう口にするオウルだったが、私は止めを刺す気は毛頭ない。だから大地にめり込ませた拳を引き抜き、彼に手を差し伸べた。

「何の真似だ？」

「オウル。もう一度、やり直せない？」

業は消えないけど、償いはできる。今からでも、変えて行ける。

「……またかよ。いい加減にしろよテメエ。また繰り返すつもりかよ？」

「大丈夫よ。今度は死なないわ。あんたを、ひとりぼっちにはしない」

だから、もう一度だけ、私を頼ってほしい。その願いが通じたのか、しばらく沈黙を決めていたオウルが私の手を掴んだ。血に濡れて、付着した土で汚れた手。私が傷付けてしまった手だ。

傷付けてばかりだ。私はオウルを助けたのに、気持ちはいつもしれ違う。自分が不甲斐ない、齒痒くてしょうがない。

『あの子を頼むわよアグ。あなただけは、ずっとオウルの味方でいてあげて』

そう育ててくれた親が、幼き頃の私にいつも言っていたことを思い出す。初めは群の長の息子であるオウルを守ろうと、義務感からオウルに接してきた。だけど、彼のそばにいる内に、私の気持ちは義務感から、兄弟愛へと変わっていった。

次第に少しでもオウルやみんなのために頑張ろうと考えるようになった。私がしっかりすれば負担が減り、誰も苦労しなくてすむ。時期にオウルもみんなを纏め上げるリーダーとなる。その頃には、私も恥じない良き姉となれるようにと――そのはずが、みんなは私が長になった方が良くないと口にし、戸惑う間もなく流れは傾いてしま

った。

断るべきだった。自分の胸の内をさらして、みんなと共にオウルが良き長となるようにサポートするべきだったのに。あの時の私は、オウルが成長すれば長を譲れば良いと甘い考えを持っていた。

その結果オウルは孤独になり、今の彼を生み出した。すべては私の責任、私の業だ。

今更、罪が許されるなど思っではない。けれど、生きていれば償いはいくらでも出来る。

孤独にしたことを許してくれとは言わない、いくらでも憎んでくれて構わない。代わりに生きて償わせてほしい——そう、切に願う。

けれど……

「オ……ウル」

願いというものは、強く願えば願う程、遠のくものなのかもしれない。

「く、クハハハッ！ ほおら、大丈夫じゃねえじゃねえか！」

腹部に激しい痛みが……オウルの手が、私のお腹を、貫いている。

「ラミちゃん！」

「ラミアグレスさん！」

デイメイションと良助が、私の名を呼ぶ。

意識が一瞬だけ飛んで、気が付けば空を眺めていた。倒れた私の

顔を、さぞ愉快げな表情でオウルが覗き込む。

「さよならだ。アグ」

チャプター5『モノクローム』

ニヤリと、オウルは勝ち誇った笑みを浮かべている。倒れている私の方は、体が痙攣を起こしていた。呼吸を行おうとすれば、傷の痛みと共に体が跳ね上がる。咳き込むように口から血が溢れ出た。苦しい。痛い。死ぬ。どうして、こうなったの？

いろんなことが頭の中で廻り続ける。けれど、考えても答えは出ない。探すのも辛い。考えることすら出来なくなっていく。だからこれは無意識な対応だったのだろう。私は時の力を使い、自身の時間を逆流させて傷の再生を試みていた。けれど一向に癒える気配はなく、それどころか苦痛は増していくばかり。

混乱から疑問ばかりが生まれていく中、胸に衝撃が走り、圧迫感が残る。思わず悲鳴を上げてしまった私は、次には歯を食いしばって弾けるように広がる痛みを堪えた。胸を見れば足が乗せられていた。

どうやら、オウルに踏みつけられているらしい……。

「オウル……」

絞り出した私の声など、耳朶に触れてすらいらない。オウルはただ、面白そうに苦しむ私の様を伺う。

「無駄だぜアグ。どれだけ回復を図ろうが、時の力は使えねえ。俺の手は、毒手なんだからな」

毒手……それは喻えなのだろう。紫色の炎がオウルの右腕を纏う。異質な気を感じる。多分、あれには相手の肉体や精神などに異状をきたす術式が施されているはず。現に私の体は、思うように自由が利かないでいる。

「もうテメエは終わりだよ。これからテメエは苦痛に呻いて、最期は無様に喚き散らして狂い死ぬ」

胸から足を退けたオウルの言うように、私の身体全体に刺激が走り出した。たまらず私はまた悲鳴を上げて、苦痛の根源である腹部を押さえながら大地をのたうち回った。そんな私の姿に満足したのか、オウルは口角をよりつり上げる。

「いいねえ、きつと今度もテメエの死に様は最高だ。血も涎もその他諸々吐き出しちまえよ。アヘツた面でまた昇天しちまえ。ヒヤツハハハ——ぐガッ！」

嗜虐的な笑みを浮かべるオウルの顔面が、唐突に現れた黒い影に弾かれる。頬を押さえて後退り、オウルはその影を睨み付けた。

「テメエ……」

「おお。ラミちゃんの気持ちを踏みにじりやがったな」

影の正体はデイメイションだった。拳を振り下ろした姿勢のまま、怒りの形相でオウルを凄む。二度目だ——デイメイションがこんな怒りを露わにしたのは。今まで、一緒に行動してた中で、数千年くらしいの付き合いになるあいつの怒りを見るのは。

あの時も、こうして自分の想いが伝わらず、傷付いて倒れた私の前に、デイメイションは護るように佇んでいた。

「デイメイション……ダメ……」

そうだ、あの時も私はこうして止めようとして、デイメイションは今のようこちらを向いて、優しく微笑んでいたっけ。いつも、そして誰にでも、デイメイションは言うのだ。

「安心しな。ラミちゃんを傷つけるようなことはしねえよ」

ほら、やつぱり。普段はふざけているのに、周りが抱える不安や想いをしっかりと捉えている。友達を救うことを、第一に考えるんだこいつは。

「とりあえず、ケツ叩き百万セットのお仕置きだな。それでラミちゃんに泣いて謝らせるぜ」

「いや、百万セットって、もはやお仕置きじゃなくて拷問だよな？」
相変わらず、こんな時でも真面目なことは口にはしないのよね。
こいつは。

「わかった。デイメイション。私はあんたを、信じてる」

「任せな。良ちゃん。ラミちゃんを頼むぜ」

良助が頷いて私のそばに駆け寄るのを確認して、デイメイションはオウルに向き直った。

「つつ訳だぜチェリオくん。フルボッコの覚悟はいいか？」

「ハッ！ テメエが覚悟しとけよ。さっき殴った分、百万倍にして返してやらあ！」

お互いが雄叫びを上げてぶつかり合う。取っ組み合いの状態で拮抗するも、オウルがデイメイションの顔面に頭突きを叩き込んだ。まともに食らって顔面が跳ね上がる――が、デイメイションはそこから一步も後退せず、勢いを付けて頭突きで反撃する。

お返しを食らったオウルの眉間から血飛沫が噴き出す。空を仰ぎ、呻き声を上げて地面に背中から倒れてしまっても、素早く受け身を取って立ち上がった。けれどそれも束の間。既に発射体勢を整えたデイメイションの右腕から、ブリットフィストが放たれていた。

反応が遅れ、回避が間に合わず。ボディにデイメイションの放った拳がめり込む。貫くことはなく、オウルの体を遠くへふっ飛ばした。

デイメイションは追撃にと駆け出し、オウルが落下しているであろう、この廃墟から遠く離れた場所へと向かう。きつと私や良助を巻き込まないように、可能な限り遠ざける為にオウルを殴り飛ばしたに違いない。あいつは、そういう奴だ。何だかんだでさり気ない配慮を行動で示す。だからなかなか気付けない人も多いが、長年の付き合いから私にはあいつの意図が読めた。

デイメイションの方は心配ない。問題は私の方にある。

痛みが、増幅している。歯を食いしばって悲鳴を出さないようにするので精一杯だ。

「し、しっかりしてください」

「良助……大丈夫よ。少し痛むだけ」

「少しどころじゃないですよ、血が噴き出しているじゃないですか！ えと、応急処置のやり方は確か……」

良助は急いで自分の上着を脱ぎ、Ｔシャツも脱いで、力いっぱい引き裂いた。包帯の代用に使うつもりなのだろう。

「無理しないで、良助」

彼の膝に手を乗せて、私が声を掛けても、彼は止めようとはしなかった。引き裂いたＴシャツを、私のお腹に巻き始めた。

「無理しているのはラミアグレスさんの方ですよ。ひとりで抱え込んで、ひとりで苦しんでるじゃないですか」

「良助……」

「デイメイシヨンさんは、助けてって言えば、必ず笑顔で頷いてくれるんです」

どうしてそう言わなかったのかと、良助は目で訴えていた。

「知ってるわ。だからあいつには甘えたくないのよ」

あいつとは、常に対等でありたいから。

あいつは私のことを姉貴分なんていうけど、私にとってもあいつは、兄貴分であり、弟分でもある。そう、兄弟みたいなものなんだ。「だから私は、あいつに心配掛けさせたくないのよ。けど、駄目ね。結局、あいつには、世話になりっぱなしだわ」

「デイメイシヨンさん言ってましたよ。ラミアグレスさんは、凄く強くて頼りになるって」

「あいつは、誰に対してもそう感じてるのよ。だってあいつ。いつだって一人じゃない。みんなを背に戦っているもの」

あいつのそんなとくに、私は羨ましいと劣等感を抱いたことがある。義務感とか、使命感とかじゃない。背負っているのではなく、みんなの想いを力にして、支えにして強くなって行く。

私には、絶対に出来ない生き方だ。やろうとしても、空回りばかりするのだから。嫉妬心が爆発して、私は本人に一度、気持ちをぶ

ちまけたことがある。

「そしたらあいつ。こう言ったのよ。『俺はそこまで難しくは考えちやいねえし、そんな器用に生きるのは面倒だからやんねえぜ。自分の直感を信じて突っ走ってるだけさ』ってね」

「僕にも同じこと言っていました」

「ふふ……、だから、あいつが羨ましいのよね……自由すぎて……本当に……」

駄目だ。眠くなってきた。傷は悪化していくし、寒気がする。死が近付いている。

「ラミアグレスさん！」

「ごめん良助……。ディメーションに伝えてくれる。私の生きてきた中で一番幸せだったのは、あんたに出会えたこと……だって」

「駄目ですよ！　そういうのは、生きて伝えないと！」

そうしたい。けれど、もう私は助からない。体に廻る毒の治療法も無い以上、どうすることも出来ない。このまま、死を待つだけだったなら、伝えられることは、伝えておきたい。

「悔しいけど……いくら私が嫌だと思っても……死からは逃れられないわ」

「ラミアグレスさん……」

「良助。伝言お願いね……」

そつと彼の胸元に手を添えて、私は囁いた。もう、視界がぼんやりしてて、彼の表情を拝めないけれど、鼻をすする音から泣いているのが判る。情けない、私はいつまでも愚かだ。平和な世界で生きているこんな子に、死の重さを体感させてしまった。罪を重ねてばかりで、自分が嫌になる。

ああでも……そんな自分も今日で終わるんだ。

この目を閉じれば、楽になる。今度、生を受けるなら、より強くなりたいな――

『逃げないでください』

……良助？　何だろう。体が温かい。眠気も徐々に失せて、醒め

ていく。開眼した視界に映る良助を見て、私は驚きに溜息をもらした。

リヨウスケの姿が変わっている。

黒髪が真紅へと変わり、緩やかに輝きを放ち、背中からも朧気のある虹色の翼が生えている。力強く真っ直ぐに、羽根を広げていた。ホタルのように輝く粒子が、その付近で点滅を繰り返している。

優しく、暖かい力を感じる。もしかして、これが、デイメイションが良助に抱いていた、不思議な感覚の正体？

「良助……君はいつたい。何者なの？」

「良助？ 残念ながら彼ではありませんよ。しかし、いずれは彼と私が一つとなり、デイメイションさんとまた共に、奴に戦いを挑むことになるでしょう」

「デイメイションと？ 良助と君が、一つに？」

「ええ、申し訳ないですが、話している時間がありません。ですから、あなたを蝕む毒だけは取り除きます」

翼は輝きを増す。私の体も同じ輝きを放ち、痛みが和らいでいく。何だろう、不思議な感覚だ。決して不快ではなく、寧ろ気持ち良くてうつとりしてしまう。遠い昔に忘れてしまっていた、母親に包まれていた頃の温もりを思い出す。ちよつとばかり気恥ずかしいではあるけど、嫌な感覚じゃない。

「すみません。そろそろ、限界のようです。良助を、彼を頼みます」

あまりに心地良い抱擁感に呆然としているのも束の間、気持ちの良いこの感覚が突然ふわりと消えてしまった。同時に意識が覚醒した私のお腹に良助が倒れ込む。塞がってない傷に頭が乗った為に痛みが走り、より意識がはつきりした。

くっ……い、痛い。どうやら彼の人格は、意識の無い良助と入れ替わったようだ。まあ、傷は時の力で癒えて行くけど。せめて、倒れるなら私のお腹ではなく、太股か胸辺りにしてほしかったな。

「ふう……でも、助かったわ」

これは良助に礼を云うべきなのかしら？ まあ、どちらにも恩は

あるわけだし、両方に礼を言っておこう。いつか恩を返さないかね。
「ほほう、良助君にはそういう力も備わっているのですか？　これは興味深いですね」

気配——それも正面から。すぐさま私は身を起こし、良助を後ろに寝かして身構えた。

空間が歪み、黒い穴が生まれる。中から女性が現れ、軽快な足取りで着地を決めた。

「やあやあ、初めまして」

白い髪をミディアムに整え、ルビーのような輝きと色を宿す円らかな瞳。その身を漆黒のロングコートに包み、腰、腕、太股に色彩の深みある革質のベルトを二枚巻きにし、ラインをより強調して女体を際立たせている。袖口から覗く手と、顔の肌は限り無く白に近いモノクロ——第一印象として抱いたイメージがそれだった。彼女は柔滑な物腰で御辞儀してみせた。

「私、マダン・ヴォルフイーユと申します。以後、お見知り置きを。ラミィアィグレスさん」

自己紹介を終えた彼女は顔を上げて、妖艶な笑みを浮かべた。

チャプター6『ヒートアップする彼女』

「マダン・ヴォルフイーユ？」

「ええ」

綻ぶ唇。細めた血色の瞳を私に向けて、彼女は頷く。

マダン……そういえば、このインフィニットに来る前に強制転生させた次元の悪魔も、クランパイアという世界で魔王マダンを名乗っていたと、デイメイション達が語っていたのを覚えている。

それと関係があるのだろうか？

「ああ。あれは私の偽物ですよ」

その疑問を問い掛けた私に彼女は、これまでの経緯を教えてくれた。

彼女、マダン・ヴォルフイーユは旅をしていて、次元の悪魔とも敵対していること。アルビノの姉であり、次元干渉術を使えることなどを。

「実は、その魔王気取りの偽物の私がいた世界で良助君の力を目にしましてね。彼はタキオンに狙われる可能性があるですよ。私はそんなタキオンの魔の手から彼を守るためにきた、正義のダークヒロインって訳です」

「いや、ダークヒロインが正義って言うのはどうかと思う」

「えー、だってノーマルヒロインはあなたのポジションですから、被っちゃいますし」

いや、私がヒロインかどうかは分からないけど。というか何の話よ。話の主旨がズレているじゃないの。

それでも胸を乗せるように両腕を組み、マダンは眉間にしわを寄せて思索に耽る。いや、そんな真剣に考えなくても……と、私が呆れて見ていると彼女は何かを思い出したのか、あつと声を上げる。

「そっいえば忘れていました。ラムさん。体の調子は？」

「え、疲労は残っているけど、傷はもうだい——ッ！」

答える私の頬に、細く綺麗な手を優しく添え、その所作とは強引に彼女は顔を近付けて、唇を重ね合う。

……へ？

「ん！ んんッ！」

ちよつ、な、何でいきなりキスなの！

口の内で甘い味が広がって。力が、抜けてく。まるでとろけてしまふような、変な感覚だ……って、駄目ッ！

正氣に戻って無理やり引き剥がそうとした矢先、彼女は私の両手を掴んで押し倒す。仰向けの私に覆い被さる形となった。

胸と胸が押し合う。ここでもうやくお互いの鼓動が高鳴っている事に気付いた。なんていうか恥ずかしくて、圧迫されて嫌に息苦しい。荒い息が、唯一空いていた呼吸器官の鼻から漏れてしまう。

「む、ムヴッ！」

し、舌が入ってき——この、いい加減に——

「しろッ！」

「おぶふッ！」

どうにか足を彼女の腹まで潜り込ませ、力の限り蹴り上げた。急ぎ身を起こして、今度は呼吸を整える。体が熱い。まだ、心臓が激しく胸を打ち続けている。この羞恥心を生み出した元凶に、私は怒りを込めて言い放った。

「いきなり何のつもりよ！ ……って、あれ？」

体が軽い。さっきまでの疲労感が何処へやら、活力が溢れてくる。もしかして、先程のセクハラ紛いな行為は、私の体調を良くするために？

だとすると、私は悪いことをしてしまった。相手は善意で行ったのに、暴力を振るってしまうとは……。

「ひどいじゃないですか。まだスタートラインなのに！」

違った！ こいつは本気で私にとんでもない事を仕出かそうとし

ていた。

「回復させる為だったんじゃないの!？」

「あ、いえ。回復も兼ねてますよ。ただやはり、どうせならサビま
でやつちやいたいなあとと思って」

蹴られたお腹を押さえながらマダンは言うが。もうこれ弁解どころ
じゃなくて、本人の欲望且つ希望入ってんじゃない。

「ふふふ、まあ良いでしょう。良助君を味見したら、あなたとはも
う一度、ねえ？」

おぞましい余韻を呟き彼女は、指を唇に添えて舌なめずりをし、
妖艶な笑みを浮かべて私を見る。瞳が猟奇的に妖しく煌めいたのを、
私は見過ごさなかった。

戦慄から自分の身に異常はないか、思わず身体を抱き締めて確認
してしまった。

ああ、この感じはあの時に似ている。昔、とある次元の神——猿
の半獣人の男——が、『loveさ、俺はあなたにloveなのさ』
と、訳の判らない告白がてらに『あなたと合体したい』と、OKも
出していないのに卑猥なプロポーズを申し出た事があった。生理的嫌
悪感で戦慄いた私は、返事代わりに右ストレートを顔面にめり込ま
せ、気が付いたら全速力で逃走を決め込んでいたという、そんな嫌
な記憶がある。

彼女から、あの変態猿と同じ匂いがした。

だからなのかもしれない。

「さてと、それじゃあ良助君を——」

「止めるッ!」

「グハオッ!」

拒絶反応を起こした私は、反射的に思考よりも早く体が動き、良
助に歩み寄る彼女の鳩尾にターンソバットをかましていた。

「ひどすぎますよ。いきなり蹴るなんて」

涙目でこちらを見据えるが、しまったことか。私は良助とマダンの間に立ち、彼女に蔑みの言葉を返した。

「良助に近寄らないで変態」

「ええッ！　ちよっ、もう私変態扱い？　否定はしませんが、会って間もないのにぞんざいすぎませんか？」

「変態は否定しなさいよあんた」

そんなんだから、ぞんざいな扱いされているんでしょうに。

「まあまあ、落ち着いて。それよりもどうせ殴るなら、私ではなくあちらの方を」

私を宥めるように言いながら、彼女は虚空を指差す。背後を振り返って見上げてみれば、空間に渦を巻くような歪みが生まれている。遂には黒い穴が開き、中から次元の悪魔が姿を現す。

弓を片手に、背中には三叉の矛を背負う。コウモリの翼を広げて空を舞う姿を目にしたマダンが、瞳を輝かせて所見を述べた。

「わあ、これまた可愛い天使なこと。恋のキューピットみたいですね」

何言ってるのこいつは。どう見ても凶悪な豚の面した怪人じゃないの。フンドシー張羅の剛毛オークに翼が生えたバージョンでしょ、どう見ても。

などと呆れていたら次元の悪魔が即座に弓を構えて矢を放ち、マダンの胸に見事命中——って。

「ちよっ！　マダンッ！」

何で避けないのよ！　躲せるスピードでしょ。何で平然と笑顔で立ってるのよ。

「ワオッ！　ハートを射抜かれちゃいました。これって恋の予感？　死の予感の間違いでしょ！」

何故か嬉しそうに自分の胸に刺さった矢を見ているし。というか、どうして何ともないわけ？

テンパる私とは対照的に、次元の悪魔の方は至って冷静だった。いや、単にそういう冗談すら理解出来てないのかも。マダンに弓矢が通用しないと見るや、背中に背負っていた矛を斜めに構えた。

残像を残す程の速さで左右に動き、私達を翻弄しながら距離を詰めて来る。そして距離が一定まで縮まると、次元の悪魔は閃光を想わせる速さでマダンに突撃し、矛を腹部へと突き刺した——かに見えた。

「フフっ」

両腕を胸元に組んで、不敵に微笑むマダン。彼女を突き刺した次元の悪魔の背後に佇み、突き刺された彼女と同じポーズを取っていた。

「残像だ！」

凄い。私ですら見切れない速さで相手を翻弄するなんて——て、あれ？

なんか、『残像だ！』って発したマダンが消えちゃったんだけど。と、言った私の方が残像です」

ウオイッ！ 意味ない。意味ないからそれ！ 何で敵の攻撃避けたと思っただ方が残像なわけ。使い方がデタラメでしょうが。もう何がしたいのこの人。

「まあまあ、安心して下さいよラムさん。ノーダメですから大丈夫ですよ」

「口の端から血が垂れてるわよ！」

「違いますよ。これは口内に含んでいたトマトジュースです」

何故に見え透いた嘘を付くッ！

いやでも、最初の一撃もそうだけど、明らかに致命傷のはずなのに、何で彼女は平然としているのだろう。そういえば、衣服に血が染み付いてない。それに、あの次元の悪魔の突きを諸に受けておきながら、彼女は一步もその場から動いてない。

何よりも不可解なのは、次元の悪魔がマダンの腹に刺した矛を、必死に引き抜こうとしても抜き取れずにいることだ。

「あん。強引ですね。でも私、身体はムチムチですけど、体内なかの締め付けも凄いですよ」

「お前いい加減にしろ！」

「えー。これでもオブラートに包しんで上品に言っただけですけど？」

“下品に”の間違いでしょうがッ！

まったく、本当に疲れる。女版デイメイションだね。下手したら本人よりも質が悪いかも。

「ふむ。はてさて、流石にラミさんもツツコミ三昧で疲れて来たようですし——」

天秤のように手を上げてやれやれと頭を振るい。マダンは自分の腹に刺さった矛を掴む。この瞬間、彼女の瞳に殺意の光が宿った。背筋が凍り付くような、とても冷たい光が。

「そろそろ……死にますか、あなた？」

闇、邪悪、狂気——いや、すべてのマイナスを複合して喻えようと物足りない悪質な艶笑が、彼女の表情に浮かび上がる。次の瞬間、矛の三叉が鈍い音を立てて折れた。

自分の武器を握力で破壊されるなど微塵も思っただけのさう。折れた矛を見て狼狽している。けれどそれも一瞬のこと。既に間合いを詰めたマダンに頭を鷲掴みされ、思考を停止させられる。「ごきげんよう、フフ」

何がおかしいのか、潰した頭の破片を強く握り、指の隙間から漏れる、脳髓のカスが混ざる血を自分の舌に垂らして、彼女は恍惚に微笑む。並みの者が目にすれば嘔吐してしまいそうだ。血や死体を見慣れている私ですらも恐怖を抱く。

まるで正反対だ。アルビノとデイメイションと似ているようで、まったく非なる存在。

これが……マダン・ヴォルフィーユ。

チャプター7『予想外のエスケープ』

違う。まるで違う。このマダン・ヴォルフィーユという女性は、表面上はアルビノに近い容姿と力、デイメイションのように陽気な性格を雰囲気にも出しているけど。その奥には、本質たる闇が潜んでいる。

根本的な部分が大きく違う。

「おやおや、まだ出てきますね？」

彼女の言うとおり、空に無数の巣穴が生まれ、先程倒した次元の悪魔が群をなして現れた。ざっと数千体はいるであろう、空を覆い尽くす程の凄まじい数。あれを全て相手にするとなれば、さすがに私やデイメイションでも困難を極まる。

それでもマダンから余裕の笑みが絶えることはなく、寧ろ燃えてきたとばかりに鋭い眼光を不敵にギラつかせて群を眺めていた。

「良いでしょう。血の雨をこの大地に降り注いであげますよ」

左手を天に掲げると、狂気を宿して大きく瞳を開眼する。次の瞬間、全ての次元の悪魔に空間の歪みが浮かび上がり、それらは渦巻いて黒い穴を生み出す。

次元の悪魔の体を囲う無数の黒い穴。見ればマダンの付近にも空間の歪みが。

「先ずは、一つ」

自分の手前で渦巻く空間歪曲へと拳を放つマダン。次の瞬間、空中を舞う一体の次元の悪魔が大地に落ちた。

頭の欠けた姿で。

「二つ、三つ、四つ」

軽くスナップをきかせて拳を放つ毎に、先の一体と同じく、肉体の部位を破壊された次元の悪魔が落ちて行く。何が起きているの

かは、次元干渉術というものを知る私だから解る。

敵一体につきワームホールを四力所配置して、自分の手前にはそれらに繋がる入口を置く。これによりマダンが穴に目掛けて拳を突き放てば、拳は空間を通り抜け、ランダムで配置した出口へと向かう。

いくら瞬発力があろうと、手前から、それも四力所のどれかから唐突に拳が放たれれば――躲すのは至難の業だ。無数のワームホールを生み出しても、拳一つ通る程度の穴だ。マダン自身は消費を抑えられる。強大な広域魔法よりも節約されるし、相手側を混乱へと誘える。一対多に向いた戦法だ。

けれど、数が数だけに、やはり時間を費やしてしまうのが難点だろう――と思われたが、要らぬ心配だった。

「ああー、数えるの面倒ですねえ。みんな死んじやえー」

軽口とは正反対にマダンは、腕から先が見えない程の、疾風怒濤の勢いで空間歪曲へと打ち込んだ。空中にいる次元の悪魔の群は瞬く間に破裂して行き、マダンの宣告通り、血の雨を大地に降り注ぐことを強制された。

奴らが次々と空で弾け飛ぶ様は、まるで咲き乱れる花火を想わせるが。撒き散らしているのが火花でなく、どす黒い血や臓器という事実を知ると、嫌に気分を害する。不快感を、催さずえない。

誰だつてそうなるはずだ。この光景には血を見慣れた獣とて足が竦む。

なのにこの女は――

「ククク――アッハハハ！　きたねえ花火だ！　って、言うべきですかね。ねえ、ラミさん？」

くるりと振り返って血の雨を背に、さぞ愉快的様子で天秤のよう

に両手を広げ、私に問い掛けて来た。幼子よろしくの無邪気な笑みを浮かべて。

戦慄の闇——初めて目にする者は、きっと私と同じ感覚に見舞われるだろう。背筋に寒気が走り、霧に包まれた世界に身を置くような不安に駆られるはず。

「んん、どうしました？」

「……」

相も変わらず血に濡れた笑顔をこちらに向けるマダン。しかし私は彼女に言葉を返さず、押し黙っていた。

警戒心が膨らむと、どうしても簡単な会話にも対応が利かなくなる。そう、目を離しちゃいけない。気を抜いてはダメだと、警戒信号が光を灯すのだ。

「何だか怖い顔をしていますね。それはまあ良いとして、とりあえず良助君を——」

狼の頃から培っている野生の直感が、私をいざなう。良助の前に立ち、マダンの道を遮るという行為に。驚いた様子もなく、彼女は両腕を胸元に組んで顎を撫でる。

「……ふむ。なるほど。ラムさんあなた。本能的に私を悪だと見ましたね？」

品定めに似た細い目線。彼女の核心を突いた問い掛けに、私はただ黙って身構える。これが、私の答えだ。

良助を彼女に渡してはいけない。安全の保証など、普通に考えれば皆無に等しい。タキオンとグルの可能性だってある。私を助けたことや次元の悪魔を殺したことが、彼女を味方だと決定付ける要素にもならないだろうし、下手をすれば奴ら以上に悪質な企みを秘めている可能性だってある。

どちらにしても、タキオンはもちろんのこと、彼女にも良助は渡せそうにない。

「まあ、私の本質が悪であることは否定しませんよ。私を知る者は皆、私を墮落の権化と称しますからね」

「だったら尚更よ。あんたには、良助を渡せない」

「何だか、この展開ってあれですよ。モテモテ少年を二人の彼女が奪い合う。『ちよっと、良助は私のモノよ!』『何言ってるのよ。良助君は私の方が数百倍好きなんだから!』『きい! 勝手なこと言わないでよ! 良助兄ちゃん! 私! 私! 私!』」
「勝手な達アバズレビッチなんか! 渡さないんだから!」
「な修羅場ってやつですね?」

全然違うしね! 思考が腐ってやがる。こいつの頭はかなり腐っている。二人のはずなのに何故か妹までも乱入しているし……そんな私の蔑みの視線を感じても、構わずマダンは一人芝居を演じている。見ているこっちが恥ずかしくなるくらい、役に徹していた。

「んふふ。いやはや、燃えますね。このままバトルに突入します?」
「戦う必要までないわ。あんたが消えてくれれば解決する話よ」

「無理」

蹴りを放ち、風の刃に換えてマダンに当てた――のだが、先程の次元の悪魔同様に彼女の身体に傷を刻むことなく、過ぎ去ってしまった。

「あの、普通は最後まで様子見ませんか? 無理って言った瞬間攻撃って……冗談の可能性だってあるでしょうに」

「冗談と見せかけて本気ってフエイントもあるでしょ。それに、冗談を言える場面だと思う?」

殺気立った雰囲気、主に私が剥き出しにしている攻撃の意思を汲み取っているくせに、この女は断った。これは当然の処置だ。

「ごもつともですね」

同意するなりヘラヘラ薄ら笑いを浮かべるマダンは、手前に空間歪曲を作り出し、手を入れた。中から取り出したのは、漆黒のグローブ。甲に組み込まれているレリーフに彫られているのは、砕け散ったブラックハーツ。まるで、彼女という存在そのものを闇であり、悪であると誇示している。そんな印象を受ける彫刻だ。

「良いでしょう。あなたがやる気と言うならば、こちら本気で」

相手しますよ。手加減で勝てるとは思えませんしね」

などと口にした瞬間、マダンを中心に漆黒のオーラが螺旋を描き舞い上がり、弾けるように波紋を放つ。緩やかとはいえ、衝撃波から圧倒的な威圧感が伝わる。思わず身震いして、私は急ぎ良助を抱えて後退り距離を取った。

この女、本気で私を倒しに掛かる気だ。

「眼に焼き付けなさい、ラミアアグレス！」

グローブを装着したまま硬直。このレリーフを眼に刻めばかりに翳して、彼女は発した。

「これが私。マダン。マダン・ヴォルフィユ。悪魔を上回る墮落の権化なり！」

漆黒の風が吹き荒れ、彼女を包む。中央に潜む闇の原点から、朱に輝く瞳が見えた。

「さあ、始めましょう。淫乱に狂いし穢れの円舞曲をッ！」

言い放つと共に嵐は抜われ、マダンが姿を現す。背面から影の片翼が羽ばたき、粒子の羽毛を散らす。血色の眼光には熱を感じる。信念や戦いに対する覚悟を宿しているのが、ひしひしと伝わってくる。

強い。間違いなくマダンは最強の部類に、玉座に腰を据える風格と力を有している。

勝てるのだろうか？ いや、勝つ必要は無い。今の私がすべきことは、マダンとの戦闘ではなく良助の安全を確保することだ。まずはコイツを良助から離れさせる。力を拳に溜めて放出、エネルギー弾を放って様子見といこう。

「やめて下さいよ。ネチネチやるのは面白くないですって」

なっ——躲した？ それも瞬く間に私の手前まで。く、ならば頭を、蹴る。これも屈んで避けられた！

けれど、ここから踵を落とすなら、どうッ！ ぶつかる感触と弾ける音、マダンの足が衝撃と同時に大地に沈む。これは手応えあり——じゃない、頭上で両腕をクロスさせて、私の踵を挟むように止

めた？

「駄目ですよー。ここで踵落としては隙が生まれちゃいますって。あそこを狙ってくれて言ってるようなものですよ」

「なっ」

こいつ、変な所を――

「触るな！」

「わおっ」

地に付けていた片足を跳ね上げ、そのまま手を伸ばしてきたマダンの首を切り裂くように薙いだ。けれど彼女は咄嗟に上半身を後方へと反らし、私の蹴りは空を切る。迂闊だった。誘いを掛けていたとは。

まんまと罠に嵌った私は空振りした足首も掴まれ、頭から落ちてしまった。良助を抱えたままなのが仇となったか。

「くっ！」

「んふふ、つつかまえた」

やらせるわけ、ないでしょ！

「おっ！」

足を力の限り振るって拘束から逃れた私は、良助を抱えたまま一旦大地を転がり、体勢を立て直す。間合いを確保し、良助を地に寝かせてからマダンへと踏み込んだ。そのまま勢いを載せて体当たりをと試みたが、やはり体をすり抜けてしまい、前のめりに大地へと倒れてしまった。

「おやおや、らしくないですね。クールなあなたには似合わない姿ですよ」

「……お生憎様。恥をかくのは慣れてんのよ」

無様に地を這うことも、敗北を味わうことも、惨めな思いは存分に味わっている。見栄を張れる程、私は自分を過信し、傲り高ぶっちゃいない。

「あんたは、私のことをクールって言うけど、それは間違いよ」

だから自分を落ち着かせようと、形から入ろうと冷静を装ってい

るに過ぎない。起き上がる最中、それをマダンに伝え、屈んだままの姿勢で横目に彼女を睨み付けた。

「ほう。ならば何故あなたは、本能に任せず。頭で考えて戦うのですか？」

首を傾げるマダンは続けて口にする。私を小馬鹿にした口調で両手を広げながら。

「間違えているのは、あなたの方ですよ。どうして本能に任せるべきところにまで、あなたは思考を張り巡らせるのです？」

「どうということよ」

やれやれと、私の問い掛けに対しマダンは落胆のかぶりを振るう。「獣ならば、考えるな。感じるがままに野性に身を委ねて戦え、と言っているのですよ私は」

「大きなお世話よ。私は、私の決めたスタイルを貫く。あんたの指図は受けない！」

困りましたね——そんな意思を表すかのように、彼女はこめかみに指を押し当てて難色を示す。けれどそれも束の間で、気持ちを切り替えたのか、何かを決めたような頷きをして、こちらを見定めた。「良いでしょう。あなたが決めたスタイルなら。それ以上口にするのは野暮ですね。それに、自分の信じたモノを私が粉々に打ち砕くのも、悪くはありません」

悪戯を思い浮かべた悪ガキのように口元を釣り上げ、マダンはくるとステップを踏み、ターンを決めて格闘の構えに入る。

「舞うように、嘲るように」

言うが如し跳躍、回転を加えて回し蹴り——かと思いきや、ガードした瞬間にマダンは上段蹴りから下段へとキャンセルして叩き込んだ。膝を曲げられて体勢が崩れた私の顎にすかさず掌底、続けて肘をがら空きになった鳩尾に、ラストは苦痛のあまりに“く”の字に折れて吐血する私の頭を掴み、投げつけて地べたに這わせた。

一秒でも過ぎただろうか？ いや、ほぼ一瞬の出来事だ。それだけ機敏で、流れ舞う攻撃の連携。そして今も攻撃は終わっていない、

追撃に私の背中を突き刺すような勢いで踏みつけた。

今度は逆に身を曲げられ、思わず苦痛に呻きを漏らしてしまった。そんな私の無様な有り様をも意に介することなく、背の上でターンを決めて再度踏みつけた。背中の肉を捻られ、腹は地面をその勢いで擦られる。板挟みな二重の苦痛と容赦ない踏みつけに、堪らず私は悲鳴を上げ、じたばたみつともなくもがいて、這うように脱け出した。

「く……うう」

痛む身体を支えて立ち上がる私を見るなり、マダンの表情が恍惚に綻ぶ。

「うふふ、可愛いですねえ。好きですよ。その表情^{かお}」

「悪趣味よ……あんた」

腹立たしく思えるが、やはり強い。ちゃんと良助への配慮を視野に入れ、攻撃は地味な近接を重点においているも、一撃一撃に容赦なく力が込められている。

ただ、食らって解ったことがある。今の所、マダンは私を殺すつもりは無いということだ。

「その様子だと、何故殺しに掛からなかったのか、疑問に思っているようですね」

先程の連携技、私を地面に這わせた時といい、命を断つ攻撃を放てたはずだ。にもかかわらずマダンは打撃ばかりを当ててきた。

「あんたは、相手を殺すのに躊躇う性格はしてないはずよ」

私をさつさと殺して、すぐに良助を回収して去ればいい話なのに、それをしないのは何故なのか、それを聞き出したい。

「疑問にお答えするとなれば、そうですね。私はあなたにも用があるので。良助君と一緒にあなたも拉致しようかと」

「抵抗するなら、倒してでも？」

イエスと首を縦に動かし、マダンは再度攻撃の姿勢へと入った。

「あなた自身の実力を見定める良い機会ですしね。遠慮はしませんよ。全力で掛かってきなさい」

「そう……なら、そうさせてもらっわ」

軽く跳んで身を捻り、獣化して地に立つ。狼の姿で――

「戦うと言っ訳ですか？ ふふ、良いでしょう。掛かってきな……ふえっ？」

逃げる！ 良助の襟を歯で噛んで、ヒョイと背中に乗せ、全速力で逃走を試みた。わざわざマダンのペースに付き合う必要など無い。良助に危害を加える気も無く、私を殺す気も無いなら、それを逆手に取り戦い回避した方が幾分マシだ。そのままデイメイションに合流しよう。

「……にやんですと！？」

背後からマダンの間抜けな声が聴こえたが、気にせず私は駆け抜けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5685i/>

ディメーション アドベンチャー！

2011年2月13日15時55分発行